
その道、遙か遠からんや

うしおなとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その道、遙か遠からんや

【Nコード】

N5228N

【作者名】

うしおなとら

【あらすじ】

「闘神大会」それは宙に浮かぶ豊かな闘神都市、その恩恵に肖るうとある者が作り上げた街で年に一度行われるトーナメント制の闘技会。そこに現れたのはJapanより攫われて来た一人の少女、そして彼女の記憶に引っかかる面影を持った一人の剣士。ゲーム進行と同時で書いて行きますので深い設定とかは知らずに書きます。ツッコミ、酷評はドシドシお願いいたします。

一戦目（前書き）

これはかなりのチャレンジな気が……

『のほほん』の方もよろしく願っています

一戦目

私の中の最初の記憶。

それはおつちよこちよいでダメダメな、けど優しくであつたかい姉さんと一緒にいたこと。

でもどうしてかはわからない。

だって私には姉さんなんていないんだから。

私の家族、私を娘として、妹として扱ってくれる人たち。

Japanにあるとある村の小さな農家、そこに私の家族はいる。そこに居るのはお人よしのお父さんと逞しいお母さん。

それと『侍』になろうと頑張っている私の兄さん。

農民は侍になてなれないってみんなが兄さんに言う。

でも兄さんは侍になろうと頑張っている。

山の中を走り回って、川の中を泳ぎまわって。

太い棒を手にとって振り回して、ホントは地面を耕すための鍬を刀に見立ててみたり。

みんなは農民は侍になれないって兄さんに言う。

でも兄さんは侍になろうと頑張っている。

そんな兄さんを、私はこっそり応援している。

兄さんに『なんで侍になりたいの』って聞いてみたことがある。

そうしたら兄さんは一人の侍のお話を拳児のお爺ちゃんから聞いたからって言った。

拳児のお爺ちゃんは村の長者様。

昔沢近様の所に婿養子に入ってたって聞いたことがある。

拳児のお爺ちゃんは昔は侍の一人だった。

この近くを治めている小早川様、そこに仕える侍の一人だった。
ある時愛理様に見染められて本当の侍の一人になった。

兄さんは拳児お爺ちゃんのお話を聞いて、『伝説の侍』のお話を聞いて、侍になりたいって思う様になった。

お父さんは反対していた。
お母さんも反対していた。

二人とも兄さんに危ない所に行ってもらいたくなかったんだろうと思う。

何時死んでしまうかもわからないようなところに行ってもらいたくなかったんだろうと思う。

私自身も、兄さんに死んでなんか欲しくない。

幸い私たちのいる村の土地は肥沃だ。

少し、おなががすいて可愛い音を立てることもあるけれど。

でも年貢も激しすぎることも無く、私たちはしっかりと食べることだって出来る。

飢え死にってしまう人なんていない。
とっても平和な村。

でも兄さんは……行ってしまった。

兄さんが12歳になろうかって頃、私が8歳になろうかって頃。
兄さんは行ってしまった。

それから結局7年間、兄さんは帰って来ていない。

お父さんは泣いていた。

お母さんも泣いていた。

私も一緒になって泣いていた。

私の中でこんなにも兄さんが大きな存在だって、そう私は思い知ら
された。

水を汲むのも、ご飯を作るのも、畑を耕すのも。

山に行くのも、川に行くのも、こっそり長者様のお屋敷に行くのも。

私と兄さんはいつも一緒だった。

……違う、かな。

私はいつも兄さんの背中を追いかけていた。
兄さんに置いてかれないようにするため。

でも兄さんはいなくなつた。

朝起きても、昼水を汲む時も、夜寝る時も。

何度何度何度何度繰り返しても、いつものように繰り返しても。

……いつものように兄さんにはいなかった。

そして昨日……そう昨日。

何か……あつて……。

赤……朱……紅……。

そうだ、どこかが赤に染まって、丁髷姿の、真っ黒の刀を持った人がいて。

ッ!?

チュンチュンと小鳥の鳴く声がする。

頭が痛い……。

スツと手を頭に寄せてみると目に入るいつものボロイ服。
お母さんが織ってくれたんだっけ、ツギハギだらけだ。

頭の痛みはまだそこそこ。

でも……ここ、どこ？

私こんなところ知らない。

薄っぺらい意味をなさない布団なんかじゃない。

長者様の所だけで見たことある、いっぱいの羽毛の詰まったふわふわの掛け布団。

床は硬い板張りじゃなくって、やわらかい畳の感覚。

近くで炭を燃やした囲炉裏が見える。

ぐるりと見渡せばわかる。

こんなところに私はいなかった。

絶対に、絶対に、絶対に。

でもそれより……どうして私、前が肌蹴てるの？
なんで下に何も履いてないの？

……えう……。

ちっ、ちがつ……一人でそんなことしてない。

でも……違うこと無い、事も無い。

私も……その……一人でやったことも……うう……。

でも今日は……違う……から。

「…………くあ…………ああ、起きたのか？」

…………え…………？

なんで隣に、その…………裸の男の人。

「初物、中々に良かったわ」

バツ布団をめくって立ち去って行く男の人。

しっ、下も…………着てない…………。

顔が熱い…………。

逸らさない…………。

そうして私が写した視線の先。

真っ白な布団の上に存在を示す朱。

…………ホント？

二戦目（前書き）

こんな時間まで何やってるんでしょ

二戦目

おかしい、そう彼女は思う。

何がおかしいって全部おかしいのだ。

朝起きたら見たことも無い所に居て、そこは今まで住んでいたところなんかよりずっと綺麗で。

きつと一生まともに味わうことなんて出来ない畳張りの部屋に居るのだから。

「……嘘……、でも、だって……違ってくる……」

でもそんな事よりももっとおかしいことが彼女に身には起きている。

『朝起きたら服が肌蹴っていて、裸の男の人が隣に居ました』。

『真っ白な布団、その上には真っ赤な染みがありました』。

彼女とはいえそのような性の知識はある。

Japanは幼い人間でも契りを結び、夫婦になることなんてしょっちゅうだ。

実際彼女自身もう十五。

見合いを持ちかけられたことも、告白を受けたこともある。

たまたまそれが自分と大して変わらぬ身分の男だった。

だから彼女は生娘のまま、今の今まで生きていたはずだった。

「……知らない人に……私……ッ」

ボロボロと涙が彼女の頬を伝う。

「お父さん……お母さん……」

今の状況、それは彼女にとってとても恐ろしいことだった。

知ってる人間も、知ってる風景も、どこも彼女には存在しなかった。

そんな状況で、彼女に付きつけられた事実。

『犯された』という、変えようもない事実。

「ヒツ……ああッ……ああ……ああ……ッ」

嗚咽を漏らし、咽び、彼女は泣く。

女として守らねばならないものの一つ。

本当に捧げようと、そう思える人にこそ捧げるべきもの。

それが自分の意志とは全く無関係に、散らされていたのだから。

J a p a nの女性は貞操観念が基本的に高い。

生娘ということは、それだけで非常に価値のあるものだと考えられているのだ。

一人の男にすべてを捧げる。

そんな思想が美しいと、J a p a nが誇る美女の一つの条件だと思われるのだ。

「……ッ……にい……さん……兄さん、兄さん兄さん兄さん……」

彼女は兄を呼ぶ。

自分の中で父よりも、母よりも大きかった存在を。

いつも自分を助けてくれて、でもどこかに行ってしまった彼を。

「兄さん……兄さん……」

呼べば少しだけ、気も晴れる気がしたから。

彼女の兄がいなくなつて、辛いことがあるたびに彼女は彼を呼んでいた。

『自分が危ない目に会っていたら助けてくれる』、どこかにそんな感情があつたのかもしれない。

勿論、彼女の声に兄が答えた事などただ一度も無かつた。
でも彼女は安心できた。

兄に依存している。

彼女自身そう思う事は幾度もあつた。
けれどそれでも、彼女は兄が大切だった。

何度も何度も、求婚をしてくれた男もいる。
でも何度も何度も、断り続けたのは兄がいたため。

せめて彼の姿を見ないと彼女は他の男の事など考える事も出来なかつたのだ。

「……逃げ……なきや」

ゴンゴンと叩きつけていた胸が少しだけ収まって行く。

まだ気を緩ませれば零れる涙。

けれど今ここで気を緩めて、またあの男に会う訳にはいかない。

出来るものなら布団に包まり泣き明かしたい。

でもそれじゃあダメだってわかっているから。

そして何よりも……。

「私は……私は侍の妹だから」

きつと居なくなった兄はどこかで立派な侍になっている。

そうなれば自分は侍の妹。

そんな自分が蹲っている訳にはいかない。

いつか兄が沢山の武功を立てて帰って来たときに、胸を張って迎えらる妹でありたいから。

「……大丈夫、行こう」

ごしごしと乱暴に目をこする。

帯を巻きなおし軽く身なりを整えて、さて立ち上がって出ていこう。

そう思っていた時ふと、先ほどまで寝ていた布団が目に入る。

そして彼女はいそいそと布団をたたみ部屋の片隅に運んで行く。

「……洗濯は出来ないけど、イイよね？」

今から逃げ出そうと思っている彼女のやるような行動ではない。
でも彼女の引っ込み思案なくせにおせっかいで几帳面な性格。
それが災いして攫われてるはずなのに間の抜けた発言をしてしまう。

「イイわけねエだろ？それぐらいやるのは当然じゃねえのか」

それが災いして逃げることに叶わず男に彼女は見つかってしまったのだ。

「ッ」

「なにさ、怯えた眼しちゃってよ。」

俺が悪いみてエじゃねえか」

どこからどう見ても男が悪い訳である。

が、悪びれた様子も無い男はジロリとつま先から頭まで見上げるように視線を這わす。

目付き鋭い三白眼。

真っ黒な瞳、その瞳孔はまるで獣のように縦に裂けている。

大柄でガツチリとした体格。

かといって太すぎる事も無い腕。

だがその腕はまるで鋼のような印象を彼女にもたらした。

腕だけではない。

彼の纏った白い着流し、その隙間から除くありとあらゆる部分が鋼

のよう。

彼女の目にした事のある大人の男なんかよりも遥かに強大な力の印象。

唐草模様の帯に差し込んだJapan刀。

恐らく武士なのであろうと彼女は思う。

けれど今まで目にした事のあるどんな武士よりも強く見えた。

そう思わせる何かが男にはあったのだ。

「ヘエ……ボロ衣でも元が良けりやあ映えるもんだ」

「見ないで……ください……！」

「裸まで見せあった仲のくせになあに言ってるんだか」

「ッ！」

ニヤついた表情の男に彼女の顔は恥辱に染まる。

抱きしめるように腕を回す姿に、さらに男に顔は愉悦に染まっていた。

確かに男の言う様に彼女は美しかった。

肩にかかる程度の流れるような艶々しい黒髪。

整った鼻筋に小さな口。

そしてどこか儂げな印象を与える緋色の瞳。

体型も均衡がとれており大きすぎず、かと言って小さすぎない胸。

一日中、日光にさらされる農民で在りながら真っ白く毛細血管すら

透けそうであるなめらかな肌。

かつて彼女に求婚し続けた男はその美しさをこう表現した。

『立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花』。

もし彼女が権力者に目を付けられていたら即座に輿入りに成りそう。そう言っても構わぬほどの美貌が彼女には備わっていた。

「ま、お前の事はまた夜にでも体験すりゃあいいわけだし」

「離して！」

「逃げるだろうが、そしたらさ」

「イヤッ！」

歩み寄り、肩を掴み取ろうとする男。

彼女は粗暴な手を振り払おうと身体を振るう。

「…………ウザい」

ガシガシと丁髷を結った黒髪をかきむしる男。

そして苦々しく舌打ちをし、躊躇うことなく白刃を彼女の目の前に突き出した。

「…………あ…………ッ」

長い彼女の睫毛。

切っ先がそれを揺らすほどに、白刃は彼女を圧迫していた。

「だーつてろ、動くな、テメエの生殺与奪はすべて俺の手の中にあるわけ……おわかり？」

始めて見る本物の刃。

自分の命を軽々しく捨て去る凶器。

彼女はただ呆然と、男の言葉に従うことしかできなかった。

キヨロキヨロと物珍しそうに彼女は辺りを見渡す。

自分の居たJapanでは絶対に見受けられないような石畳の敷き詰められた歩道。

木造ではなく石造の家屋や商店らしきもの。

長者様から聞いた『市』などというものとは似ても似つかないその光景。

そして言っていたより遥かに多そうな人、人、人。

年に一度だけある村でのお祭り。

そんなもの比べ物にならないような人が彼女の視界を埋め尽くしていた。

「どーでもイイけどさ、意外に度胸あんのな」

「すっ、すいません……」

「ま、俺は付いて来てくれて逃げたりなんかしなけりやどっちでもいいんですけどね」

先ほど刀を彼女に付き付けた男とは思えぬほどに寛大な心を見せる。

「……けどさ、走った瞬間切るから」

前言撤回。

無情で冷酷な言葉に彼女は息をつまらせる。

発した本人は何が楽しいのか大口を開けてケラケラと笑っているが。

「逃げなけりやあ俺は優しいよ？」

ともかく『闘神大会』でお祭り騒ぎなわけだし、楽しまなけりやあ損ってヤツだぜイ」

そう言う男はイイ香りのする屋台の方に歩みを進める。

突拍子もない彼の行動にポツンと取り残された彼女。

続けざまに背筋に感じる冷たい感覚。

それも氷のように鋭く、痛く、冷たいものだ。

「で、だ……何で付いて来ねェんだ……テメエは」

ポンと肩を叩く男。

「……え……？」

今先ほど、確かに前の方に言っているのを彼女は見ていた。
だが確かに今男は彼女の後ろに居る。

体験した事の無い、どこかうすら寒い状況に彼女はただ肝を冷やす。

「今度はちゃんと付いてこいよ」

「あ……」

「返事は？」

「……はい」

小さな声で肯定を示す彼女。

その言葉に満足したのか、男はまた歩みを進める。

先へ、先へと行ってしまふ男。

そんな彼にどこか自然に彼女は手を伸ばして、そしてギリと開いた
手を握り締める。

（……情けない）

まったく知らないもので溢れたこの場所。

そこで彼女は自分が唯一知っている男に括ろうとしたのだ。

自分を蹂躪したはずの男に、だ。

（切腹とか、したほうがいいんだろうな）

侍となっているであろう兄の名誉を護るなら自分は死ぬべきなの
ではないか、そう思ってしまう。

けれど彼女にはそれは怖かった。
言うまでの事は無く兄の事は大好きだ。

それでも彼女は死ぬのは怖かった。
だから彼女は情けなかった。

自分がどうしようもなくちっぽけな存在に思えて仕方なかったのだ。

「……逃げよう」

「うん、それ無理」

不穏な言葉を発した彼女の隣。

さも当然のように腕を組みこちらを見下ろしてくる男。

「とつとと行くぞ」

「……はい」

今度は歩く男に彼女は付いて行つた。
遅れることなく、一定の距離を保って。

そんな自分がやっぱり彼女は情けなかった。

てかてか歩いてさらに少し。

ローマのコロッセオのような場所に男と彼女は居た。

「失礼しちゃうわ、ホント」

「うあ、ブサイク」

「誰がブサイクよ!」

「ほれほれあの子」

「ふふゝん、確かにね」

鼻息荒くこちらに向かつて来た桃色髪の女。

巨鉄ちゃんのような顔をしたその娘?と二言三言言葉を交わし、さらに男は進んでゆく。

その後ろをいそいそと、彼女は付いてゆく。

とりあえず逃げるという選択肢は放棄したのであろうか。

今は従った方がイイと判断したのだろうか。

ともかく二人は進み、石の階段を上り、入口のような場所に出た。

「こちらが出場申請の書類、こちらが大会規約の書類です」

ちょうど受付係と思われる翡翠髪の女性。

その女性は緑髪の少年と茶髪の少女に何かを話しかけている。

「おお!ちょうどいいや、俺らもやってくれっか」

「あらま、大会出場者の方ですか？

一緒に連れてる女性も……身なりはアレですが十分合格点ですね」

「だろだろ」

どこか誇らしげに受付の女性に合いの手を添える男。

そして彼女を少し見定めるように視線をくれる少年と少女。

居心地の悪さを感じ、ぴよこつと男の影に隠れる。

街を歩く時もそうであつたがすれ違う男たちからの視線はきついものがあつた。

見目麗しい彼女がボロ衣を着て歩く。

それは注目を浴びるには十分な理由だつた。

そしてそれ以外にも、彼女には人の視線に触れたくない理由があつた。

そして結局男の傍らに立つてしまふ、そんな理由があつたのだ。

「パートナーの方はなんていう名前ですか？

ちなみに私はシュリ・セイハジユウ・ナガサキつていますよ」

「よろしく、ナガサキ」

「なんでそこなんですかお兄さん！？

ふつうはシュリさん、とかシュリちゃんとかそんなんじゃないんですかッ！」

「ケケケ、気にすんな気にすんな」

楽しそうに話す二人にどこかいたたまれない気持ちを感じる彼女。

「で、名前はなんでんだ」

始めてまで捧げたであろう男には名前すら知られていないというのに。

情けなさよりも寂しさ、そんなものを彼女のどこかは訴えていた。

「……八雲……です」

絞り出すように発せられた蚊の鳴くような声。

「はいはい、登録完了ですよ。」

で、お兄さんの名前は？」

振り切るような勢いで発したものだだったが奈何せん、八雲の心情はシユリにはわからなかったようだ。

まあ初対面の相手にわかれという方がどだい無理な話かもしれないが。

ともかく彼女は男のパートナーとして登録されたようだ。

「……」

「お兄さんお兄さん」

「何よナガサキ」

「名前です名前！あとナガサキはやめてください！！」

……変な名前だったら私が呼んであげますからね」

ムムムと唸るシュリにカラカラと笑う男。

「俺はリユーマだ。」

将来『闘神』と呼ばれる男だからすっかり頭ん中にも登録しとけよ」

どーんと胸を張り凄まじい事をあっけらかんと言っリユーマ。

「俺が優勝するんだからな！」

「無理無理、無い無い、帰れ帰れ」

突っかかってきた少年を軽く受け流しシュリの出した細かい文字がびっしりの書類をふと見つめる。

そんな視線に気づいてたのか説明を始める。

「こちらは規約をお読みになって承諾する時のみついてくださいね。

参加証の魔法印と規約受理の捺印も兼ねてますので。

つまり……」

「八雲、手エ貸せ」

「あ……」

グイと手首に手を添え、リユーマは八雲とともに手を付く。それに感化されたのか、隣の少年も急ぐように彼に続く。

ぴかー。

眩い光が辺りを照らす。

収束したその後、隣で何か言い争う声が聞こえる。だが八雲の耳には入っていない。

彼女の純潔を奪い、生れた村より遥か遠くであろうこの場所に攫って来た男。

奇しくもその名は八雲の兄『龍麻』とよく似ていた。

二戦目（後書き）

変だわさ

三戦目（前書き）

キャラがわかんねえ

三戦目

闘神大会規約

* 出場資格について

どのような者でも参加可能。但し、闘神の称号を得た者はこれに準じない。

参加に際しては、男子は必ず見目麗しい女子をパートナーとする事。女子は条件を満たす容姿の場合、自身をパートナーとしてもよい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

* 試合について

試合は原則として1対1で戦うものとする。

勝敗は、出場者の死亡もしくは戦闘不能、降参宣言が認められた時点で決定する。

出場者の死傷について、対戦相手の責任は一切問わない。

武器類は装備可能なもののみ使用可とする。

戦闘中、回復アイテムの使用は禁止とする。

その他のアイテムの使用は可とする。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

* 勝者の権利について

試合に勝利する毎に相応の賞品を授与する。

対戦相手のパートナーの女性を、試合後24時間の間、自由にできる。

但し、性交以外の傷害、及び殺害は認めない。

対戦相手が女性であり、自分自身をパートナーとしていた場合もこ

れに準ずる。

- - - - -
- - - - -
- - -

* 敗戦時の罰則

試合で敗れた者には以下の罰則を課す。

パートナーを試合後24時間の間、対戦者に預ける事。

その間にパートナーがどのような目に遭っても、大会運営委員会及び対戦者に責任を問う事はできない。

その後、パートナーは、闘神都市内で3年間の無償労働に従事する事。

無償労働は免除金30000GOLDを支払う事で免除可能。

出場者が死亡したい場合、不戦敗の場合もこれに準ずる。なお、出場者本人に課せられる罰則は無い。

- - - - -
- - - - -
- - -

* 予選落選時の罰則

参加者多数の場合、予選が行われる事がある。予選で落選した者には以下の罰則を課す。

落選者のパートナーは、闘神都市内で1年間の無償労働に従事する事。

無償労働は免除金30000GOLDを支払う事で免除可能。

なお、落選者本人に課せられる罰則は無い。

- - - - -
- - - - -
- - -

* 優勝者の権利

都市長より、闘神の称号と相応の賞品、及び一流の武具を授与する。パートナーと共に、闘神区画での贅沢な生活を保障する。各国にお

いて英雄待遇を得られる。

敗戦暦があり、以前のパートナーが無償労働に従事している場合は、以降の無償労働を免除する。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

＊その他の規約について

大会期間中の出場者同士の私闘は厳禁とする。

出場者のパートナーもこれに準ずる。試合の放棄は、どんな場合であらうとこれを認めない。

試合を放棄した場合、不戦敗となり、敗北のペナルティを課せられる。

試合に遅刻した場合、及び試合当日コロシアムに姿を見せなかった場合もこれに準ずる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

- 以上 -

闘神大会出場者規約より抜粋

「……………ええっー！！！？？」

隣で茶髪の少女が呻いている。

「だから待ってって言ったのに……………」

「パートナーを対戦者に！？？」

三年間の無償労働!？」

不穏な言葉も聞こえるが八雲の視線はただリユーマに固定されていた。

彼女の兄、タツマ。

それとよく似た名前を持つ男。

名前を知ったその存在は彼女の胸をひどく揺さぶる。

そう言われてみれば、と兄と似ているところを探してしまう始末だ。

黒髪と黒目はよく似ている。

目付きも鷹のように鋭かったし、大口をあけて笑う姿もそっくりだ。意外に粗野で、同じ村の子供や、果ては大人まで錆付いた鍬を突き付けながら無茶な事を言っていたのも見た事はある。

でも違う。

八雲は結局そう決め付けた。

そんな訳が無い。

だって侍になっっているはずの兄が、このような事をするはずが無いのだから。

妹であるはずの自分を、手籠めにするなんてありえないのだから。

彼女は否定したかった。

何よりも八雲自身がリユーマをタツマだと認めたくなかったのだ。

大好きな兄がこんな人間になっているなんて思いたくなかったのだ。

「八雲さん！八雲さんはそれでいいんですか！？」

「……え、あの……何が、ですか？」

「さっきの見なかったんですか！？」

「……文字……読めないんです」

ポツリと零す八雲の言葉に少女は気まずげな表情を作る。

J a p a n の、村の農民の娘。

その寺小屋のようなモノも彼女の周りには普及しておらず、触れる機会があったとすれば長者様のお屋敷に忍び込んだ時くらい。

勿論そんな八雲が文字を読むだの書くだのという教育を受けている訳も無かった。

幸いか、この世界ではすべての地域に置いて共通の言語が用いられている。

人と対面して意思の疎通は出来るわけではあるが、そこが彼女の限界だったという事だ。

「ごめんなさい！」

「うん……気にしてないですから」

と言いつつも八雲はリユーマの後ろから顔だけ出して少女に口をきいている。

元々彼女は人前に立って、なんて事は超が付くほどに苦手である。初対面である少女に対しても八雲お得意の人見知りが発動してしま

っているようだ。

「あの……怖がられるようなことしちゃったっけ？」

「……すいません」

「イヤイヤイヤ！全然気にしてないから！！」

あわあわと手を振る少女に八雲は思わず小さくなっていく。

自分が悪いということはもちろん彼女はわかっている。

ちゃんと向き合って話さねばならないという事も、八雲はわかっているのだ。

でもわかっていても行動に出せない。

そんな自分の内向的なところが八雲は嫌いだった。
そう思ってもう6、7年は経っているのだが……。

「とにかくパートナー取り消し！

俺、違う人探してくるから！！」

「……だめです、お二人はすでに参加承諾してしまってますから。

棄権者にはそれ相応の罰則が下されてしまいます。

勿論ナクトさんと羽純さんだけじゃなくってリユーマさんと八雲
さんもですよ」

これから噛み砕いて説明する予定だったのに……。

どこか悲壮感を漂わせるシュリに言葉を詰まらせるナクトという少年。

そしてその視線は、ぴぴいーと口笛を吹かせるリユーマに移る。

「アンタはイイのかよ！それで！」

「つまりめエ！」

てかボクチン大会規約も呼んでなかったのか？バカなの？アホなの？死ねばいいのに」

どこ吹く風でナクトに降りかかる見下すような視線。

人を小馬鹿にしたようなリユーマの態度に、ついにナクトはキレた。

「ふざけんなッ！」

パートナーまで危険な目にあうんだぞ！！それなのに何なんだよアンタの態度は！！

この子がどうなってもイイってのか！？」

「イイから来てんだろ、脳味噌入ってるう？」

こいつは俺が拾った、衣食住は完璧に揃ったところにいさせてやるつもりだ。

つまり八雲は俺のモン……おわかり？」

「拾ったって……じゃあ八雲さんは知らない事ばっかなんじゃない

んですか!？」

そう言つて羽純はリユーマに詰め寄る。

訳もわからぬ八雲はちよいちよいと手招きするシュリに呼ばれ……
その顔を徐々に青くしていった。

「私ッ……聞いてない……!」

「そりゃそうだ、言つてねえし」

躊躇い無いリユーマの言葉は八雲をひどく傷付ける。

「ともかくこれで逃げれん訳さ。」

……もつとも逃げたとしてどうするかなんて俺にや全くわかんね
えことだったけどよ」

彼ら彼女らに付加された魔法印は街の警備システムに反応するよう
になっている。

これでこっそり逃げる事も事実上不可能になってしまったわけだ。

まあリユーマの言うように、たとえ彼から逃れたとしても八雲にJ
apanに帰る手立てなどこれっぽっちも存在しなかった。

お金も無く、知識も無く、モンスター相手に立ちまわれる力も無い。

そもそも彼女のような美少女がたった一人で歩いてどこかに向かお
うとしているのだ。

そこに誰かが現れたとして、何も無い彼女をJapanまで送つて
くれるようなお人よしなどいるだろうか。

良くて誰か一人の、人間の性奴隷。

悪ければ男の子モンスターの腹ませ道具として一生過ごすことになるだろう。

思考をよぎった光景に身体が震えだす。

情けなさで頭がいっぱいになる。

結局、八雲にはリユーマのパートナーとして闘神大会に出場するのと。

皮肉にもこれが最も安全な状況であつたのだ。

「まー！安心しとけ、テメエは俺んだかな。

第一俺が負けるなんて在りえねエし」

再びケラケラと笑いだすリユーマ。

その自信はどこから来るのか、そこら辺は全く分からないがともかく彼に負けるという光景は思い浮かばないようだ。

それはただ単純に自分より弱い敵としか戦った事が無いためなのか。それとも本当に大会出場者の誰よりも強い力を持っているためなのか。

この時点では誰にもそれはわかっていない。

「なんでアンタが付いて来るんだよ」

「なんでってこっちに宿があるからだろ？」

振ったらカラカラ鳴るんじゃないの、お前の頭」

顔を赤くし、睨み付けるナクト。

その状況を止めようとナクトに話しかける羽純。

鼻で笑う悪い顔のリューマ。

オロオロと双方を見つめる八雲。

四人の間に流れる空気はどう見てもイイものではなかった。

「それよりもナクト……平気だからって言えないけど……イイって
言っちゃったし、手遅れだし……」。

でも……お金とかあんないっぱい持ってないと思うけど……優勝
……出来そう？」

「……するつもりではいる」

「うん、それ無理。」

なぜなら俺が優勝するからさッ！」

「いちいち入ってこないでくれよ……」

天下の大通りで二人だけの空間を作り出したナクトと羽純。

お構いなしにその空気を吹き飛ばしたリューマは殴りかかるナクトの拳をヒラリヒラリかわしていく。

「『人の自分の為より大切な人の為の方が何倍も力を出せる』……まあなんてくっさい台詞！」

んな事こんな大会開いてる側が言っってもんだよな」

「ホント何なんだよアンタは！」

アンタは八雲さんの為とか思わないのかよ!!」

「思わん!!」

即座に切り返すリューマの言葉にやはり八雲は気持ちが悪くなる。わかっていた台詞ではあるが実際に向けられるのはつらいのだろう。

「所詮人は自分の為にしか闘わねえんだよ。

俺も俺の為に剣を鍛えてここに居る訳だし、第一拾った人間に情なんて沸くわけねえじゃん」

ケタケタと再び笑いながらリューマは八雲の肩を抱く。

八雲の顔には嫌悪感が思わず表れてしまう。

「……やめて……くださいッ」

自分の身体を離そうと押し込んでくる八雲。

だが気にした様子も無く彼は鼻をスーハースーハーと鳴らし……眉を顰める。

「てか臭いッ！？風呂ぐれえちゃんと入れや」

「ッ！……っっ……」

貯め込んで、堪えていた涙。

その席は女として馬鹿にされてしまうことによっていとも容易く決壊した。

「そこまで言わなくてもいいじゃないですか！！」

「俺のモンにどう言おうが俺の勝手、そうだろ？」

崩れ落ちた八雲を抱きしめる羽純の強い視線もリユーマはお構いなし。

何が悪いのかわからん、そう言いたげな表情で彼は深いため息をつく。

「羽純……俺決めた」

「あアん？」

「絶対にお前をぶっ倒して八雲さんを救ってやる！！」

「いやゝ、冗談の言えるヤツは嫌いじゃねえよ」

見上げるように視線を注ぐナクトを見下すように見つめるリユーマ。

今回の大会で台風の目となるやもしれない二人は最悪の形で一方に印象を与えた。

もう一方はまるで歯牙にもかけていないようだが。

「てか同じ宿かよ……ストーカーか、テメエは」

「誰がストーカーだ!!」

三戦目（後書き）

ムズイです

ゲームの方も合わせてるので牛歩……まだ迷宮探索すらしていないってどうなんですよ

四戦目（前書き）

説明チツクになった

三人称は難しいなあ

四戦目

一夜が明けて、ナクトと羽純は宿屋を出発した。

彼らとリユーマらが今大会中身を寄せるのは『カテナイ亭』という何とも不吉な名前の宿。

マルデ・カテナイという名の獣耳のおかみさんとトコトン・カテナイという名のたぬーの御主人が経営するのだが。

奈何せん名前のせいで避けられている風潮にある。

だからこそナクトと羽純でも宿を借りれた訳ではあるが。彼らの故郷では『無病息災』という意味を持つそうだが、やはり引っかかるものというのは残ってしまうのだ。

そんなこんなで朝食を取るべく二人は近くの酒場『ハニワ浪漫』に足を伸ばした。

彼らの生まれ育った村とは比べ物にならない規模。

その大きさに圧倒される羽純にそれをからかうナクト。

幼馴染特有のやわらかい雰囲気が二人を包み込んでいる。

「はにやり〜ん、いらっしやいませ……およ、そっちがナクトくんのパートナー？」

私アリサ・エアリス、よろり〜」

「えと……よろりーです」

ウェイトレスのアリサの友達感覚の触れあい方。

それも二人にとってはありがたく、始終笑顔を絶やすことが無かった。

「さて、じゃあコロシム行つてシユリさんから話を聞か」

ナクトは爆弾おにぎりを、羽純はぼわわサンドを平らげ酒場を抜ける。

今日は澄み渡るような快晴で、二人の足取りも軽い。

途中、昨日ナクトが『闘神』の一人を見かけた広場へと差し掛かった。

「うわ、人もお店もいっぱいだね。」

村のお祭りが三つくらい入りそう」

「闘神大会の開催中は街全体がお祭りみたいなもんだからな」

彼らの言う様に確かにそこは人であふれかえっていた。
そこらかしこの店から漂ういい匂い。

朝食を取ったばかりではあるがそれはナクトの腹の虫を刺激する。
食いしん坊っぷりに呆れてはいるが、羽純もそこやかしに視線を巡らせる。

やはり興味を引くのは間違いないのだろう。

「いやはや中々に美味しい……が、『へんでろぱ』はいまいちだわな。」

お前、料理くらいは出来るよな」

「……少しでしたら」

「そか、じゃあ帰ったら作ってくれ。」

返事はハイかイエスだ」

「イエス？」

「肯定つてことだな、拒否権は無いつてこった」

「……はい」

串に刺さった何かの肉を豪快に口にくわえつつ二人の方にやって来ているのはリユーマ。

八雲は八雲で焼きの入った麺類のようなものを手に持ち俯き加減。

合変わらず八雲の事を人として見ていないようなりユーマの発言にナクトは声を荒げた。

「八雲さんに何やってんだよアンタ!!」

「何やってるって飯食わせてるんですけど」

確かに八雲はモムモムと何かを咀嚼している。

加えて昨日までボロ衣だった衣類も、濃紺の艶やかなそれに代わっていた。

「流石にあんなもんじゃ俺がみつともねエし。」

てかテメエ何様？突っかかって来る理由が全くわかんねエんだけ

ど」

「それはッ！……でも絶対にお前は間違ってる！！」

「だとしてもテメエにとにかく言われる筋合いはねエだろうが。

しっかり飯も、服も、住む場所も、マトモなもんを与えてるつもりなんだがね」

激情に任せて拳を握るナクトではあるがやはりリユーマは歯牙にもかけない。

鬱陶しげにシッシと手を払い、テカテカ彼は歩いて行く。

その後ろを置いてかれまいと八雲が続く。

「八雲さん！」

ナクトの声に振り返り、ペコリと頭を下げた八雲。

少しだけ足に力を込めて、彼女はリユーマの後を追いかけたのだった。

『闘神大会』の本選に出場するためには、まず『予選迷宮』と呼ばれるダンジョンに赴かねばならない。

本戦であるトーナメント式の大会、その参加者を絞り込むためにそ

れは存在するのだ。

課題は『予選迷宮』において『いかなご』を二十匹以上集める事。そつすれば予選クリアの最低条件を満たすこととなるのだ。

ちなみに『いかなご』とは小さな魚で高級食材の一つでもある。たくさん集めて煮るとおいしいといわれている。

鳴き声は『ぎよるぴゅ』と非常に変わっているのだが……。

とにかくそれを予選迷宮内の受付に集めて渡す必要があるわけだ。今回の受付はマスカットという女性とキヨハウという良く分からない生き物。集めて来たものをキヨハウが飲み込むことによってその量を測定する。

期限は明日いっぱいまで。

予選自体は三日前から始まっている訳であるから、ここから参加するリニューマたちには少々厳しい条件かもしれない。

加えて言えば本戦に出場できるのは『いかなご』の累積数が多い予選上位三十名のみ。

トーナメント自体の出場者はシード権を持っている者がいるため三十二名と少し増える。

二十匹というのはあくまで最低条件なのだ。

今年の参加者は百名程、競争率は三倍程度だ。

てな訳でここは『予選迷宮』の入り口付近。

ぱつと見どころかの村の鉾山のようなだがれつきとした予選会場である。立てられた看板にもでかかと予選会場と書かれているし、誰がどう言おうと予選会場なのである。

そして現在の時刻は16時。

『予選迷宮』の開放時間は決まっておりそれ以外は侵入できないシステムとなっている。

時間は9時〜16時まで、今は閉鎖の時間と合いなるという事だ。

入り口の付近で、一人の少女がぼんやりと立ちつくしている。濃紺の着物に白い肌が映える美少女。

Japanより見知らぬ土地、闘神都市へとやって来た彼女の名前は八雲。

健気にも自分を攫ったリユーマを迎えに来ているのだ。

「あ……八雲さん」

声をかけて来た羽純にペコリと会釈を返す。

「えと……あの人を迎えに来てるんですか？」

あの人というのはリユーマの事であろう。

首を小さく縦に振る八雲に羽純は難しい顔をする。

どこからどう見てもリユーマの八雲への扱いは不当なように見える。暴言ばかり、大会への登録ばかり、彼女へ気を使っていないように見えてしまう。

だがナクトの言う様に彼は悪人なのであろうか。

今朝もそうであつたがきちんとしたものは食べているようだ。

服装も昨日とは比べ物にならないものだし。

泊つてるところをマルデに見せてもらったが、作りは違つがかなり立派なところだつた。

そう考えると八雲への対応は不当では無いものに見えてしまう。

彼の言う様に彼女を拾つた、というのなら破格の待遇ではないのか。

尤も同じ女の子としてはどうか？と思える言動は節々に感じられるのは間違いないが。

「八雲さんはあの人と一緒にいいんですか……？」

意を決して尋ねる羽純。

少し困つたような顔を見せる彼女はもう一度小さく肯いた。

「私は何もありませんから……」。

でもご飯の用意とか買い物のお手伝いとか……文字とかお金とかよくわからないけど、ちゃんとやってたら何もされてないですから……」

「何もされないって……何かやられたんですか!？」

表情を変えずポツポツ言葉を紡いでた八雲の頬に少し朱が差す。

それとは対照的に瞳の光はだんだんと失われていく。

そんな八雲に羽純は思考がそちら寄りに移り……茹で蛸のように真

っ赤な顔。

「あつ、あの人！」

「大丈夫……です、私は……きつと」

強張ってはいるが精一杯の笑顔を浮かべる八雲にそれ以上の事を羽純は言えなかった。

きつと彼女は心の中にピンと糸を張ったのだ。

何らかの思いを糧に張ったそれを、自分の言葉一つで千切ってしまう訳にはいかない。

自分の我儘で、彼女を再び悲しませる訳にはいかないのだ。

「じゃあ八雲さん……私はもう何も言わないです。

だから、その……代わりにお友達になる？」

でもこのままここで足踏みしていることだってもっとできない。だっただらばせめて、自分が彼女を支えられるようになるう。

昔懂れて、少しだけ嫉妬した女性に抱いた感情。

自分が支えるなんておこがましいかもしれないけど、それでも羽純は何かがしたかった。

「あのっ……えと……その……」

ワタワタと手を振り小さくなる八雲に小動物のそれを重ねてしまう。頬を這って口元を持ち上げていたのだが、だんだんとそれも自然に行えるようになる。

「ねっ？」

「……あう」

慣れていないのか口を噤む八雲に笑いかける羽純はとても楽しげだった。

『予選迷宮』に現れるモンスターは弱い存在が多い。

『ハニー』に『イカマン』に『るろんた』。

一般的な実力を持つ冒険者ならばまず負ける事は無い、所謂ザコ敵だ。

まあとはいっても苦戦する人間もいる。

たとえば駆け出しの、レベルが低い、

「いつてエエエエ！？」

そこの緑髪の少年、ナクトのように。

イカマンの噴き出すスミをまともに受けたところに触手による連続攻撃。

ダメ押しの人のような脚での蹴り技。

初心者が陥りやすい死への一直線ルートだ。

「なっ……めんなア！」

が、まあこんなところで彼は死なない。

一応原作の主人公なわけだし、補正でもかかっているのだろうか。

迫る肢を刃で受けて逆に相手を怯ませる。

そのまま食い込んだそれを下に引き切り、

「負けねエー！」

斜め下に振り下ろす、存外鋭い刺突がイカマンを貫く。

「イカアアアア！」

青色の体液を撒き散らしながら断末魔とともにイカマンは生き絶えた。

「いかなご……げつとう……」

息も絶えながらも死骸をあさりいかなごを袋に入れる。

倒したら光とともに消えるなんて事も無く、モンスターはちゃんと存在するれっきとした種の一つである。

この世界でのモンスターは『人類の敵対者』というよりも『普通に存在する野生動物』という感覚が強い。

種類によっては加工されたり、食用としても扱われたりする。

何にせよ彼らは実際に存在するのだ。

「……何度見てもなれねエや」

返り血で青く染まった剣を布でふき取り溜め息をつく。

先ほどの10匹目のいかなご。

とりあえず今日のノルマは済ませたのだが迷宮の道すがら目にした参加者たちを思うと足りない気もする。

参加の際配られた魔法時計で時刻を確認するともう30分程で16時となる。

「今日はここまで……ッ！」

ザクザクと土を削る音がする。

恐らく何者かがこちらに向かって来ている。

消耗しきった気力を奮い立たせるべく世色癌の一氣に口に放り込み噛み砕く。

ランスの居る時代では『ハピネス製薬』という会社で一大製作されていたこのアイテム。

その発祥は非常に古く、現在と製法は異なるがとある高い医療レベルを持った人物が開発したとされる。

気力体力を回復させる薬草や滋養強壯の食材。

さまざまな原料を微妙な配分で調合したそれは冒険者ならずとも一般家庭でも重宝されている。

地方によって伝わる製法は異なるらしく、広い範囲で普及している代表的なアイテムだ。

ちなみに『ハピネス製薬』の初代社長は大陸中に散らばる製法の伝承者を集め、さらに高い効能のそれを作り上げたらしい。

今の時代一粒で数値で言えば一しか回復しないそれが、ランスの時代では数粒で全快する。

そのあたりは年推移による技術の発展といえるだろう。

「いかなご集まってるう」

「……アンタかよ」

奥から現れたのは大きな風呂敷を肩に担いだリューマ。

抜き身の剣をとりあえず鞘におさめたナクトは、ハアと深くため息をつく。

「ンだよ、ノリがワリイな」

「疲れてんの、見ればわかるだろ」

「え？マジで？……ブーツ！クスクス」

「笑うなッ！！」

「イカマンとかに苦戦する『闘神』……ダセエ！！」

顔を赤くしながらも何も言い返せない。

残念なことにそれは変えようも無い事実なのだから。

「レベル屋とか行っただか？アレ？もしかして存在もしらねエとか……」

「知ってる！それにそんなところ行かなくなっただけでレベル神が俺には付いてんだよ！！」

「まったく、冗談は頭だけにしとけ」

「いるんだよ！！」

この大陸に暮らす生き物には、強さと技能に生まれ付き値の定められたレベルがある。

通常のRPGにあるようなレベルと同じ概念で、例外的なキャラクターもいるが、基本的にレベルの高い者が強いのだ。

ちなみに生き物が死ぬと魂は天使または悪魔が回収するのだが、レベルの高い者の魂ほど、宝石の如く美しく、貴重な存在となる。

そして、最終的な帰属先のルドラサムやラサウムの力となっていくため、レベルアップの本質とはこの魂の精練にあるらしい。

まあこの辺は大陸に生きる者たちは知らないのがほとんどではあるが。

ここでリユーマが言っているレベル屋についてだが、そこは経験値を入手した者がレベルアップを取り行うことのできる特殊な場所の事である。

大陸に生きるものすべてにはそれ相応の経験値というものには存在する。

それを倒すことによって己の身に経験値を蓄える事が出来る……という聞けば酷く変な常識がまかり通っているのだ。

まあ何にせよレベル屋とは水晶玉を用いて一般の人々のレベルアップをしてくれるところなのだ。

「ホントなんだよ！」

「あらま、口だけはご達者なようで……」

「ホントだ！！」

「ヘイヘイ妄想乙」

「そこまで言うんなら呼んでやるよ！！」

そう言いつつナクトは拳を握り祈る。

「レベル神よ、私の呼び出しに応じ、その姿を現せ！」

一瞬辺りがまばゆい光に包まれたかと思うと二人の前に桃色髪の少女が姿を現した。

「あ、ナクトさんこんにちは」

「どうだ！俺専属のレベル神のクミコ様だ！！」

レベル屋を利用するしかない一般の人と違って、有望な冒険者や実力者など、優秀と判断された人物には彼女らが担当として付くようになる。

その行動は自分の階級を上げる事が目的とされ、レベルの上がつて行く者に付いているレベル神は、それにつれて階級も上がって行く場合が多いらしい。

勤務態度にもよるが、呼ばれればどこにでも現れて仕事が終わると去っていくのが基本だ。

レベル神が付いているというのはそれだけ素質があるという証明にもなるのだ。

「どうだ！」

「おお、ちよつとだけ感心だわ」

ちなみに一人のレベル神は複数の存在を相手にするのだが……ここら辺は言わないでおこう。

本当に驚いた様子のリユーマにご満悦のナクト。

「アンタには付いてないだろ？こんな可愛いレベル神が……！」

だからこそ図に乗って挑発するような態度に出る。

悔しがっているであろうリユーマの顔を再び見るべくクミコから視線を移す。

そしてその先、彼の隣には八雲と同じような濃紺の着物を纏った一人の少女の姿があった。

「あらクミコ、専属を見つけたの？」

「お久しぶりです！先輩のご指導のお蔭でようやく一人目が」

「へ……先輩……？」

「見習いは先輩の下で実地研修を積むんだとよ」

「はじめましてかしら？私は晶、リユーマのレベル神よ」

まるで表情を変える事も無いような徹底的な無表情。
だが酷く整った人形のような容貌に烏の濡れ羽色の髪。
少々小柄ではあるが間違いない美少女であった。

「ま、テメエだけが特別じゃねエってこつた」

ケタケタと笑うリユーマに突っかかる気力すらもはや残されてはいなかった。

五戦目（前書き）

地の文はやはり難しい

五戦目

『予選迷宮』を抜けて、入口で待っていた二人と合流して、四人はカテナイ亭へと歩を進めていた。

のだがその途中、ナクトらは浅黒い大男に絡まれていた。

ナクトは剣を手に、『ドギ』と呼ばれた男は斧を手に、双方は殺伐とした空気を漂わせている。

どうやら二人には面識があるらしく、ドギは怯まぬ羽純に興味を持ったようだ。

関係は良好ではないらしい。

それもリユーマのように一方的に嫌悪を抱いているものではなく、嫌悪と興味が、悪い感じで絡み合っているのだ。

「くくくつ……お前と当たればその女を食えるってわけか。

まだつぼみだが、ずいぶんとおもしれえやつをパートナーにしたじゃねえか」

どうも小悪党感たっぷりな発言ではあるが絡まれている本人たちにとってみれば凄まじく拙い状況である。

いやらしい目線で、舐め回すように羽純を見つめるドギ。

思わずナクトの後ろに隠れるが、ドギの挑発でナクトは剣を構えた。闘うようである。

「噂じゃあ強いもんがとことん優遇される街らしいな、ここは。

さあて、予選落ちしそうなチビツ子を叩き潰して、土産をいただくとするかあ!？」

ドギは間合いを取り斧を構える。

その巨体の筋肉の盛り上がりは本気の戦意を現していた。

「俺もこいつも『闘神』になるつもりなんだ、どうせ大会で当たる。

だから……こいつを倒せるくらいにならないとダメなんだ！

きつともっと！強い相手だって!!」

逃げようと促す羽純を振り切りナクトは前を向く。

「逃げるなんてこと……大会に申請した時からもうあり得ないんだよッ!!」

こいドギ！叩きのめしてやるッ!!」

「ばーーーーか、寝言は寝ていいやがれ!!」

「どいつもこいつも……俺の事をバカにすんなアアア!!」

ナクトは地を蹴りドギへと向かって駆けた。

そんな光景をリユーマは冷めた目で見つめていた。

「……ただのバカか、まあ小利口に固まってるヤツよか俺は好きだがね」

「あつ、どこに……」

「どこってそりゃ宿に、重くは無いけどずっと持つてるとタルインよ」

そう言うのと血抜きされたイカマンが十数匹入った風呂敷を掲げて見せる。

食材代の節約ということで、イカは好きではあるし、彼はついでに狩って来たという訳だ。

「助けて……あげないんですか」

「ハア！？なんで俺が！」

「だって……その……仲も良かったですから」

「ねエな、ダチでも何でも無い、ただの顔見知りだろ。」

義理もなんもありやしねエんだよ」

呆れたように肩を落とし、軽く八雲のお尻を蹴飛ばす。

「ほれそれ行くぞ」

振り回した斧に吹き飛ばされていくナクト。

あまりに一方的な攻撃に、思わず八雲は目をつむる。

誰か助けに入るのか。

そんな想いを胸に周りを見渡してみても、遠巻きにそれを眺めるだ

けで基本的にリ्यूマのように無感心か、野次馬根性だ。

「あの……とも……だちなんです」

「ハア!？」

「羽純とは……友達になったから……だから」

「じゃあ行けばいいじゃん、助けにどうぞ」

「え……」

「いやゝアレだね、友情つてのは素晴らしいね。」

そのために今日一晩か、これからずっとか、二人仲良くアイツの性奴隷になるわけだ」

見てみればナクトはドギとの戦いに敗れ地面に倒れ伏していた。

「ナクトッ!！」

「あう……あ」

「ほれやつぱ負けた、勇氣と蛮勇は違うんだぜイ」

「やつ……しっかりして!怪我は!？」

「ぐはははははっ、弱すぎるぜえクソガキい!!」

さあてじゃあクソガキのパートナーの味見でも……」

ドギは舌舐めずしながら羽純に近付く。

「さて、どうすんの……ってマジ？」

怯えを見せつつある羽純に向かって八雲はあろうことが駆け出していた。

八雲にとって、羽純は初めての友達である。

奥ゆかしすぎる一面を持つ彼女に、これまで友達といった友達はいなかった。

同年代の相手とは話しても、どうも彼女はつまらないらしくすぐに離れていく。

村の中で顔を合わせず生活をする、などということはほぼ不可能に近い。

必要な事、そんな話は必然的に行う。

だがそこまで。

少しの休みに他愛も無い話に花を咲かせたり、そんな経験は彼女には皆無だった。

だからこそ、羽純は八雲の中で大きな位置を占めていた。

自分を友達と呼んでくれる。

それは彼女にとってひどくうれしい事だった。

「あちらの男の人が言っていました、勇氣と蛮勇は違うのですよ」

走り出した彼女。

しかしその行く手は編み傘を被った、鈴の音のような声の女性によ

って止められた。

「まさかカラー……ちょっとこいつは予想外かねエ」

同じようなJapan刀を腰に携えた女性の隣にリユーマは歩み寄る。

その二人の視線の先。

それを追う様に八雲は顔を上げる。

「え……？」

気力を振り絞り立ち上がったナクト。

されどボロボロの四肢に力のこもる事は無く、彼の思うようには動いてくれなかった。

そしてとどめとばかりに振り下ろされたドギの巨大な斧。

ナクトの頭蓋を粉砕するはずだったそれは、青い剣によって受け流されていたのだ。

受け止めたのは観衆の後ろから飛び出した一人の青マント。

「邪魔する気か！？」

怒声とともに振るわれた斧。

再び受け流されたドギの斧は剣士のフードを切り裂いた。

「ひゅー、剣士としても一流ってか」

「やわらかな太刀筋、見事ですな」

ドギの喉元、そこには彼女の剣先が付きつけられていた。

「見事だぜ、カラーの姉ちゃんよ」

周囲の観衆がざわめく。

裂けたフードから覗いた長い耳、額に光る美しい赤の宝石と整った容貌。

『カラー』とは女だけの不死の一族。

若いままの姿で生き、ある時期が来るとそれまでの行いに応じて天使か悪魔へと変貌する人間とは違う生物。

彼女らは総じて美しく、高い魔力を持っているが人間に比べて戦闘能力が優れている訳でもない。

そのうえ処女を失うと赤から青へと変化する額のクリスタル。

それはきわめて強力なマジックアイテムとなるため、常に欲深い人間たちに狙われているのだ。

自然に生きていれば不老不死、だが額のクリスタルを奪われれば天使にも悪魔にもなれずに消滅する。

故に、ほとんどのカラーは『クリスタルの森』と呼ばれる森の中、罌を仕掛けて侵入者を拒み、ひっそりと暮らしている。

今この街で、屈強な男相手に剣を交えているのはそのカラーなのである。

ギラつく目で見られてしまうのも当然のことだった。

「カラーと知り合いたあ意外に交友関係がひれエヤ」

どうやら彼女も闘神大会に参加するようだ。

額の赤いクリスタルに喜びの声を上げるドギは満足そうにその場を立ち去って行った。

「ンじゃ俺らも帰るか」

「お待ちを」

八雲の肩をぽんと叩き歩みを促すリューマに制止をかけたのは編み傘の剣士だった。
傘の向こうから覗く眼光は鋭く彼を貫く。

「私が、あの方が、止めに入らねばどうするつもりだったのですか」

「さあ？止めに入るってのがわかったもんを考えたって仕方ねエだろ」

「……わかっていたと」

「どうだろうなあ」

今度は羽純の方に駆け寄っている八雲に、リューマはガシガシを頭をかく。

「ずいぶんと嫌われているようですね」

「ケケケ、それが普通だろうよ」

「何をなされたので？」

「ちよつと誘拐を……な」

その言葉に剣士は刀の柄に手をかける。

鋭い圧力が、リユーマを貫き、それはカラーの剣士すら振り向かせた。

「闘神大会参加者同士の私闘は禁止なんですう」

「……参加者では無いやもしれないですが」

「今日迷宮に潜ったとき、アンタに似た編み傘の人間を見たんだねエ、コレが。」

つまり……それはアンタってことだろ？

正体隠してるつもりか知らんが逆に目立ってんだぜイ」

ジリジリとした雰囲気は二人の間を突き抜けてゆく。

ナクトとドギ、ドギとカラーの剣士、この間では感じ取れなかった濃く粘っこい空気。

カラーの剣士も二人と八雲をかばう様に、こちらへと神経を張っている。

「お名前は……？」

「ブタバンバラです」

「……お名前は？」

「ンだよ、どいつもこいつもノリが悪いねエ」

被っていた編み傘を取り上げ自分の頭に被せてみる。

彼の顎か、口ほどかまである長身の女性。

流れるような黒髪と透けるような肌が印象的な侍美女が姿を現した。

「返していただけるので？」

「そっちの方が目立たんしイイだろ。」

「てな訳でくれんか、コレ？」

美しくもどこか包容力を漂わせる顔立ちに不快感を少し混ぜ込む。

「お名前を覚えていただけるならば」

「え？俺に惚れた？」

「切りますよ」

「ハイハイそんな時だけ笑顔になんなよ。」

「リユーマねリユーマ、まあよろしく」

「……そうですか」

「なにさその残念そうな顔はさ！」

俺にもつと何を求めてたんだよテムエコノヤロー」

「いえ……それではまたいずれ」

そう告げると女性は踵を返し人混みの中へと消えていった。

「俺って嫌われてンなあ」

ポツと呟いた言葉は誰にも聞かれること無く消えていったのだった。

コトコトと鍋が音を立てる。

少しだけ煮詰めたいかなごを取り出し、砂糖にしょうゆ、酒を加えていく。

「Japan生まれの俺としてはしょうゆはやっぱ欲しいんだが高
いんだよなあ」

ブツクサと文句を言いながら、空になったしょうゆの容器をごみ箱に放り込む。

カテナイ亭の共同台所、その一つの魔法コンロの前にリユーマと八雲は立っている。

「こんなもんか……んじゃまあいかなご貸してくんな」

「……あのっ」

「何よ?」

「いかな」……その……必要なんじゃ……」

予選の突破条件は八雲も羽純から聞いたため知っている。

そして目の前で煮立ってしまったそれは、その突破に必要なものなはずなのだ。

「余裕余裕、しっかり収めて来たしさ」

「でも……あの……」

「いいだろ、大丈夫だって言ってんだからよ。」

それにだ、もし予選敗退だったら一年間無償労働するだけでお前は自由になるんだぜイ」

リユーマの言う様にJapanには戻れないかもしれないが、少なくとも誰にもこれ以上汚されることは無くなるかもしれない。

その上一年間、この街で暮らすのだ。

そうなればコネも出来るかもしれない、知り合いも出来るかもしれない。

女の子一人でもまともに生活していけるかもしれないのだ。

「てな訳でさ、まあイイこと尽くめだろ?」

いかなこの佃煮は食えるし、Japan出身にとっちゃあ御馳走の一つじゃねえか」

祭りの時だけ食べる事の出来るお椀いっぱい白米。

そしてそれには必ずと言っていいほどにいかなこの佃煮が少しだけついていた。

こちらに来てから毎日のように、といってもまだ二日ほどだがJapanに居た頃とは比べ物にならないほど美味しく豪華な料理を食べている。

基本的にリユーマもまたJapan出身らしいので白米を思いっきり食べれるのだ。

食べ物によつて胃袋を買収されてしまったような状況だろうか。

そこにさらに自分も、兄も、大好きだったいかなこの佃煮が付属する。

目の前に垂らされた餌に、結局八雲は屈してしまうのだった。

それから一晩が過ぎ、リユーマと八雲の手の平の魔法印は光り輝いた。

二人の手の平の紋章はいったん姿を消し、そしてまた再び形を変えて現れ、また消えていった。

「いかなごばんざーい」

「いかなごばんざーい」

どこかの部屋からナクトと羽純の声もする。

リユーマらも彼らも予選を通過したのだった。

だが同時にこれは相手対戦者にパートナーを凌辱される可能性も秘めているという事だ。

掛け値なしに喜んでいる二人とは違い、八雲の気持ちはやはり沈んでいた。

六戦目（前書き）

Wikで見ても、え？二年目？と思った今日この頃

六戦目

組み合わせ発表の日、リユーマは昼間っから酒を飲んで頂垂れていた。

机に突っ伏しJapan酒を煽り。

どっからどう見ても気の抜けた、やる気のかけらも無いダメ人間であつた。

「浮かねえ顔はなおんねえな」

「アリッサちゅわん、もう一杯くださいな」

「リユーマさん、昼間っから飲みすぎだよん」

「イイのイイの、予選突破しちゃったしお祝いってヤツだし」

頬を朱に染めたリユーマはコップ片手に手を振る。

その前で、いかにも屈強そうな男が大きくため息を付いた。

「なんでイ旦那、もっと楽しもうぜえ」

「酔っ払いの世話じゃなくて、真昼間じゃなけりやあな」

ゲヘゲへと酒臭い息を吹きかけるリユーマは公害以外の何物でもない。

それをある程度受け流し、扱える壮年の男は度量が広いのだろう。

身の丈ほどある巨大な剣を携える彼の名前は『ボーダー・ガロア』。

闘神大会の常連出場者であり、毎年優勝候補の一角を張る男である。

「強そうだったから話しかけてみりゃあ……俺の勘も鈍ったか？」

「うつ……うええええつ」

「こんなところでしたらダメだよん!!」

桶に顔突っ込んでいるリユーマを見てるとやはり溜め息がこぼれる。

強い相手との戦いを望む性質のあるボーダーは無くなった頭頂部を叩くのだった。

「はにやりーん、いらつしゃいませ……ってナクトさんじゃない」

「邪魔するね……ってクサッ！なんの臭い!？」

「いや、お客さんの一人がもどしちゃってね」

顔をのぞかせてみれば見知った着物姿の丁髷男。

何か言ってやるうかと口を開いてみるが、周りに人の沢山いる酒場であると気付きとりあえず自重する。

リユーマを相手にするよりも大事な事がある。

そう自分に言い聞かせ、気持ちを押しとどめて、ナクトはアリサに向き直った。

「あの、聞きたい事があるんだけどいいかな」

「おっけ、何かな？」

「あのさ、通せんばハニーのどかし方って知ってる？」

ナクトの話をまとめるところである。

大会の予選通過者は、来るべき大会に向けて経験値を稼ぎ己を強くする必要がある。

だがしかし、果たしてその経験値はどこで稼ぐのであろうか？

予選迷宮で稼ぐというのも一つの手だ。

されどあの迷宮に現れるのは極めて程度の低い敵ばかり。

大した経験値を稼ぐ事も出来ず、無駄な時間が流れていつてしまうのだ。

そこで大会出場者には『エリアカード』というものが配られる。

この闘神都市には『マビル迷宮』という不思議なダンジョンが存在する。

世界各地の数多のダンジョンにつながり、そこへ転移魔法で移動できるといって極めて稀な迷宮なのだ。

転移した場所の事をここでは俗に『エリア』と呼んでいる。

そこには強いモンスターが場所に応じて存在し、たくさんの経験値を稼ぐ事が出来るという訳である。

無論エリアにもランクがあり、強さにも多くの幅がある。自分に合ったエリアを選ぶことが出来るという事だ。

出場者はこれで日々己を鍛えているのである。

さてはてここでどのように行くエリアを選ぶかということだ。

勿論最初っからすべてのエリアに移動可能ですよ、なんて甘く優しい配慮を期待してはいけない。

エリアごとに存在する『認証シール』、それを獲得し認証してもらうことによって新たなエリアへと進んでいけるというシステムなのだ。

ちなみにこのシールの貼り付けも自分一人で行えるわけではない。一日一回、その日の午前中に認証管理官に頼む必要があるのだ。

ナクトはマビル迷宮最初のエリア、『ファースト』に入っただが通せんぼハニーが邪魔をして先へ進めなくなってしまうという状況なのである。

「ごめんね、ダンジョンの事とかはちょっとわかんないかな。

前の大会出場者とかに聞いてみたら？」

「ぼつず、それなら俺が相談に乗ってやるぜ」

グイツとしな垂れかかるリユーマを押し退けボーダーはナクトの方へと近づいた。

その顔には少々疲労の色が見え隠れしている。

酔っ払いの相手はそれだけ疲れるということか。

「ぼつずじゃない、俺はナクト、ナクト・ラグナードって言うんだ」
「！」

「ほう、威勢がイイな……気に入ったぜ」

「俺はリ्यूマって言います、ヨロピ」

ボーダーはリ्यूマを視界に入れずナクトの髪をわしゃわしゃと掻き回した。

「ふむ、ぼうずの頭は手触りがいいな」

「あ、ちょうどいいじゃん。」

ボーダーさんは去年の大会の準優勝者だし、聞いてみればいいよ」

「おいちゃんは？おいちゃんは？」

またしてもリ्यूマを視界に入れず、ナクトとボーダーの話に花が咲く。

再び頭に手を乗せて、ナクトの頭を撫でる。

「タチの悪いマネしやがつて……いいだろう、俺に任せな」

「え？ありがとう、ボーダーさん」

どうやらボーダーはナクトに協力する方向で話が進んでいる。

完全に空気と化したリ्यूマではあるがここぞとばかりに言葉をつなげる。

「たいちよー！自分も行きたいであります」

「……エリアカード持ってるか？」

「持って無いであります」

「じゃあコロシウム行つて貰つてきな、俺らは先に行つてゐるからよ」
適当に厄介ばらいをしたボーダーはナクトとともに酒場を後にした。
促すアリサに背を押され、彼もまた酒場の外へと繰り出した。

目指すはコロシウム、受付へ。
だがその前に桶がもう一つばかり必要なようだ。

コロシアムの受付、その奥には受付嬢が休めるための一室が存在する。

机があつて、椅子があつて、魔法ビジョンがあつて。
非常な簡素な造りのその部屋に、青い顔のリューマは机にべったり顔をひっ付けていた。

「嬉しいのはわかりますけどお酒に吞まれちゃダメですよー」

「あ……おう……さんきゅ」

ふらふらと覚束ない足取りでコロシウムまでは来たものの、照りつける日射について耐えきれなくなったりリューマはシュリの目の前でぶつ倒れてしまったようだ。

差し出された冷たい水がのどを潤す。

いまだガンガンと痛む頭に眉を顰めてしまふ。

「はあ、受付の仕事そっちのけでお世話して上げたんですからお姉さんに感謝してくださいよ」

「十分も経ってねえじゃねえか……」

「それだけ憎まれ口が叩けるなら大丈夫ですねー」

そう言つとシュリは扉をくぐり受付へと足を延ばす。

残された部屋の中、一人となったリユーマはボンヤリと開いた手を見つめていた。

握って開いて、握って開いて、握って開いて。

「なあにやってんだらうねエ……」

目を見開き勢いを付けて両の脚で立ちあがる。

若干ふらつく体をしっかりと握りしめた刀によって落ち着かせた。

「どーせやることなんてたった一つじゃねえか」

ニヤリと口元を持ち上げ、リユーマは扉をくぐりシュリを追う。

「あれ、もう行くんですか？」

「まあな、悪いがエリアカードだっけ、アレくれる？」

「はいはい。」

使い方はわかります？」

「シールを集めて認証管理官に張ってもらやぁいいんだろ」

「そうゆーことですね、午前中しか認証はやって無いんで急いの方がいいですよ」

ヒラヒラ手を振りリユーマは速足で歩きだす。

その歩が若干ふら付いているのはまた御愛嬌というものだ。

「頑張ってくださいねー、結構応援してますよー」

背中にかかるシュリの言葉は御世辞か、それとも本音か。
その辺りは彼女にしかわからない。

結局時間ギリギリで認証小屋に飛び込んだリユーマは無事初めの迷宮へと入れるようになった。

認証管理官を厳格なおっさんと予測していたため現れた青髪の巨乳少女『御前夏』には少々度肝を抜かれたが。

転移魔法陣で空間を越え辿り着いた迷宮『ファースト』。

といっても現れるのは『ぷりょ』に『ローパー』に『メイジマン』に『グリーンハニー』。

まだまだモンスターとしては最弱級の者たちばかりだ。

「ヘイヘイ煩わしいねツと」

飛びかかってくるぷりよを蹴り飛ばし、ローパーの眼球に石つぶてを叩きこむ。

『光の矢』を繰り出すため腕を掲げたメイジマンを叩き斬り、グリーンハニーも真つ二つ。

どうやらこの程度のモンスターではリユーマの足止めにすらならないよう。

まだ青白い顔でも余裕綽々である。

「滑った！？……見られてねエよな」

下り坂で足を滑らしみつともなく尻もちを付く。

酒に酔って気分の悪い胸とそれくらいが彼に与えたダメージだろうか。

ヒリヒリ痛む尻を擦りつつさらなる奥へとズンズン進む。

「ハニホー、ここを通りたければ三万GOLD出すあるよー」

「退けたんじゃなかったっけ？」

細い通路、そこに我が物顔で鎮座するのはカラーコーンのような外見を持った一匹のハニーだった。

『通せんぼハニー』と呼ばれるハニーの個体の一種。良く迷宮でこうやって道を塞いでいるのだ。

ちなみに赤色と茶色の二種類が存在し、今回は茶色。

石化し超重量となる事によって道を塞ぐタイプだ。

「げ、復活してるじゃん！」

そう言つて通せんぼハニ一の向こう側から姿を現したのはナクト。深くため息をつくリューマに目を付けると彼は少し勝ち誇った顔を見せてみた。

「アレ、リューマさんそんなとこで何してるんスか？」

イヤゝ大変ですね、ボーダーさんに土下座でもして退かしてもらふよう頼んでみたらどうですか？

ま、引き受けてくれるかどうかなんて俺はわかんないですけどね」

早口で、嫌味たっぷりにここの迷宮の認証シールをヒラヒラ見せつける。

多少溜飲が収まったのか『お帰り盆栽』を取りだした彼は枝を折り、虚空の彼方へと消えていった。

ちなみに『お帰り盆栽』とは帰巢本能のある特殊な植物の事である。枝を折り宙に掲げることによって迷宮の入り口に帰る事が出来るという極めて特殊で利用価値の高いものだ。

折れた枝も10分そこで再び生えてくるため、冒険者たちにとっては是非一つは持つておきたい必需品である。

「ハニホー、早く出すあるー」

「なんで俺が、お前に出すなんて勿体なさ過ぎるだろ」

「じゃあ通さんあるね、必殺……石化!!」

そう言うとかっちかちの鉱石のようになってしまった通せんぼハニ
ィ。

コンコンと軽く叩いてみるが、どうやらかなりの硬度のようだ。

「あゝああ、帰ってとっとと寝よ」

そう言つと彼は刀の柄に手をかける。

瞬間、一筋の銀閃が迷宮内へと煌めいた。

「何やってんの」

「あ……えと……羽純も頑張るみたいだから……私も何かしようか
と」

カテナイ亭の一室。

リユーマが借りて、現在八雲と二人暮らしているそこには編まれた
と思われるいくつかの籠と草履が几帳面に並べてあった。

顔だけこちらに向けつつ手を休めることは無い。

八雲は丁寧な藁のような草を規則正しく編んでいく。

「売る気か？」

「はい……ご飯代とか宿代とか、全部出してもらうのは悪いですが」

「ま、どっちでもいいけどさ」

妙に義理固い八雲は再び黙々と草履を作る。

辺りは夕焼けに染まっている。

差し込むオレンジの光は八雲の儂い美しさを一層引き立てていく。

「ンな事より飯は？」

「あ、下ごしらえは済んだのですぐにも出来ると思います」

「よし、じゃあ食おう。」

腹ア減って仕方ないんだよ」

グウと大きく鳴るリユーマの虫。

思わずクスクスと笑ってしまう八雲。

「ほれ、とつとと立て」

ゲシと軽く八雲の頭をはたく。

「……はい」

手を止めて、歩き出す彼女の足取りは昨日よりも少しだけ軽かった。

六戦目（後書き）

やっぱ三人称は難しいです

七戦目（前書き）

組み合わせ発表してみました

七戦目

大会一日目

第1試合 白井カタナ V . S . カリギユラ
第2試合 ナミールハムサンド V . S . 銀河爆神ドル

ガーラ

第3試合 ボーダー・ガロア V . S . 黒ひげサミー
第4試合 中華仙人 V . S . レオパルド・

マーラー

大会二日目

第1試合 タイガージョー V . S . 恐怖の大王
第2試合 ハリケーン斉藤 V . S . 宝光
第3試合 アジマフ・ラキ V . S . 松本山本
第4試合 十六夜幻一郎 V . S . アツシュ・根性

大会三日目

第1試合 ナチスパンサー V . S . レメディア・
第2試合 ナクト・ラグナード V . S . ドギ・マギ
第3試合 リューマ V . S . ゲラーミン

カラー

大会四日目

第1試合 邪悪大帝 V . S . ウートナー
第2試合 總統 K V . S . ラフレシア

頭巾

第3試合 マダラガ・クリケットV・S・戦士力キタロス
第4試合 チャネラー伊藤V・S・ブルマ大使

闘神大会開催期間中、魔法ビジョンにより放映される番組『闘神ダイジエスト』。

司会を務める『クリちゃん』と解説の『切り裂きくん』によって毎晩行われているこれにより組み合わせが発表された。

『魔法ビジョン』とはテレビのような魔法製品の一つである。その原理は単純で、例えば魔法冷蔵庫なら保温性の優れた箱に職人である魔法使い。

彼らが寄与魔法、この場合内部を涼しくするというモノを付ける事で魔法製品が出来上がる。

他にも予選で配られた『魔法時計』や電気、掃除機など様々な魔法製品が存在する。

しかしこれは基本的に宙に浮かぶ『闘神都市』の庇護を受ける都市、つまり聖魔教団の従属が強い都市のみ存在しているのだ。

いか程か前、魔法工学の権威『フリーク・パラフィン』によって『魔法貯蓄』という革命的な概念が発明された。

文字通りそれは魔力を注入し蓄えておくという技術のことだ。

彼は本来、瞬間的なエネルギーでしかない魔力を専用の装置に注入蓄えておき、必要な時に取り出して使用出来るようにしたのだ。

これによって魔池などに代表される魔法貯蓄が聖魔教団傘下の都市で普及し、彼らの魔法技術文明の基礎となったのだ。

この開発によって人類を統一した聖魔教団はさらなる発展を続け、従属の強い都市は従属が弱い都市とは比べ物にならないほどの技術を誇る事となった。

なににせよ、それによって組み合わせが発表されたのだ。そして一夜明け、リユーマは迷宮の中に居た。

今回の転移先選ばれた迷宮は『見世物小屋』。

『ぷりよ』、『メイジマン』、『グリーンハニー』に加えて『ヤンキー』が生息する迷宮である。

……とまあ偉そうに言ってみるがまだまだ最弱クラスのモンスターばかり。

木製のバットごとヤンキーを分断したリユーマは今、鼻息荒く目の前の光景を食い入るように見つめていた。

「おかゆ様……スゲエぜ……代わりてエなあ」

見世物小屋の一つではおかゆフィーバーと呼ばれるモンスターとサリア姫と呼ばれた女性の公開×××が行われていたのだ。

着物を押し上げ盛り上がった息子をチラリ、ゴソゴソと辺りを見渡す。

少しばかり歩いてきたがやはり先っぽが擦れて妙な感じだ。

「お、俺って運イイねエ」

見れば先ほどまで閉まっていた扉が開け放たれているではないか。

神経を集中させて辺りの気配を窺う。

どうやら近くに人はいないようだ。

そうと解れば一目散、扉の内側へとリユーマは駆けこんだ。

「たつたつたつたつたつたつたーたたーたたーたたーたたーたたーたたー」

鼻歌を口ずさみ、帯に手をかけそれを緩めていく。

その顔はだらしなく緩んで、初めてA Vを見た中学生の如くだ。

「ケケケ、では御開ちよ「パラッパッパラララー」ってなんじゃアアアア!？」

突如聞こえたトランペットの音。

開きかけていた着物を高速で閉じたりユーマ。

だらんと力なく垂れ下がった唐草模様の帯を引き引き、奥へ奥へと進んでいく。

「秘剣……臍抜刀切り!!」

見れば恥じらう事も無く堂々と、カッコイイのかカッコ悪いのかわからない技名を叫びヤンキー幾体かを一瞬で絶命させている男が居るではないか。

ヤンキーの集落か、とも思える数。

10か20か、それ以上か。

輪を描くように真ん中の緑髪の少年と銀髪の青年を取り囲んでいた。

緑髪の少年はお馴染みナクト。

銀髪の青年に見覚えは無いが、恐ろしいほどの速度と軽業師のような身のこなしで次々とヤンキーを仕留めていく。

「棒手裏剣ねエ……らしくねエ忍者もいたもんだ」

先ほどまでのみつともなさを隠すように、キツチリと帯を締め、真面目な顔を作って見せる。

とはいえ息子の方は元気ハツラツウ？なようで中腰であるが。

「Carry on!!」

突如死骸を見聞していたリューマの頬を白球が掠める。

こちらに気が付いた幾体かのヤンキーが、彼を攻撃対象として認識したのだ。

「H A H A H A ! !」

シユールなジョークを受けたような軽い笑いを洩らしながら、ヤンキーはバットを振りかざしこちらに向かって来た。

「むっ、いかん!？」

飛来する棒手裏剣。

だがそれよりも早くリューマのヤクザキックがヤンキーの体勢を崩し、追撃の踏みつけがその首をへし折った。

結果……。

「すまん！まさかそのように倒すとは思わなかった」

「いや、何のことがさっぱりわかんねえよ、俺は」

「刺さってるから！アンタ頭に刺さってるから！！」

ザツクリと額に黒光りする鉄の塊が突き刺さっていた。
ピューピューと冗談のように血を吹くりユーマ。

「コレ？……力を解放すると生える俺の角なんだ！！」

「んなわけ無いだろ！！」

吹っ飛んだりユーマの言葉に思わずツツコミを入れるナクト。

いつもならここでその問答は終わるはずだった。

だが今日この時この場所には、今までとは違った男が一人いた。

「角を生やす……だと」

「ッ！？そうだその通りなんだよ！

実は……俺、悪魔と人間の間に生まれたんだよ」

「イヤ、そんなのはいらねえから」

「人間と仲良くするためにこの大会に出場したんだ、きっと友達も
出来ると思って」

「どんな設定だよ」

斜め上に行く発言ではあるが銀髪の男はうんうんと首を縦に振る。

そしてガシッとリューマの手を握ると真っ直ぐと彼の瞳を見つめて口を開いた。

「君にならきつと出来る……きつとな。」

では少年、半魔のキミ、また会おう！！」

「忍者仮面さん！！」

「イイ奴だ……ノリもイイしなあ」

青年の立ち去った後、ナクトはしばし彼の行き先を見つめていた。

「未来の闘神、ヤンキーに囲まれて絶命す……と」

「ほっといてくれ！死んでないし！！」

闘神都市の広場では出店が立ち並び、イベントがそこかしこで行われていた。

大会目当ての観光客もたくさん目につく。

そんな中、とある一角に八雲はいた。
一角といってもホントに端の端の端、あまり人目の付かないところだ。

出店を出すこと自体は簡単である。

ここを管理しているところ、つまりコロシアムの受付で許可申請をすればいいのだ。

そしてシヨバ代を納め見事出店が出せるわけである。

まあしかし、人通りが多いところなどは既に店が立ち並んでいる。当たり前ではあるが高額のシヨバ代が必要で、尚且つ大会前に行われる抽選会にて当選した者たちだけが出店できるスペースなのだ。

勿論八雲は抽選会には行っていないし、お金もほとんど持っていない。店を出すから、とリュ・マに言うと言渡されたなけなしの100GOLDが彼女の軍資金だ。

そんなはした金でまともな場所など借りれる訳も無く、結果としてこの場所に追いやられてしまったのだ。

日差しは鋭く八雲の肌を刺す。

どこからか引つ張って来たござの上、籠と草鞋を並べておく。籠が一つ8GOLD、草鞋が一组3GOLD。

時折くびくびと、水を飲み込みのどを潤す。

「……売れないな」

結果として言おう。

彼女の商売、コレは全くと言っていいほどに振るわなかった。

売れたのはJapan出身だという老夫婦への草鞋二つと籠が一つのみ。

それはそうだろう。

草鞋なんて、一体誰が履くだろうか。

底の硬い、お金を出せば魔法まで付与された靴が流通しているというのに。

誰とは知れない人間の作った、田舎臭い籠など一体誰が買うだろうか。

頑丈な皮や、特殊な金属性の持ち運ぶための道具があるというのに。

「お嬢ちゃん、籠を売ってんのか？」

「あつ、はい」

久々に訪れたお客に八雲の気持ちも弾む。

「これまたずいぶん下っ手クソな籠だねえ」

「え……？」

「編みは緩い、造形は甘い、装飾の一つもありやしない」

まるで可哀想な子を見るように、深く重いため息を吐き出したお客の男。

ポイツと彼女の方に何かを投げて寄越した。

「俺の奢りだ、わかったらどっか行っちゃいな。

アンタみたいな素人さんがいるとこっちが迷惑なんだよ」

投げて寄越されたのは同じような形の籠。

だが彼女が作る者よりも正確に、頑丈に、美しく仕上げられていた。

舌打ち一つ、男は歩き去って行く。

貰った籠を持つ力が強くなる。

絞め付けるような痛みが八雲の胸を襲う。

周りは喧騒に包まれている。

だが自分の周りにだけには音という概念が存在しない。

そんな感覚を、八雲は肌で感じていた。

「おいっ！」

「あ……はい、いらしゃいませ」

籠を横手に置き、八雲は頑張って気持ちを入れ替える。

「お前、いくらだ？」

「えと8 GOLDになります」

籠の事で頭がいっぱいだった八雲はとっさに口を開いていた。

そしてふと、自分は間違った事を行っていたという事に気が付く。

訂正しようと移した視線の先、そこには先日ナクトと羽純に絡んでいた大男が下品な笑みを浮かべながら立っていた。

着物の隙間、布と布との間にドギの無骨な手が侵入しようと試みる。そしてその指先が彼女の柔肌に触れようか触れまいか、そのような距離で急にドギの動きは停止した。

「悪いがそいつは俺のなんだわ。」

ンで俺は闘神大会の出場者でこいつはパートナー、どういう意味かわかり？」

「ツチ！めんどくせえルールもあつたもんだ」

「まったくまったく、ここで肉塊にしてやれんのが残念で仕方ねエなアー！！」

ドギの太い首に紙一枚分、離れた距離に白刃が鎮座している。

リユーマはいつもと違って少々苛立たしげ。

「まあいい、勝てばこいつも食えるってことだしなあ」

そう言つて八雲から身体を離れたドギは高笑いしつつ人混みの中へと消えていった。

困むようにこちらを見つめていた群衆も、次第に疎らになって行く。

「……………うえ……………ひっ……………」

「泣いてんじゃねエっての、ウザッてエな」

ガンと八雲の頭にゲンコツを落としたリユーマは大量に残った商品

を見渡す。

予想通りといえば予想通り。

予想外なのは広場の端っこの方に店を構えていたことくらいだろうか。

「おい、コレいくらだ」

「……うえ？」

「うえじゃねエっての、いくらだって聞いてんだ」

「籠が一つ8GOLD、草鞋が一组3GOLD……」

ポイツと八雲に投げて寄越された袋。

その中はGOLDで埋め尽くされていた。

「全部俺が買ってやる、その代わり明日から俺の指示通りに動け。」

返事はハイかイエスだ」

敷かれていたごさを風呂敷代わりに、リユーマは商品全部を担ぎあげる。

ズンズン歩いて行く彼の背中に、小さく八雲は言葉を投げかけたのだった。

「……イエス、リユーマさん」

七戦目（後書き）

難しいなあ

八戦目（前書き）

だんだんと、構想も固まって来たこの頃

八戦目

カテナイ亭に戻って来てから、リユーマと八雲はナクトと羽純の部屋に居た。

尤もリユーマは鳴る腹の虫を抑えるために八雲を呼びに来ただけだが。

Japan風の自分たちの部屋とは違いベットと呼ばれる寝具の存在する部屋。

その寝具の上に橙色の、優しげな風貌の少女が横たわっていた。規則的に聞こえる寝息が命を刻む。

少し前までは衰弱し、足取りも覚束なかった少女ではあるが今は幾分か落ち着いている。

糸の切れた人形のように道に倒れ伏していた彼女を、ナクトは部屋へと運んだのだ。

彼女の名前は『マニ・フォルテ』、あのドギのパートナーである。

「落ち着きましたか？」

「はい……ありがとうございます」

八雲お手製のお粥を食べ、血色を取り戻したマニは、けれどまだまだ力無くうなづく。

服の裾でナクトの視線が定まっていた手首を隠しながら。

「あの、もしかして倒れたのはその痣が何か関係してるんじゃない」

「きゃーナクトくんできりかしー無い男ってさいてーよっ」

「うぐっ」

「だからまだ童貞なんだよ」

「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわー!」

真つ赤な顔で叫ぶナクトであるが女性陣、もとい羽純からの視線は痛い。

「ふふ……今更隠しても仕方ないですね」

悲しげな笑み。

ゆっくりと服の袖から手首をさらしつつ、四人の耳に自嘲気味な声が響く。

「これ……ドギに毎晩縛られて出来た痣なんです」

「緊縛プレイ!アイツもやるなあ」

うんうんわかってる、と頷くのはリユーマだけ。

あとは揃って顔を真つ赤に染め上げている。

それは恥ずかしさからか、怒りからか。

生々しい情事の跡を見せつけられて、平気でいられるような場数を彼らは踏んでいなかった。

「縛られて……それで酷い……事を……っうう……」

「熱い俺の滾りをお前で沈めてやるぜ!?!とかか?」

「おいッ！」

ケケケと悪人じみて笑うリユーマにナクトから降り注ぐ視線は冷たい。

それを見つけるとキリッと顔を作ってみせるリユーマ。

ケツと言、ナクトはマニへと向き直った。

「どうして……ですか……？」

「えっ？」

「その……あなたみたいな人があの人のぱーとなーに……」

八雲の言葉に突如としてマニはぼろぼろと涙をこぼし始める。

泣きじゃくるマニに投げかけた八雲はおろおろ、二人もつろたえるだけだった。

「どーせ犯されて攫われたの私、とかだろ。」

よくあるよくある」

ケタケタ笑いだすリユーマにビクッとマニの身体が大きく震える。

途端ナクトの拳がリユーマに迫る。

それを軽々と手の平で受け止め、ナクトの腹へとつま先をめり込ませた。

鳩尾に食い込んだそれに、ナクトは先ほどとった食事を床にぶちまけてしまう。

うづくまるナクトの後頭部に木製の下駄が押しつけられる。

先ほど吐き出した、臭い立つそれへと彼の顔を押しつけながら、リユーマはわかって無いとでも言いたげに口を開いた。

「泣くのは勝手だけだよ、じゃあアンタは泣かないための努力でもしたのか？」

受動的にアイツの言う事を聞き入れ続けて、今の状況にあるだけだろうが。

そんなんだからテメエは荷物運びできる便利な肉壺としか見られないんだよ」

足を頭からどけて、ひらひらと手を振りリユーマは自分の部屋へと向かう。

「傷でも舐めてもらえばいいじゃねエか。

俺はご免だがね…… テメエの意志のかけらも無い、奴隷みたいな人生は」

「そんな風に…… 言わなくても……」

「黙ってるクソガキ。

自分の立場はそこに居るのと同じ…… どういう意味かわかり？」

真一文字に口を結び、八雲はそれっきり黙りこくってしまふ。

この三日間、リユーマは八雲に触れてはいない。

頭をはたかれたり、ゲンコツを落とされたり、お尻を蹴られたり。そんなことは多々あった。

けれどそんなもの、自分の兄も良くやっていた。

八雲が遅れた時、間違った事をした時、ウジウジとくだらない事で悩んでいた時。

だからそれはちょっと痛い、スキンシップくらいにしか感じられなかった。

けれど違う。

今回ののはまったくもって違うのだ。

先刻、ドギに荒々しく扱われた痛みと恐怖が彼女の脳裏によみがえる。

そしてその行為を毎晩、いや朝昼夜、時間を問わず行われている人物が目の前に居る。

考えれば考えるほど、自分の体温が急速に失われていくような錯覚を八雲は感じていた。

扉が閉められ、沈黙が辺りを埋め尽くす。

身体にのしかかるそれを押し退けて、羽純はマニの隣に腰かけると背中に手を回した。

「リユーマさんの言ってることも一理あるかもしれない……でも！

ここにはあの人はいませんから……あの人はいないんですよ」

「……うぁ……っ」

「今は、今だけは……大丈夫ですから」

泣きじゃくるマニの背を、羽純は優しく撫で続けた。

女同士だからこそわかりあえるのかもしれない。

だがそれは自分の立場がマニと、そして八雲と違うから出来る事なのかもしれない。

自分のパートナーは幼いころからよく知る姉弟みたいな関係の男。たとえ襲われたとしても、ナクトなら……イイよ、なぁんて言えるくらいの気持ちを抱いてる相手。

生気の無い顔で立つ友人と自分の胸で泣く女性に対して、どこか疎外感と齒痒さを羽純は感じていた。

「ごめんなさい、急に取り乱したりして」

「いいって、でもよかったら話してくれないかな？」

俺らじゃ力になれないかもしれないけど、話してマニさんの気持ちが楽になるんなら」

「なあくぅとおゝ!!」

「えっ！ちよっ！なんで怒るんだよ！？」

羽純が用意したお湯に付けられたタオルで顔を拭きつつあるナクトは、恐ろしい剣幕の羽純に詰め寄られていた。

「いえイインです、聞いてくれませんか？私とドギのことを……」

長い沈黙。

辺りを見渡しマニの視線が八雲のそれと重なった時、少しずつ自分の事を話し始めた。

彼女はもともとある商家の一人娘で、両親に愛された普通の子だった。

ただ同年代の中で際立った容姿を持っている事を除けば。

そのため半年前、暴力団のリーダーとして幅を利かせていたドギに目を付けられ、そこから彼女の人生は大きく狂ってしまった。

一人で母親の誕生日の買い物に出かけたその帰り道、マニは襲われた。

気が付くと彼女はドギのアジトに居た。

そこからは彼女の意志は無くなり無理やりに純潔を散らされてしまったという訳だ。

彼女もまた八雲と同じく自ら望んでパートナーになった訳ではない。しかしここで少しばかり八雲とマニの立場は違ってくる。

もし拒む様な態度を取った時。

その時八雲は無理やりその事柄を行わされる。

だがそもそも要求される事柄が非道とはかけ離れているのだ。

飯を作れ、洗濯しろ、掃除しろ、何か買ってこい、道具の整理してろ。

せいぜい八雲がこの三日でリユーマに要求されたのはその程度である。

それは侍女か、メイドかその辺の下働きと変わらない。

衣食住はまともなものを与えているのだから、寧ろ高待遇といえるのではないか。

だがマニの場合、口に出すのもはばかれるような行為を無理やりに行われる。

性的であったり、暴力的であったり。

その日のドギの気分によって様々ではあるが、それはおおそ非道と呼べる行為だ。

ドギはさらにマニだけではなく彼女の友人や両親にも暴力を振るった。

だからこそ、優しい心というものを持っていた彼女はドギに従うしかなかった。

八雲の場合、彼女には頼れるものが今リユーマしかない、だからこそリユーマに従うしかないのだ。

両親の行方は分らない。

気が付けばこの闘神都市に居たのだから。

生きているのか、死んでいるのか。
それさえも定かではない。

マニはこれまで人形のようにドギに付き従って来た。
だが八雲は首輪は付けられているものの、人としてリユーマに付き
従って来た。

八雲とマニ、二人の立場は似ているようで酷くかけ離れたものであ
った。

話を終えるとマニは八雲の瞳を見つめた。

泳ぐ緋色の光。
けれどその奥底、そのどこかに淀まない流れを彼女は見つけた。

ナクトはドギに勝ち、闘神都市の管理下にマニを置くと息巻いてい
る。

その言葉はとても甘美で、マニの乾いた心に少しずつ水を注ぎ込ん
でいく。

だがそれよりも、マニは八雲へと意識を向けていた。

「……八雲さん、羨ましいです」

「え？」

「私は攫われるなら……あの人に……攫われたかった」

一夜明け、ナクトと羽純は連れだって通りを歩いていた。

昨日のマニを思い、闘神ビジョンを見て羽純を想い、一層気合を入れた彼である。

ダンジョンに、工房へ、二人はそれぞれの目的地を目指していた。

そんなところ、一組の見知った男女がホテルから出てくるのを目撃した。

女性は闘神都市にやって来た当日パートナーを頼んだお姉さん。

「ん？ぼうずじゃねえか。」

あのあとちゃんと探索出来たか？」

男は先日彼が世話になった、昨日闘神大会一回戦を突破したボーダー・ガロアその人だった。

「うん、でもごめん。」

同じ出場者だったのにあんなこと頼んじゃって」

「いってことよ、どうせ暇だったしな」

ナクトのタメ口にも文句一つ言わず余裕を持って話すボーダー。質実剛健な、器の広い男なのだろう。

「あ、私羽純・フラメルって言います。

お忙しいところをこの前はありがとうございました」

「羽純……言動が母親みたいになってるぞ」

「えーっ！？ボーダーさん失礼を……」

突如として始まった二人の夫婦漫才にボーダーは豪快に吹き出す。
それを聞いてまた漫才を始める二人。

その流れを断ち切ったのは一人の男の登場だった。

「いやゝ旦那、この前は悪かったですわ」

「あゝ、あん時の酔っ払いか。

今日は飲んでねえみてえだな」

「うえ、やゝなやつ」

現れたのは苦い顔のリューマ。

腰に日本刀と小袋をぶら下げて、編み傘片手に弄びながら草履を履いてのご登場だ。

彼の登場にナクトの視線は硬くなり、羽純の視線は辺りをさまよう。
そんなものお構いなしなりューマはボーダーと、隣のお姉さんを交互に見比べ親父臭い笑みで彼の顔を迎えた。

「昨晚は御楽しみだったようで……。」

「いや、これくらい色気のあるお姉さんなら羨ましさしか生まんですわ。」

「ケツ、茶化すなや」

「どうやらお姉さんはボーダーの、昨日戦った相手のパートナーだったようだ。」

「お姉さんの職業は『パートナー屋』、お金を出すことによって出場のパートナーを務める役どころである。」

「ふふつ、昨日はこの人に好きにされちゃったわ」

「……………」

色気たっぷり零す吐息に羽純とナクトの顔は朱に染まる。

「楽な仕事だったわ、思いのほか紳士だったし」

「紳士？それは聞き捨てならねえな」

「やあね、おかしいぐらいの変態じゃなかったってこと」

「じゃあどうですか！獣な俺との交尾は！？」

「旦那！俺と穴兄弟になりませんか！？」

「金はお前を出して、交渉もお前でやるんなら好きにしな。」

ま、出来るもんなら個人的にはご免願いたい」

「そりゃねえっすよ」

頂垂れるリユーマの肩をお姉さんの手が優しく撫でる。

「いいわよ、一晚10000GOLDなら」

「まさかの追撃！俺のライフはもうゼロよ！！」

自分たちの居る所とはやはりかけ離れた会話。

ナクトと羽純は真っ赤な顔を見られまいと俯いた。

「じゃ、今度は仕事抜きで会いましょ。

貴方も……一回戦くらい勝てたらね」

ボーダーに、加えてリユーマにも頬に軽く口づけをすると陽気な顔でお姉さんは去って行った。

残されたリユーマは緩んだ顔を見せて、グッと拳を握っている。

「お疲れ様」

彼女が見えなくなつて、少しばかり四人連れ立って歩いたところで、優しいねぎらつような声がかかった。

「ん？ああレイチエルか」

「一回戦突破おめでとう、ボーダー」

「よせよ、一回戦突破如きでそんなもん言われちまったらケツが痒くなっちまうぜ」

「うふふっ」

長い桃色の髪に優しげな容貌。
豊かな胸とくびれた腰が少し、強調されるような服を纏った綺麗な
お姉さんがそこに立っていた。

「スнгеエ美人……ガキンチョもそう思うよな!？」

「お、おう、確かに綺麗……ってガキじゃねえ!！」

「ちょっと、ナクトもリユーマさんも面と向かってそんな言い方失礼でしょ!！」

「あら、いいのよ。」

お世辞でもうれしいわ」

年上の余裕か、あらあらと母性的な笑みで三人を包む。

「イヤイヤお世辞なんかじゃ」

「そうです、とってもお綺麗だし素敵です」

「是非とも俺の滾る刀を納めさせてください!！」

「調子に乗んなっ！」

リューマの腹めがけて突き出された拳を彼はガツチリと受け止める。そしてギリと力を込めて、ケタケタと笑いだした。

「準決勝だっけ、そこで俺が勝っておいしく頂いちまいますわ旦那。

ま、旦那がそこまで勝てるかどうかは全くわかんねエですけどね
エ」

「それはこっちのセリフだ。

精々一回戦突破は出来るようにな」

額と額をこすりつけ、空いた手でガスガスとお互いを殴り合う。双方顔は強張っているが口だけは開いて、はははっと笑いあっているのも傍から見れば不気味だ。

「ふふっ、ボーダー」

「……ッチ、俺とした事がガキ相手にムキになっちまうとはな」

ゆっくりと互いの身体を離して、ボーダーは深い溜め息をついた。どうもリューマという自分のペースを崩される。

だがそれはなぜか不快な気持ではなく、どこか自分に心地よさを感じさせる。

「変なヤツだよ、お前はさ」

「照れるぜイ」

「褒めてねえよ、このクソガキ」

八戦目（後書き）

感情表現はおっかなびっくり

九戦目（前書き）

今回のコレってR15でいいんでしょうか？

九戦目

「ぼうず、何でもかんでも頼ってんじゃねえぞ」

「ケケケ、怒られてやんの」

「リユーマくん、そんな風に言っちゃダメよ」

ここは闘神都市にあるトトカルチヨ会場。

コロシアムで行われる大会の勝者を予測し、一攫千金を得ようという場である。

今日も今日とてその券が配られている。

第一、第二試合と終わり栄光を得たもの、屈辱を得たものそれぞれだ。

今よく出回っているのは今日の第三、第四試合。

そして明日行われるリユーマ、ナクト、そしてレメディアの試合だ。

さてはてその配当は、注目度はどうなっているか。

といっても殆んどの人々の注目はレメディアの出場する第一試合に集まっている。

それはそうだ。

なんたつて滅多に人前に姿を現さないカラーの一人がこのような闘神大会に出場するのだから。

はつきり言えばリユーマとナクトの試合になんてこれっぽっちも注目は集まっていないのだ。

第一試合はこの街に来てから予選以外で全く人前に姿を現していないカラーの試合。

第二試合は子供と田舎の暴れん坊の試合。

第三試合は大通りでゲロを吐くのを目撃された剣士と鋼鉄の巨漢の試合。

誰がどう見ても注目は第一試合。

そして賭けるならばカラー、暴れん坊、鋼鉄の巨漢ではなからうか。

そんなこんなでリユーマの配当は7倍、ナクトの配当は6倍と極めて高い結果となった。

ひとまずそれは置いて、今ナクトはトトカルチョ会場に居る三人に会っていた。

何でもゴミだらけの迷宮、『清掃週間』で凄まじく重いゴミ袋が行く手を阻んでいるらしいのだ。

元来どのような迷宮でも清潔なのが基本である。

モンスターや人の死骸も無ければ、使い捨てたものや食べカスなど雑多なゴミも無い。

それは迷宮に存在する女の子モンスター、『メイドさん』のおかげなのだ。

メイドさんとは他人の世話をするのが大好きな家庭的なタイプの女の子モンスターである。

迷宮などはメイドさんが一人いると清潔が保たれる。

なぜなら迷宮が綺麗なのは常に彼女らが清掃してくれるからだ。

今回のナクトが潜った『清掃週間』のようにゴミだらけの迷宮はおそらくメイドさんがいないのであろう。
ちなみに、妙な趣味でもあるのか倒される時は何故か嬉しそうである。

「ザマアｗｗｗｗ」

「うるせえ！だったらアンタだって通れんだろうが！！」

「俺の行ったときィ（）、そんなもん無かったって言うかァ（）
。」

てかゴミに埋もれる闘神ってマジウケルんですけどォ（）「

「うあああああ！！！」

「ぼつずもやめろ、お前も挑発すんな」

飛びかかろうとするナクトを肩を掴み動きを止めるボーダー。
ニヤニヤいやらしい顔のリューマにナクトはガルルと牙をむく。

「仲良しね、二人とも」

「誰が！……って照れてんじゃねえ！！！」

アッハッハと頭をかくリューマにまだナクトは鼻息荒い。
完全にナクトが遊ばれている状況だがちよつと自尊心の強そうな子だし、と桃髪の女性は自重する。

彼女の名前は『レイチエル・ママーラ』。

ボーダーのパートナーであり彼の幼馴染でもある。

正確に言えばレイチエルの兄とボーダーが幼馴染であり、幼いころから二人を追いかけていたのが彼女だ。

昔から年下のくせに世話好きの彼女。

そんなレイチエルは彼女の兄、『スコッティ・ママーラ』が彼女とボーダーを庇い亡くなり、ボーダーに口説かれた時から彼の女となつたのだ。

昔はそこやかしこの女性に手を出していたボーダーを受け入れられるような懐の広さを持ったレイチエル。

長年の付き合いからか、ボーダーとの間には夫婦のような雰囲気が漂っている。

また彼が対戦相手のパートナーを抱くことも『勝者の権利』として認める理解ある女性でもある。

「てかなんでアンタが二人といるんだよ!!」

「俺が誰といたってンなもん自由だろうが、お前は俺の父さんか」

よほどナクトはリユーマのことが嫌いなのだろう。

昨日完膚無きまでに叩きつぶされたというのに、おもつくそ突っかかっている。

脳筋か、鳥頭か、まあ彼に思慮という言葉は似合わないようだ。

「ぼつず、お前はもつと冷静さつてもんを持った方がイイな」

「だけどアイツは八雲さんを!!」

「……ああ、リユーマくんの言ってたパートナーの子ね」

「だったら知ってるだろ！！コイツは八雲さんに……ってなんで笑ってんだ！？」

「ふふふつ、二人とも若いなあって思ってたね」

詰め寄るナクトを笑顔でかわせるレイチエルは歳の功からか、踏んだ場数からか。

いまいちわかってない様子のボーダーを一目クスリと笑窪を作る。

「毎日ハッスルってことですね、わかります」

「デメエツ！！」

「だからしつこいって言ってたんだよ」

リユーマは視線を送って来たナクトに相槌を打つ。

ボーダーの腕の中、目の前で吠えるナクトを舌を出して挑発した彼は、そのまま手を振りトトカルチョ会場外へと歩いて行った。

あの後二人と別れたナクトは憤りを納められないでいた。

「なんであんなヤツがボーダーさんたちと仲良くしてるんだよ」

自分の目から見れば完全な悪。

そんなリユーマが同じ大会出場者として憧れを抱いていたボーダーの隣に居たという事実。

彼を苛立たせるには十分すぎる要素であった。

怒りか、それとも嫉妬か。

恐らくそれらが両方とも混じり合った感情を胸に抱きつつ、歩くナクトの足取りは重い。

「絶対決勝でブツ倒してやる」

トーナメント上、そして私闘禁止というルール上、決勝戦でしかリユーマと闘うことは出来ない。

元々ここには優勝するために来た訳であるし。

そう思うと重い足取りも徐々に軽くなっていく。

リユーマを地面に叩きつけ、八雲を救いだし、そして……。

「って何考えてんだ！確かに八雲さんは美人だけど！！」

頭に打ち入る妄想をブンブン外に飛ばし、ナクトは歩を速める。

「……………スタイルは羽純よりイイって言ってたし……………肌も綺麗だよな…………… 儚げな雰囲気も……………」

否、思春期の彼には全くと言ってイイほど捨てきれてはいなかった。

トトカルチヨ会場を出る途中、ざわめきが彼の耳へと入りこむ。
ふとその音源を見れば、会場の片隅にいつもとは違う人ばかりが
来ていた。

イベントでもあるのか、そんな軽い気持ちでナクトは人だかりへと
近付いて行く。

「……おい、またやってるぜ」

「闘神クランク様の、いつものご乱行だろ。」

いつもは闘神区画の中で墮落した生活を送ってるくせによ……同
じ闘神でもボルト様とは大違いだ」

「ああ、バニーの子も可哀想に」

バニーの子、その言葉でナクトの脳裏に一人の女性が思い浮かんだ。
『夢色・パニイ』というなのトトカルチヨ会場司会のおねーさん。
明るいつ顔を振りまいてくれた、優しく美しい容貌の女性だ。

そのパニイは今、公衆の面前で裸に剥かれ、形の良い乳房をさらし
ている。

単純に言えば公開レイプ。

浅黒い肌の、モヒカン頭の酒臭い中年の男が彼女を強姦しているの
だ。

彼の名前は『クランク』、そしてその称号は闘神。

ナクトが目指す結果がそこにはいた。

突如としてトトカルチヨ会場に現れたクランクは、彼女を見るなり

いきなり押し倒し、事に及んだ。
痛みが走るのか、苦悶の表情を浮かべるパニー。

「どうだい、おじさんのアカメフルトを味わえるなんて最高だろ？」
下種じみた笑みを浮かべながら、いやいや首を振るパニーに克蘭クはご機嫌だ。

ちなみにアカメフルトとはここ、トトカルチョ会場で販売されるケチャップ付きの赤長いヤツ。
男の子モンスターの一体である『アカメ』から作られるこの名物だ。

ちなみにアカメは赤い指ぬきに一つ目と凶暴そう大口が付いた様な生き物。

『火爆破』と呼ばれる炎属性の広範囲魔法を操るため、数を持って現れれば熟練の冒険者パーティーでも苦戦することがある、結構危ないヤツなのだ。

彼女の心は嫌がっているながらも克蘭クの言われるがままにパニーは身体を、腕を、指を動かす。

『この街で闘神は絶対』、ここに住むものならば誰もが知っている絶対尊従の掟。

襲われてしまっても、被害者は加害者に従わなければならないのだ。
周囲の人々も、哀れな彼女を前に克蘭クを止めようとせず、息を潜めて目の前の光景を静かに窺う。

誰もが自分の身に不幸の降りかかる事を恐れ、嫌がるのは当然のこと。

だからこそ、人々はただ傍観をする。

そして、事が終わるのを、嵐が過ぎ去るのをじっと待っている。
終わり過ぎ去れば、大丈夫なあってパニイに声をかけてクランクの
悪口を並べたてるのだろう。

だが内心皆がこう思っているはずだ。

『嗚呼、自分じゃなくって良かった』と。

「さあて、パニイちゃん今ここがどうなっているか教えてあげなさい」

「……あ……う……」

「言わないならもつとヒドイことしちゃうよ」

刹那、頭に血がのぼったナクトは走り出す。

「くそつ、やめさせないと!!」

だがその前に大きな影が立ち塞がった。

「待ちな、ぼつず」

「ボーダーさん!なんで邪魔するんだよ!?!」

「この街で、闘神は絶対だ。」

「逆らうことは許されない」

重々しい彼の声がナクトの中を震わせる。
確かそんなルールが。

そう思い到るも沸き上がった感情を抑えつける事など出来はしなかった。

「でもっ、こんなこと見過ごすわけにはいかないじゃないか!」

「何度も言わせるな、この街で闘神は絶対なんだ。

ことの是非など問題ではない」

「だけど……っ!」

「なら、闘神に闘いを挑むか?

とことんゲスなヤツだが、それでも一度は頂点を極めた男だぜ」

冷や水を掛けられたかのように、ナクトの動きは止まる。

ドギにすら、勝てなかった自分。

そんな自分が果たして目の前の闘神相手に闘って、勝てるというのか。

それでも、という思いが沸き上がりナクトを焦がす。

「気持ちわかるが今は耐えろ、パートナーの嬢ちゃんの為にな」

そしてすぐさま鎮火された。

闘神に剣を向ければ自分だけではなくパートナーである羽純にもきつい処罰が下される。

そのようなこと、火を見るよりも明らかだった。

「くそう……」

結局呻き、この光景をただ見ていることしかできない自分。
そんな現状にナクトは齒がみをする。

パシヤッ

粘着質な水音ばかり響いていた先ほど。
しかし今この時までとは違った音がナクトとボーダーの耳に飛び込んで来た。

人垣に囲まれていたのは凌辱されていたパニィと凌辱していたクラ
ンクの二人。

そこに新たな三人目が姿を見せていた。

「むほっ、ナイスアングル！」

いやゝイイ仕事してますねエ」

「……誰かな？おじさん汗臭い男に興味は無いんだけどなあ」

「俺っスか？俺は通りすがりのカメラ好きでさア。」

イイ感じのハメ撮り現場を見つけちゃったんでつついっ首を突っ
込んででしまいましたわ」

「ハメ撮り？」

「そーなんすよ！」

俺は写真撮らせてもらっただけで十分なんで……あ、カメラは差し上げますよ」

「むふふっ、それもイイかもしれないねえ」

「ゲヘヘ、そうっしょ」

顔を近づけてゲヘゲヘといやらしい笑みを浮かべるクランク。再び動き出す彼の周りを回りながら、一心不乱にシャッターを切るのは和服姿の丁髷男。

「アイツ……何考えてるんだよ!!」

先ほどまで自分と一緒に居たリユーマその人だった。

「こんな感じがな」

「実にナイス！イイ感じですよ」

グチャグチャと、リユーマに見せつけるように動くクランク。必然的に囲むものを意識するような動きもリユーマへと集められていく。

「アイツ……ここまでのバカタレか」

「っ!!」

「どこ行く気だ」

「決まってるだろ！」

アイツをぶん殴るために決まってるじゃんかー!」

予想どおりのナクトの言葉。

ニヤリと釣り上げていた口元をキュッと結び、ボーダーは腕を開く。

「許さん」

「へ？」

「アイツを……リユーマを止める気なら俺が許さんって言ったんだ」
ぼうず扱いだった自分とは違い名前を呼ばれるリユーマ。

自分と、下劣な存在であるはずのリユーマにボーダーの中ではそれほどまでの違いがある。

そんな付きつけられた事実にも、ナクトはしばし動くことが出来なかった。

「おおっ、いくよ」

「ナアイスな終わりで！」

パニイの身体に降りかかった白濁液。

それを見せつけるようにレンズの前へと運び、ふいふと満足したかのようなクランクは息子を服の中へと隠した。

「じゃあコレは貰ってくよ。」

あ、おじさんからの粋な計らいとしてパニーちゃん、好きにしちやっていいからねえ。

じゃあ帰ってクソして楽しむとしますか、ぐはははははははっ」

そう言うとカメラを小脇に抱えたクラंक。

もはやリユーマに、そしてパニーにも一瞥もくれず、下品な笑いだけ残してその場から立ち去った。

「ひゃっほーい、美人さんいっただきイー!!」

呼応するようにクラंकの体液で汚れたパニーを抱えたリユーマは近くの建物めがけてすっ飛んで行った。

中に居た女の子たちを外に押し出して、立てこもった中は女子更衣室を兼任するバーニたちの控え室。

窓を閉め切り鍵をかけ、最後に人々に勝ち誇った笑みを浮かべたりユーマ。

瞬間群衆は爆発した。

「ふざけんなアー!!」

「闘神の腰巾着が!!」

「こらーっ、私のカメラどうしてくれんのよー!!」

「ゲス！下種！テメエなんざ最低だ！！」

更衣室を囲み騒ぎ立てる人々。
乗り込もうと行動を起こす者もいた。

しかし不審者対策万全なバニーたちの更衣室。

盗撮や、ちよつとやそつとの冒険者崩れの暴漢たちにも安心安全の設計だ。

頭に血の登った一般市民如きではその防壁を破れる訳も無い。

「イヤアアアッ！！」

周囲に木霊するパニイの叫び。

それ以降、彼女の声は全く聞こえなかった。

結局一時間後、妙につやつやした満足げな顔のリューマが扉を開けて外に姿を現した。

彼を迎えたのは石と、ゴミと、暴言の嵐。

そんな彼らにザマアwwwwwwと一言、リューマは睨み付ける眼光で人々を退かせ、悠々と歩き去って行った。

九戦目（後書き）

ウチの主人公はこんな感じ、ウチの原作主人公はこんな感じ

十戦目（前書き）

なんとなく、原作主人公にイライラが溜まりだした今日この頃

十戦目

「私のカメラ、どーしてしてくれるのよ!!」

アレが無くてどうやって私に記事書けって言つの!？収入源が空っぽになっちゃうじゃない!!」

「んなこと言ったって見てただろうが。」

闘神様に盗られちゃったんですう、俺にはどうしようもなかったんですう」

「そんな事言おうがアンタが先に私のカメラ盗ってったんでしょーうがッ!!」

ヤイヤイと騒ぎ立てる薄紫色の髪の少女にリユーマは適当な相槌を返す。

トトカルチョ会場を後にし、カテナイ亭へと歩みを進めたリユーマであるがその後を追いかけるように彼女が付いて来たのだ。

「あの……お茶です」

「あ、ありがとう」

湯呑みを八雲から受け取り喉を鳴らす少女は『シャーリー・山本』。自称『愛と真実と正義のリポーター』な新米報道レポーターである。

「てかアンタ明日の試合の……ああ名前忘れた！」

なんでアンタみたいな話題性のかけらも無いヤツに……ってゲロ吐き剣士!!」

「吐いてやろうかテメエの顔に……」

「そんなこと平気で言えるなんて男の子としてどうなのよ！」

このクズ！下劣！ノータリン！だから童貞……じゃあないわね」

機関銃のように言葉を並べたてるシャーリー。

幾分か言いたいことをぶちまけてスッキリしたのか、立ち上がっていた腰をおろしてリユーマを睨む。

クランクの乱行にて彼がハメ撮りに使用したカメラ。

実はこれ、彼女のものだったのだ。

明日の出場選手……よね？と曖昧な記憶を頼りにリユーマに取材をしていたシャーリー。

一回戦敗退組みだろうけど、なんて失礼極まりない言葉で始められた彼女の取材途中、リユーマは彼女のカメラに興味を示した。

首からかけた紐を外し、自慢げに講釈を並べるシャーリーの間をつきカッパらい彼はすっ飛んでった。

それで先ほどの出来ごと。

もちろんクランクに相手に返してください、なあんて言えるわけも無く。

盗ったこいつが悪い！と極めて平凡な結論に至ったのだ。

「ハイハイ悪うござんした〜、どうかこのとーり許してください〜」

「棒読みで何言ってるのよ！」

袖口を掴み上げやんのかコルアとでも言いたげなシャーリー。
掴む腕を鬱陶しげにとり、よいしょと彼女ごと抱え上げて自分の横に。

クイクイツと顎を動かす。

その動作にちよこんとリユーマの前に腰を下ろした八雲は、怨念でも出ていそうなシャーリーの視線をビクビクと見つめる。

「とりあえずカメラは弁償してやっからだーってろ」

「なんなのその態度！」

だから一回戦敗退組みの、アンタみたいな泥臭い男はダメダメなのよー!!」

唾を撒き散らし、ぺたぺたリユーマの頬に付くが気にしない。
そんなことよりも、目の前の八雲の言葉がリユーマには今欲しかったのだ。

「で、しっかり働いて来たか？」

「あ……えと……頑張ります」

「イヤイヤ今頑張られても困るんですけど」

「すつ、すいません……」

顔を赤く、小さくなる八雲。

シャーリーの罵詈雑言が気になるが、強い視線に頭の中を整理していく。

「……今日の一回戦ですけど……」

朝食を取り、部屋の掃除とリユーマの準備を済ませた八雲は重い気持ちと軽い気持ちが同居する心情で、のろのろと歩みを進めていた。

重い気持ちは無論昨日の出来事。

自分と同じように攫われたマニの言葉が八雲の中に大きく鎮座していたから。

『あの人に攫われたかった』。

自分と同じような立場の彼女に、そんな言葉を投げかけられるなんて思いもしてなかったから。

だったら自分はどんな言葉を予想していたのだろうか？

大変だね、辛いよね、そんな風に同調するような言葉を予想していたのか。

最低だよ、早く負ければ一日我慢すれば自由になれるのに、そんな風に攫った人間をけなすような言葉を予測していたのか。

美味しいもの食べさせてくれた、意外にイイ人だね、そんな風に

攫った人間のイイところを羅列するような言葉を予測していたのか。

恐らくどれもが正解で、どれもが不正解だろう。

信じられないかもしれないが、八雲は今の現状に満足し始めている。勿論自分の純潔を奪われたのは酷く悲しいし、攫って来たリユーマに全く恨みが無いと言えば嘘になる。

だが彼女の出身はJapan。

眼を付けられて、すぐさまその日のうちに逆らうことすら出来ず輿入れ、という現状が実際にある国なのだ。

事実、同じ村の少女が小早川に仕える武家の息子に見染められ、数日後には美しい純白の着物を纏い、御輿に乗っているのを見た事もある。

それはそういうモノ、そして家族の為にも名誉なこと。

そんな認識が、八雲の中には植え付けられているからだ。

と考えれば畳に寝れて、恐らくJapanに居ては一生見られ無いものを見て、食べられないものを食べている今の生活。

コレは酷く恵まれた生活ではなからうか。

父母の事を思い出そうとすると、頭が酷く痛くなる。

二人が、そして兄がどうしているかというのは気になる事ではあるが、彼女の憂いはそれくらいモノ。

後は実質的な自分の感情の問題だ。

段々と、段々と、八雲はリユーマに心というモノを開き始めている

のだ。

まだ四日ほどしか経っていないが濃密な時間を八雲は過ごしている。ただ春は畑を耕し、夏は水を汲み草を抜き、秋は稲を刈り取り、冬は草履や籠を編む。

兄がいなくなつて、長者様の屋敷や山や川に行く機会もほとんどなくなり、単調で退屈な生活となっていた。

それをリユーマは攫うという、倫理的にはおかしい方法ではあるが吹き飛ばしたのだ。

見るものすべてが目新しく輝いている毎日。

引つ込み思案だからなア、と兄に出来るかどうか心配されていた友達というモノも出来た。

必然的に会話がいるため初対面相手にも、気後れはするが話せるようになって来た。

文字の読み取りが必要で、知識というモノが頭に入つて行くのを実感できる。

「……幸せなんだな、私って」

怒鳴られたり、脅されたり、馬鹿にされたりすることはよくある。だがここに来て、それ以上の幸せが八雲に降りかかつて来ている。

今日迷宮にリユーマが出かける時、いつもの下駄ではなく草履を履いていたのを見て、涙すらこぼしそうになったのを覚えている。

大量で、手を伸ばしたくなる飴と厳しく八雲を穿つ鞭。

この適度なバランスがリユーマへの隷属、という形で彼女の言動を

構成しつつあるのだ。

「……でも、マニさんは……」

そう考えるとマニと、自分との間にひどく隔たりを感じてしまう。同じで、でも果てしなく違う二人。

リユーマや羽純を思うと軽くなる気持ちに、手放せばんざーいと喜べないのはこのためだ。

「私には……何も出来ない」

あの人に攫われたかった、あの人に攫われたかった、あの人に攫われたかった。

マニの言葉が八雲の頭をグルグル回る。

あの人はある人、私は私、つまり私勝ち組k t k r。

そんな風に割り切れたらどれだけ楽だろうか。

いい意味でも悪い意味でも、八雲は人に気を遣いすぎる一面がある。気が付く彼女はリユーマにとってはいい掘り出し物で、非常に重宝しているのは間違いない。

朝起きれば朝食はいつでも食べれる準備が出来ており、迷宮に潜る準備だつてももちろん、世色癌の古い新しいまで選別する始末だ。

汚れた和服は気分も爽快になるほどに、買って来た洗濯板で綺麗にしてくれる。

下駄も鼻緒の具合を確かめ、くつついた土なんかも取り払う。

部屋にはゴミ一つなく、聞いた話ではマルデに変わり二人の部屋は

八雲が掃除するといったそうだ。
リユーマに聞き弁当を持って送り出し、帰ってきたら夕食の準備は
しっかり完了済み。

どこぞの良妻！？とでも言うスペックを八雲は誇っているのだ。
ちなみにコレは彼女の母親の訓練の賜物で、そんなわけで父母は年
中のようにアツアツである。

「……出来ない……私には……何も」

マニを見てしまい、マニの現状を知ってしまい、だからこそ八雲は
心を痛める。

偽善なのかもしれない、自分とは違う立場だからこんなこと思える
のかもしれない。

昨日の羽純と同じような、でも立ち位置の違った八雲が生み出す感
情。

それは茨のように鋭い刺を持ち、八雲の身体に絡まり絞め付ける。

「……ごめんなさいっ」

思わず口に出してしまった言葉に八雲は口を覆う。

同情してしまったら、さらにマニが小さく、ダメな存在になってし
まうような気がして。

他の誰は良くても、自分だけは同情してはいけないような気がして。

「頑張らなきゃいけないんだ……私は私で……、マニさんの為じゃ
なくて私の為」

心に張った糸を一層強く、彼女は前を向いた。

石段を登り、受付でこちらを見つけたシュリが手を振る。

「八雲さん、リユーマさんから聞いてますよ」

「あのっ、私何をすればいいのか聞いてないんですけど……」

「あらら、サプライズが好きなんですかね？」

「さぶらいず……？」

「でもでも、きっと八雲さんは喜んでイイと思いますよ！

なんとって大会の全試合を生で見ることが出来るんですから」

「……注意すんのはタイガージョーってヤツに宝光ってとこかねエ」

八雲から伝えられた情報を元に、リユーマはムムムと唸ってみる。
彼が彼女に与えた仕事、それは大会を見学して情報を手に入れてくることだった。

実はリユーマ、昨日までは酒場『ハニワ浪漫』にでも雇ってもらえ

るように頼むつもりであつた。

だが大会一日目の様子を放映する闘神ダイジェストを見て愕然。ちよっとお粗末すぎねエか、とも思える放送に急遽仕事内容を変更したのだ。

闘神都市にある高級宿『アルカトラズ』に泊れるほどの資金を実は持っているリユーマ。

なぜカテナイ亭に泊つたのかといったところは不明であるが、とりあえずお金に余裕はあるのだ。

そんなわけで朝一でコロシアムのシユリの下に。

全試合を観戦することのできる高級チケットを一枚、現金叩きつけて買ったのだつた。

「その……それで宝光つて人、あの編み傘の人で……」

「なにになにつ、貴方たち宝光選手と知り合いなの!？」

「だつたらアポ取つて!あの選手もレメディア選手と一緒に全然宿から出て来ないのよ!!!」

「……あぼ?」

「忍び込もうと思つたらあの眼帯女に止められて放り出されるし……!」

「それだつたらこのシャーリー・山本、広い心で少しだけあなたを許してあげるかも……って無視すんな!!!」

編み傘に手を伸ばし、その裏を少し窺う。

「まア何にせよ、も一回会ってみるっきゃねエか。

てかお前まだ居たの、宿無しとかか？」

「誰のせいだと思ってるのよーっ！！」

再び鼻息荒く、ガトリング銃のように言葉を乱射するシャーリー。いつもなら、広場の喧騒にも耳を澄ませてしまい参ってしまう八雲であるが、今日ばかりは少し違っていた。

シュリに対戦相手は聞いた、グラーミンという名前の大男らしい。

『出場受付に現れた時はびっくりしましたよ。』

だって床を揺らして歩み寄ってくる青銅色の巨体ですからねー。

その威容からグラーミン選手は注目を集めているみたいです、知られている前歴は無しってのも怖いですし。

リユーマさん、どれくらい強いのかわかりませんが、八雲さんも覚悟は決めとくべきですよ』

シュリの言葉を思い出すと、どうも不安になる。

無償労働から助けてくれるだけのお金は持っているのかもしれないが、助けてくれるのかどうかわからない。

そして、自分はある男に好きなように弄ばれるのかもしれない。

そう思うと胸が寒くなる。

「……ッ！」

怖い、怖いのだ。

リユーマに攫われ、ようやく少しだけ、夜寝るときに安らげるようになりつつあった。

だが負ければまた訳のわからぬところに連れていかれるのかもしれない。

そしてそこは、こことは比べ物にならないような劣悪な環境なのかもしれない。

それ以前に、彼女も他の勝者が行っているのを目撃した公開レイプ。

いたたまれずに、その場にとどまる事が出来なくて、逃げ出したあの行為。

自分の身に、自分の体に、刻まれるかもしれない。

「あの……ちょっと、大丈夫？」

顔真っ青じゃない！」

「あ、いえ……その……私は……私は、……」

「大丈夫なんて言う気？」

そんなもん絶対嘘に決まってるじゃない！」

一般的な良識はあるらしく、シャーリーは八雲の肩を撫でさする。そしてどうにも荒い呼吸が収まらない八雲に、縋るような目つきをリユーマに向けた。

「んぐんぐ……ぷはア、やっぱJapan酒はイイねエ」

「ってなにやってんのよーっ！」

「まあまあ、とりあえずお前も飲め」

「っちよっーば」……ぐびっ、……ふぶっ」

酒瓶一本、口をシャーリーの口に突っ込み入れて、逆さに持ち上げる。

当然凄まじいまでの勢いで酒が流れ込む訳で、鼻からむせ返らせる訳にもいかず一心不乱に喉を鳴らす。

そして空いた手でグイと八雲の肩を掴み引き寄せると、コップ一杯なみなみと注がれていたそれを八雲の口に押し込んだ。

「……きゅう……」

真っ白な肌を真っ赤に染めて、グルグル目を回して倒れる八雲。
あはははははと陽気な声を響かせ、自ら酒瓶片手に喉を鳴らすシャーリー。

「いやはや酒ってイイもんだねエ」

呟いたリユーマの言葉は二人に届くことなく、彼はひっそりと自室を後にした。

余談ではあるが、次の日の朝起きた八雲は痛む頭を押さえながら辺りを見渡す。

そこには数本の空になった酒瓶と、何故か素っ裸でゲロに顔を突っ込んだシャーリーが居たそう。

二人をほっついて出て来たリユーマはというと、すっかりと喧騒の消えた広場に居た。

その真ん中にぼんやりと腰を下ろし、夜空に浮かぶ星を眺めている。

「案外ロマンチストさんなんですね」

「いや、まあ癖みたいなもんだねエ。」

ナガサキは今仕事終わりか？

「だからその呼び方はやめてって言うてるじゃないですか」

ぶくつ、と頬を膨らませるシュリ。

その仕草はどことなく子供っぽくて、彼女の年齢を感じさせない。

「やっぱり、明日の試合が不安とか、八雲さんが心配とかですか？

もう、だったら一緒に寝てあげればよかったのに！」

「そりゃ無理だわ、今もう一人ばかり女が転がり込んでっからなア」

「んま、お盛んですね〜」

ほいほいつとどこかに歩き出したシュリ。

ガタンと、魔法自動販売機で缶入りこーしいを買って来た彼女はリユーマへと差し出しその隣に腰を下ろす。

温かいそれは少しだけ、冷えた空気にはちょうどいい。

「お姉さんが悩み相談なら特別に受けてあげますよ、同い年っぽいんですけど。」

まあぶっちゃけ帰っても暇だからなんですけどね」

「同い年っぽいって、ンじゃ結構若いじゃん」

「そうですか！

もう嫌ですねっ、お世辞なんていったってこれ以上奢ってあげませんよ！」

ビシビシと上機嫌にリユーマの肩をたたくシュリに不思議そうな顔を作ってみる。

ブハッとむせてしまったのは御愛嬌だ。

「だって十九だろ？」

「へ？ってリユーマさんて二十半ば……っ！！」

「ほう、後半か……イヤイヤいんじゃないの」

「つちよ！違います、私も二十歳そこそですー！」

「二十代は全部二十歳そこそだもんなア」

ケタケタ笑うリユーマにシュリは白い目線。

それを軽々と受け流した彼は立ちあがり、空になった缶をポイツと虚空に放った。

「……行くんですか」

「ンな不機嫌そうに言わなくたってさ。」

ま、明日見てな、勝利をお前にプレゼントしてやるぜ……ってか
！！」

「クサイ上に古いです、もうちょっと女心を勉強すべきですね」

今度はケケケと悪人チックに笑ったリユーマ。

立ち上がり、てかてか宿の方へと歩み去って行った。

リユーマが居なくなつて少し、シュリも腰を上げ家路を急ぐ。

本来ならこんな風に自分が特定の選手に関わつてはいけない。

だが必死な八雲を見て、そしてどうも受付歴（秘密）年の自分が見ても掴みきれないリユーマの実力を肌で感じ取って。

「応援してるつてのは……ホントかもしれませんね」

ポイツと入り口近くにあるゴミ箱に缶を投げ入れ、シュリは夜道を進んでいく。

彼女が投げ入れたその中には、先ほどまでシュリが飲んでいた缶と、同じ種類の缶がもう一つ、ひっそりとその存在を主張していた。

十戦目（後書き）

だがきつと、彼は変わってくれる

RPGってそんなもんですよね

十一戦目（前書き）

物語は遅々として、ってこんなもんなんでしょうかね

十一戦目

「ウハッ、スゲー人だから……、流石のカラーさんってところか」

「あつ……待って下さい」

「トロイねエ」

超満員のコロシアムの中、押し寄せる人波をヒヨヒヨイ掻き分けリユーマは進む。

それに遅れまいと必死に追う八雲。

だがどうも、その足は思うように動いてくれず、群集の流れに乗って彼女は押し飛ばされていく。

自分の前を、横を、後ろを通り過ぎていく人々の顔、顔、顔。

どうも気分が悪くなる。

人混みはもともと苦手、はっきり言ってしまうえば人自体あんまり得意ではない。

幼い時は、寧ろ活発で意地っ張りで、なのに引っ込み思案という矛盾だらけの性格だった。

「ったく、なんか知らんがここはお前の仕事場だろうが」

猫のように襟首をひよいと掴まれ、足が宙に浮く。

着物を掴まれているのに首が締まる気配は見せない。

浮かせた身体を力チリと硬直させて、八雲はすいすい人混みを越えてゆく。

二人分が通るわけで、その分だけ幅が広がるわけで、だというのに見晴らしのいい席を二つ見つけるまで結局彼女は誰かにぶつかる事も無かった。

「快晴快晴、いいこったいいこった」

「あ……えと、お茶入れておきました」

魔法瓶に入った冷えたJapan茶をコップに注ぎ、リユーマへと差し出す。

一口含み、細かい粒の土が敷き詰められた闘技場を見渡す。

頭の痛む八雲に朝食を作らせたリユーマは、まだゲロに頭を突っ込んだシャーリーをほっぽって、コロシウムへと足を伸ばした。

「さてはて、期待外れじゃねエことを祈るぜい」

龍のコーナーから姿を現したのは豹のような毛皮を被った一人の男、『ナチスパンサー』。

鬼のコーナーから姿を現したのは青いマントで全身を隠す女、『レメディア・カラー』。

大喝采が辺りを埋め尽くす。

声は振動となって、コロシウム全体を震わせるかの錯覚を覚える。

マントを脱ぎ捨て、蒼に煌めく剣が、青にたなびく髪が、その美麗な相貌が観衆の前へと晒された。

瞬間最高潮かと思われた大喝采はさらなる飛躍を見せる。

目を白黒させながら辺りの様子に吞まれる八雲。

流れる黒髪に荒々しく手の平が置かれ、リューマは乗り出すように、並ぶ二人を食い入るように見つめた。

「……こつちを……向いた？」

「こら早めに接触したいもんだねエ」

まるで自分たちを方を向いているかのように、視線を投げて移したレメディア。

周りの観客は、自分の方を向いたと感動し、歓声に更なる色を付ける。

「あのっ……リューマさん」

「さア、俺がンなもんわかるわけねエだろ」

八雲の上に置いた手をどけて、席に深々と腰かける。

それを確認したかのように刃がナチスパンサーに向けられ、シュリの試合開始の合図とともに、剣と拳が結びあった。

ナクトの試合も終わって、自分たちの試合開始時間まであと少し。リューマと八雲は今、観客席から動けずにいた。

レメディアの試合は彼女と同じく美麗の一言であった。

幾撃も幾撃も、迫る拳を舞踊でも踊っているかの如き足捌きで流し、かわし、その身体に相手を触れさせない。

動きの一つ一つが、彼女の姿と相まって芸術品でも見ているかのような、というのが八雲の感想。

されど繰り出される彼女の剣は凄まじく速く、圧倒的手数を誇っていた。

右を切られたと思えば左に刃が迫り、左を庇おうとすれば掬い上げるような剣が迫る。

懐に入り込もうと思っても、流れるようにそれを許さない。

一度だけ、ナチスパンサーがレメディアに密着し、至近距離からの一撃を放とうとした。

だがそれも長い脚で繰り出されたハイキックがその顔を捉え、蒼い刃が彼の喉元に付きつけられていた。

試合はそれで終わり。

リユーマに言わせれば殺陣でも見ているかのようにだった、とのこと。それほどまでに、試合が作り上げられていたのだ。

逆にナクトとドギの試合はみつともないの一言。

力任せに、技術のぎの字すらない男が振るう斧を、剣を携えた少年が必死に逃げ、受け、避け、そして攻撃する。

腕にしがみ付いてまで、勝ちに固執する姿はそれはそれで美しいの

かもしれない。

だが第一試合とははつきり言ってレベルが違いすぎた。
加えて言えば観客も少なかった。
レメディア戦の半分というのは言いすぎかもしれないが、けれどその程度。

やはり注目度という点で言えば段違いなのだ。
ナクト勝利という形で終わったが、盛り上がり欠ける試合であったのは確かである。

そして第三試合、リユーマとゲラーミンの試合時間まで10分を切る。

「リユーマさん……大丈夫ですか？」

「……うあ……もうちょっと優しく、さすって」

観客席に在るのは真つ青な顔をしたリユーマと訳も分からない今の状況に、とりあえず言われるがままに背中をさする八雲。

二人の周りには紙コップがいくつか転がり、そこからはアルコールの匂いがプンプン漂ってくる。

あるうことか周りの雰囲気に乗せられ酒を飲み、動くのすら辛くなつた出場選手がここにいるのだ。

「でもっ、そのっ、時間が……！」

珍しく大きな声で、本当に焦ったように言葉を矢接ぎに紡いでいく。

ワタワタと必死に手を振り、事の重大さを示そうとする八雲であるが、聞こえていないのかリューマはほとんど無反応である。

時折うえつ、と口を押さえるのが唯一見られる彼の仕草。

それ以外はどよんと、黒いオーラを背負い、出来るだけ頭を動かさないようにしている。

「え」と、どうやら第三試合出場予定のリューマ選手ですが、まだ試合会場に到着していないらしく……」

いたたまれない様子シュリの声が魔法スピーカを通りコロシアムに流れ出していく。

それを聞いたリューマは傍らに八雲を抱え、よろよと歩みを進める。

「ばッ、言えよコノヤロー」

「すつ、すいません……」

今日抱えられてばかりだ、とまあ場違いな事を考える八雲は、ゆらゆら揺れながら観客席の前へ前へと近付いて行く。

そして一番前、少しだけ石垣が高く積まれ、観客席と闘技場を隔てるそれによじ登り、引きずり落とされた。

「何やっているんだ君たちは!!」

青筋立てた守衛らしき人物が、苛立たしげな顔でそこに立っているではないか。

クドクドと口を酸っぱくし、上から押さえつけるように説教をする

のはこの道十年近いベテラン。
闘神大会のすべてをここで見つめ、その試合を護つて来た勇者である。

「おっさん」

「誰がおっさんだ誰が！これだから最近の若いもんは……」

「踏み台役ありがとな」

「何をいゝぶるっ！！」

肩に手をかけ、よじよじと足をかけたりリューマは抱えた八雲ごと一気に飛び上がった。

宙を舞う二人はその隔たりを越えて、闘技場の領空内に入り込み。

「せつ、背中がアアアア！！」

おもつくそ背中から叩きつけられた。
そして思わず離れた八雲がリューマの腹めがけて落ちてくる。

「うつ……うつええええええええつ」

当然そうなれば只でさえ最悪だった気分はさらに悪くなり、胃の中での拒絶反応が激しくなり。
結果として大量のゲロを神聖な闘技場に撒き散らすこととなった。

「え……えゝと……龍のコーナーから現れましたのはJapanか

らやって来た侍、リユーマ選手!!」

とりあえずどうすればよいかわからなかった進行役のシュリは考えることをやめた。

始めれば何とかなるんじゃない、という祈るような思いに任せて。

係員がいまだ蹲る青い顔のリユーマから八雲をつれ去っていく。

「リユーマさん!!」

本当に今日は珍しい日、八雲が何度も叫ぶとは。

この四日、声を荒げることも、大きな声を出すことも無かった彼女がリユーマに呼び掛ける。

「まあ昼寝でもしてろ……つぶっえ」

もう一度腹の中身をリバーすする彼に不安しか持てない八雲は異常なわけではないはずだ。

控室へと八雲が運ばれたのを見計らって、司会のシュリはもう一度声を出す。

「鬼のコーナーから姿を現したのは青銅の巨人、経歴不明のゲラーミン選手だ!!」

そして現れた対戦相手。

高身長なはずのリユーマより更に大きく、横幅も広い巨漢。

のっそりと、ゆっくりと、闘技場を揺らしながら彼は現れた。

伝わる振動に気分を悪くしたリユーマは、さらにもう一度胃の中身

を吐きだした。

朝食と、昼に食べたおにぎり弁当をすっかり吐き捨てた彼。

膝を付くも日本刀を支えに何とか立ち上がるリ्यूマと、それを見下すようなゲラーミン。

対峙する二人に観衆のボルテージは高まる。

だがそれは、前に試合とは違った高まり方だ。

「死に晒せゲロ侍！！」

「ゲラーミンっ、そいつをぶっ殺せ！！」

「パニィちゃんの仇討だ！！」

恐らく昨日の出来事が広まり、広がり、リ्यूマは怨敵という位置付けになっているようだ。

それはそうだ。

嫌われ者のクランクに肩入れし、人気者のパニィであるパニィを犯したとなればそんな認識を投げかけられるのも無理は無い。

「だーってる喪男どもがッ！！」

どーでい、俺はテメエらのおかずとマジにやっちまったぜエ！！」

だがしかし、そんなもの齒牙にもかけない。

胃の中身をすっかり吐きだし、空腹はあるが気分の悪さは無くなったリ्यूマは悪人染みた笑みを張り付け、中指立てて観衆を挑発する。

「死ね！死ね！死ね死ね死ねっ！！」

「誰かあの黄色い豚をやっつける！！」

「我慢ならねエ！！」

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤッ、嫉妬乙」

暴徒のように前面に集った人々は口を荒げ、手当たりしだいにモノを投げ込んでいく。

それをヒラヒラとかわし、鼻の穴に指を突っ込む。

ホジホジと、デカイハナクソを取り出したリユーマはピンとそれを弾き。

「ハッ！」

そう鼻で笑った。

観衆の怒りはさらに立ち上り、天を突こうかというほどの勢いを見せる。

場内騒然となり、壁に手をかけ闘技場に乗り込もうとする人々。

「皆さんっ、落ち着いてください！！」

シュリの叫びも、守衛の頑張りも、観衆には届かない。

そして今、観客の一人が闘技場に乗り込もうとした正にその時、その男の前に一人の侍が降り立った。

「やめなさい、闘いを汚すことはこの宝光が許しません」

純白の侍装束に身を包んだ黒髪の女性。

自分の試合以外、外に出ようともしなかった一人の選手がそこには居た。

観衆は予想外の出来事の言葉を失う。

先ほどの喧騒が嘘のように静まり返ったコロシウムに、彼女の声が響いた。

「あなた方がそのような事をせずとも、あの男はここで負け、そしてそのパートナーの少女は汚される……そうではありませんか？」

なれば見届けましょう、事の顛末を。

あなた方の思いが強ければ、アレには敗残の将となる以外の運命は残されていないのですから」

今日の第一試合の勝者、レメディアと同じくらいに注目されている彼女の言葉は観衆に伝わり吸い込まれていく。

『強者こそが法』、闘神都市に存在する絶対のルール。

観衆をかき分け、観客席に腰を下ろした彼女。

ゲラミンを、そしてリユーマを見つめる宝光にそれ以上ものを言える者はいなかった。

コロシアムの熱気は治まりきっていない。

リユーマへの黒い感情も、まだまだ辺りを漂っている。

「ではこれより大会三日目、第三試合を開始します！」

だが試合は始まった。

多くの観衆はリユーマの敗北を望んでいる。

「……リユーマさん……」

只一人、控室で待つ少女以外は。

最初に動いたのはゲラーミン、彼が両手を顔の近くに持っていた瞬間、ズビィムッ！という轟音が響き渡る。

彼の瞳が光ったかと思えば、体色と同じ青銅色の光がリユーマ目掛けて突き刺さった。

それは闘技場に敷き詰められた砂粒を遥か高くまで舞い上がらせ、リユーマの居たはずの地面にクレータを作り上げた。

「ビームっ、ビームです！ゲラーミン選手眼からビームを放ちました！！」

砂埃が辺りを埋め尽くし、リユーマの姿を消す。

誰しもが終わった、ヤツは死んだ、そう思った時。

「……ハア、腹が減ったねエ」

傲慢不遜なリユー・マの声が聞こえた。

音源はゲラーミンの真正面。

対象を確認した彼は巨木のような腕をリユー・マ目掛けて振り下ろした。

しかしそれは空を切る。

いや、その表現は正しくない。

振り下ろされるはずの腕は途中でその行動をやめたのだから。
受け止められた訳ではなく、彼の巨体を軽く浮かせるほどの、腹に
めり込んだリユー・マの拳によって。

「ゴフウアツ!？」

痛みと、理解不能な衝撃によって頭の回らなくなったゲラーミン。
緩やかに崩れ落ち駆ける彼の頭に合わせて放たれた踵落としては、彼
の米神を正確に捉え、ゲラーミンの意識をさらに遠くに連れ去る。
ダメ押しに叩きつけた地面により、彼の動きを完全に停止させ、す
べてを終わらせた。

ビクビク身体を震わせる彼の横を悠然と通り去るリユー・マ。

「俺の勝ち」

捨て去ったその台詞により、コロシウムは再び轟音で埋め尽くされ
た。

十一戦目（後書き）

結構なところを端折っちゃいました

十二戦目（前書き）

少しずつランスシリーズとクロス

十二戦目

リユーマの試合が終わり、一時間かそこら経った頃、羽純はカテナイ亭の部屋でぼんやりとナクトの帰りを待っていた。

「……………ふう……………」

窓辺に置いた椅子に腰かけ、日が暮れた街を見るともなしに見ながら溜め息をつく。

「…………ナクト、まだかな……………遅い……………なあ……………」

さつきまで、夕日に照らされていた部屋には熱っぽさがあつたが、それが急速に落ちていきつつある。

窓の外からかすかに聞こえる不夜城のような喧騒が、羽純の思考を麻痺させ、どこかふわふわと夢の中のような気分にさせていった。

「シュリさんは、『ナクトさんは今日はお楽しみかもしれませんよ』って言ってたし……………お楽しみって!？」

そこまで考えたあたりで、羽純は下の階で鳴る大きな音を耳にした。

「ちょっと、部屋まで上げるの！」

ダメダメダメっ、壊れちゃったら直すのにどんだけかかると思ってるのよ!？」

懇願するようなマルデの声に何事かっ!と階段を駆け降りる。

カテナイ亭の一階、その入口付近には同宿で、同じように闘神大会に出場したリユーマの姿がある。

聞けば圧勝だったらしく、試合前まで散々彼を非難していた観衆すら魅了し、結果として大盛り上がりで終わったようだ。

たどり着き、その場を取り巻く野次馬と化した他のお客の姿を見たとき、羽純はマルデの叫んだ原因を理解した。

そこにはリユーマと八雲以外に対戦相手であったゲラーミンと、そのパートナーであると思われる白衣の少女が居たからだ。

宿へとどこことなく重い足取りで帰っている途中の八雲を捕まえてリユーマはカテナイ亭へと歩みを進めた。

勿論、その時後ろに先ほど対戦したはずのゲラーミンが居ることに彼女はすっかり驚いていたが。

敗者のパートナーは悪趣味な、ピンクだらけのベッドルームに案内されるが勝者のパートナーはすぐに帰らされる。

居残る必要も無く、居てもする事も無いからだ。

まあ偶にはレイチエルのように、とりあえずボーダーがコロシラムを出るまでその場に留まる人もいるのだが、それは少々特異な例だ。

ポカーンと口を開けていたのを思いっきり笑われ、小さくなってしまったのを思い出す八雲の頬はまだ赤い。

ちなみにリユーマの案内された、白衣の少女の居た隣の部屋は絶賛使用中であった。

「スコスコスコスコ、まあ初めてならンなもんだろ」

「えとつ、何g」そこは聞かなくていいな」……ハイ」

ゲヘゲへ親父臭く笑うリユーマに八雲と羽純ははて？と首を傾げる。

闘神大会の勝利者は敗者のパートナーに二十四時間、基本何をしてモイイことになっている。

大体がえつちな事、そのための美人パートナーだ。

美人なパートナーが負けたら勝った相手に犯される、直接体験できる訳でも見学できる訳でもないが、それがまた観衆の興味と興奮をそそのめるのだ。

だがリユーマはそれをしなかった。

まあ仕方ないというべきかもしれないが。

ゲラーミンのパートナーである『ステラ・コイル』、彼女は確かに美しく可愛らしい。

透けるような白髪に血のように真っ赤な瞳。

ぷにぷにもちもちとやわらかな肌も非常に魅力的だ。

只一つ、彼女が『ようゝよ』だと言う事実を除けば。

だぶつく白衣の袖をいじりながら、八雲の膝の上にちょこん、と腰を下ろしている彼女。

きよろきよろビクビクと小動物のように視線をチラつかせていくステラは非常に可愛らしく、保護欲をかきたてる。

余程特殊な趣味の紳士で無い限り、ステラに手は出せないだろう。

「可愛いいいいつ、何この子何この子!!」

ちようだいつ、いくらなら売ってくれる!!」

「……あの……その……ステラ売られちゃう……ですか……?」

「マルデさんっ、怖がつてるじゃないですか!!」

「……羽純ちゃん、そんなに怒んなくても……」

「い・い・え! そんな風にステラちゃんのこと言う人はどこかに行ってください!!」

「そんなあゝ、私もステラちゃんと遊びたいのに」

あゝ、と崩れ落ちていくマルデとは対照的に、ステラに頬擦りする羽純は満足げだ。

ステラはステラで、今まで体験したことのないような状況に顔を真っ赤に染めている。

だがどこことなく、心地良さそうなのは気のせいではないだろう。

「うゆっ……八雲おねーちゃん……」

「えっ、八雲いつの間にそんな風に呼ばれるようになったの!？」

「はっ、羽純……近いよ。」

さっきほんの少しだけ、長く一緒にいるから……多分それでだと思っ

「イイなイイな……あのね、ステラちゃん。」

私のこと……羽純おねーちゃん……って呼んでみない？」

につこりとやわらかく微笑む羽純に、小首を少しかしげてみせる。それだけで抱きしめたくくなるような可愛さであるが、彼女はグッと自制し微笑みを保つ。

だがぴくぴくと、羽純の頬が震えているのは見ないふりをしてあげるのが大人というものだ。

「……羽純……おねーちゃん」

「リユーマさんっ、いくらなら売ってくれますか!!」

「うるせエ、そろそろ黙ってろ。」

ステラ、お前はこっち来い」

「あい」

身を乗り出す羽純をギンツ!と目線一つで黙らせ、ステラを隣に座らせる。

そして先ほどの事の顛末を、顔色一つ変えずに見ているゲラーミンの腕をパアアンと叩き、リユーマはステラに向き直った。

「コイツは人間じゃねエな」

「えっ、それってどう」黙ってるって言ったのがわかんねエのかデメエは、あ?」……うっ、わかりました」

「聞きてエことがあんなら俺の聞いた後にしろ。」

言つとくがテメエは部外者以外の何物でもねエんだからな、おわかり？」

リユーマの言葉に口を噤む。

確かに自分はリユーマとはただ顔見知りなだけであつて、酷く彼に自分が関係している訳ではない。

第一自分のパートナーは今頃……。

「……ッ!」

ブンブンと沸き上がる思考を頭を振り吹き飛ばす。

しかしどうも、恐らくまぐわいを行っているであろう人物が自分の知り合い同士であるという事実。

それは生々しい情景を、意識していなくても羽純の頭に沸きあがらせていく。

「不機嫌そうな顔してるんならどっか行つてろ、邪魔だぜイ」

「いえ……ここにいます、部屋で一人で居たらなんか変な感じになつちやいそうなんで」

泣きそうな顔を必死にこらえて、羽純は微笑む。

ナクトが帰つて来た時、自分がこんな顔をしていちゃいけないって思ふから。

いつもと同じように、いつもと同じように、いつもと同じように。

頑張つて闘つて来たナクトに、酷い事なんて、責めるようなことな

んで、決して言わないように。

興味も無さそうに羽純を一瞥し、ステラの瞳をじっと見つめるリユーマ。

「テメエ、ステラ……魔鉄匠だな」

その問いかけに、彼女はコクリと首を縦に振ってみせた。

「じゃあ聖魔教団のもんか……？」

「ダメですっ！」

「退いてろクソガキ、煩わしい」

リユーマとステラの間に入った八雲を押し退け、再び抜き去った日本刀を彼女の小さな顔へと近付ける。

「正直に言え、嘘だと思ったら切る。

も一度聞くぜイ、お前は『上』から来たのか？」

「ちが……う……ステラ……ステラっ、捨てられてたのをイジった……だけ」

ウルウルと瞳に涙を溜めて小さな手をギュツと握る。
刺すような視線が、絶えず俯く彼女に降りかかるが、その追求を緩

める様子はリユーマに見受けられない。

八雲も、羽純も、マルデも、トコトンも、野次馬のように彼らを囲む他の宿泊客も、誰一人として口を開けない。

勝者は敗者のパートナーに基本何をしても良い事になっている。

しかし例外的に、『殺傷する』という行為は認められていないのだ。何故か？と聞かれれば、恐らく免除金が払えないパートナーが行うこととなっている『闘神都市での三年間の無償労働』という条件の為だろう。

死んでしまった相手をそれにかり出すことは出来ない。

闘神大会の実行にはもちろんのことではあるが大量のお金がかかる。

『街の名物』となつていても、そこに経営利潤を求めていると言えば嘘になる。

さらに毎年一人生まれる闘神のためにも多くのお金がかかる。

と考えれば、給金ゼロの働き手というモノは非常に魅力的なのだ。

ルールのにも違反なわけだし、そんなこと行う相手はまずいない。

まずいないのだが、目の前のリユーマにそれが通用するかと言えば甚だ疑問である。

クランクの公開レイプを煽り、さらにその被害者に追い打ちをかける。

ゲロを公道に吐き捨て、自分の試合会場ですらそんな情けない姿で現れる。

予想の斜め上をダメな方向でブツ千切る彼だからこそ、そのルール

を犯さないとは限らない。
故に彼らは動けないのだ。

「そか、じゃあ話してくれや。」

コイツとどうやって出会ったかってところをな」

「……あい」

乱暴に頭を撫でるリユーマに溜めていた涙をこぼす。

穏やかになったその空気に周囲の人間も、安堵の表情を浮かべる。
にへへ、と笑顔を作って見せたステラはゆっくりと、まだ舌足らず
などころの残る口調で話し始めた。

そもそも『魔鉄匠』とは聖魔教団にいる、『闘将』製作技能を持つ
た技術者のことである。

そして闘将とは絶対服従の魔法で魔法使いたちに忠実な、疲れるこ
とを知らない鋼の戦士のことである。

その製作には生前の肉体の中で骨格と金属化された脳と左目だけを
残し、元の体型を再現するように魔法で筋肉の役割を果たす包帯を
全身に幾重にも巻き付けていく。

それを腐食、腐敗させないように魔法コーティングさせていくのだ
が、性能は素材となった人物の生前の能力が大きく影響するのだ。

いわば生前の人格、知識、戦闘技術をそのまま引き継ぎながら大幅
に強化された鋼鉄のミイラとも言つべき存在こそが闘将である。
全身無駄なく筋肉の塊になる為に生前を遥かに上回るパワーが与え

られ、通常の数倍の厚みはあろう頑強な鎧を着せられる事で無敵の肉体を得ることとなるのだ。

ちなみにゲラーミンは闘将では無く、その製作の基盤となった『鉄兵』である。

GI360年、バルシン王国を僅か二十四体の鉄兵で蹂躪した『鉄兵戦争』はあまりにも有名だ。

その戦争からすでに百年近く経っているが、闘将の登場により性能を抑えることが出来るようになり、その代わりに量産可能となった鉄兵はまだ現役。

今日も元気に『聖魔戦争』の最前線で戦っているだろう。

ステラはその鉄兵である、当時完全に壊れていたゲラーミンを拾い、今では人と変わらぬ姿までに造り上げたのだ。
彼女は自分を魔鉄匠といっているが、その冠には『自称』がくっ付くということ。

「……天才？」

「……へう……疲れちゃった……です」

ちいちゃな手でコップを持ち上げる彼女の姿からは想像もつかない。

そもそも基本的に鉄兵も、闘将も、その製造方法は秘匿されている。
『死んだ人間が材料』ということはわかるが、だがわかるのはそこまで。

修理なんてこと、まったくその様相を知らない人物が出来る筈もないのだ。

「来た理由は、じゃあ『上』に上がるためってことか」

「あい、優勝すれば……目に留まると思ったです」

『上』とは宙に浮く闘神都市のこと。

そこに行つて本場の技術を仕入れてみたい、というのが恐らく彼女の望みなのだろう。

現在魔人相手に人類率いて戦争中の聖魔教団。

特別処置の施されているこの街や、その領域内にあるナクトの村などは実際に戦争を行っている、という実感はあまり見てとれない。

だが一步、そこを出れば完全戦争ムード。

武器の持てる男たちは前線に駆り出され、女たちは救護や炊き出しで大忙し。

毎日のように人が死に、魔物が死に、闘将や鉄兵が出張り、魔人が暴力を振るう。

そんな世界がそこにはあるのだ。

「でも……戦争も長引いてるみたいだし、ステラちゃんくらいの技術があれば『ゲート』まで行ったら上がれるんじゃないのかな？」

「へう、そうなんですか？」

「いちいち反応が可愛すぎるよ」

今度は飛びかかるのを自制して、隣にいる八雲に抱きついた羽純。

飛びかかられた八雲は眼を白黒させながら、先ほどのステラに負けじと顔を真っ赤にしてみせた。

頭をふらふらせながら小さな口をめいっぱいにあけたステラ。

「寝みイのか？」

「……あい……」

「ンじゃ今日はまあこんなもんでいいさ。」

八雲、俺は出てくるから適当に寝かせとけ」

「あ……ハイ、わかりました」

そう言うつと羽純を引きはがし、ステラの手を引き部屋へと向かう。ついでに私も、と着いて来た羽純とともに。どうやら今日は三人で寝るようだ。

解散するような雰囲気、野次馬たちも各々の部屋へと帰還する。

扉を開け、外に出たリユーマ。

夜は広がり、辺りは真っ暗闇に覆われている。

「ここは……大丈夫だといんだけどねエ」

いつもの不遜な態度と違い、リユーマの吐きだした祈るような言葉を聞いた人間はどこにもいなかった。

十二戦目（後書き）

違和感がぬぐえない

十三戦目（前書き）

o p、めちゃくちゃカッコイイ

いつになったら流れるんでしょうね？

十三戦目

その日、ナクト・ラグナードは非常に気分が良かった。

昨日行われた第一試合で見事勝利し、ドギの魔の手から闘神都市での無償労働、という形ではあるがマニを救いだしたのだから。

朝方カテナイ亭に帰還し羽純と連れだつてコロシウムへGO。

必死に集めたいかなごが売られていたり、次の試合が助けてもらったこともある忍者とかいうちょっと悲しかったり、不幸だなあと思う事はある。

だがそれ以上に、彼の気分は浮足立っていた。

マニを救えた事もそうだが、試合後に行われたマニとのセクロス。これは彼の心を非常に優位に立たせていた。

どのようなものでもそうであるが、これまで出来なかった事が出来た。

その事実は人を大きく成長させる。

出来るために努力をしたからか、出来た事によって心境が変わったからか。

今回はその後者であるが、ナクトは少しだけ、心に余裕が持てるようになったのだ。

だからカテナイ亭にゲラーミンが居た事だつて許容出来た。

リユーマが勝ったつてことに納得がいかなかったが、どうにか納得した。

そして次の試合に向けて、忍者打倒という目標も生まれた。

「シュリさん、男の子はいろんなこと経験した方がイイって言うけど、確かにそうかも」

『男児三日会わずれば刮目して見よ』という格言もある。

今回は一晩であるが、昨日よりも少しだけ、ナクトの剣筋は鋭くなっていた。

ナクトの潜る『パチル』という迷宮。

そこに現れる『まる』、『うつぴー』、『金魚』、『ブルーハニー』とこれまでと比べればかなりまともなモンスター相手に、危なげながらも勝ちを拾う。

「俺ってかなり強くなってるのかもな……」

少々図に乗った発言も見えてくる。

仕方ないといえば仕方ないのかもしれないが、そんなところから出来た隙によりナクトは懐の財布を奪われてしまった。

「あ……あああああああつ!？」

見れば壁に無数に空いた小さな穴、そこから飛び出したブタカウリボウ。

そんな外見をした生き物『パチル』がナクトの財布をくわえているではないか。

このパチルという迷宮に存在するモンスターは冒険者の財布を盗んでいくということでは有名である。

彼らが食料としてGOLDを必要としているからか、それとも巢作

りか、他の目的の為か。

その辺りの生態はまだ明らかにされていないが、冒険者たちにとっては非常に鬱陶しい存在であることは間違いない。

ナクトが追いかけてようとした時、すでにパチルは穴の奥底へと入り込んでしまっていた。

ガシガシと穴を掘ったり、手を突っ込んでみたりするが無駄な徒労。逆に指先に噛みつかれてしまったという散々な結果だった。

「はあ、羽純になんて言えばイイんだろ……」

ずーんと肩を落として迷宮散策を続けるナクト。

先ほどまでの軽い足取りもどこへやら、彼は羽純に『付与』をしてもらった剣を担いで歩みを進めていく。

ここで少し『付与』について述べてみよう。

付与とはこの世界に存在する特殊な効果を持つアイテム、たとえば力を強くしたり、たとえば耐久力を高めたり、たとえば自身を身軽にしたり。

そのように身に付けると特殊な効果を生み出すアイテムの効能を剣や盾へと付加させる技術のことである。

この技術を『付与魔法』と呼び、それを扱うことのできる人間は『付与師』と呼ばれる。

これによりかさばる装飾品を複数身に付ける必要が無くなり、尚且つその特殊な効果を持ち主に宿すことが出来るという利便性の高い技術なのだ。

羽純はその付与師見習いであり、彼女によりナクトの持つ剣にはさ

まざまな特殊な効果が付与されている。

それにより本来以上の実力を彼は発揮できるようになっているのだ。

さらに言えば付与というモノはどのような装備品に対しても平等に行える訳ではない。

各々の装備品に於いて、『スロット』と呼ばれる付与可能な領域というモノが存在する。

そしてその空きスロットのみに付与師は付与を行えるのだ。

ちなみに付与師になるための最低条件はこの空きスロットを見つけれるかどうか、というところである。

また付与するアイテムによっても利用するスロットの大きさが異なってくる。

例えば力を高めてくれるアイテムには『ねこる金貨』に『ドラ猫の鈴』、『純金ベアー』が存在する。

しかし系統的には同じであるがどれもが同じ効果だけ力を伸ばしてくれるわけではない。

『ねこる金貨』よりも『ドラ猫の鈴』、さらにそれよりも『純金ベアー』とアイテムにより効果の振れ幅が異なるのだ。

そしてそれに比例して付与するために必要なスロットの数も高まっていく。

効果の高いものほど場所を取るということである。

「レメディアに貰った剣も大分扱えるようになってきたし……そう言えば準決勝で当たるんだよな」

鞘に納めた剣をチラリ、ナクトは歩みを進める。

そうなればレメディアとも、と淫らになりかけた頭の中も目の前の光景によって吹き飛ばされる。

「オラオラオラ、金出せやコラ」

「ぴぐーっ！！」

「200ちよつとか……しけてンなア」

「何やってんだよっ！」

「うは、またお前かよwww」

目の前には溜め息をつき首を振るリユーマ。

走り寄ってみると足元には怯えたような顔のパチルが一匹、ナクトを目にすると走り出し穴の奥へと消えていった。

「何やってるんだってパチル脅して金奪ってんだけど。」

「やっぱ結構集まるもんだねエ」

冒険者から金を奪うパチルから金を奪うリユーマ。

少し膨らんだ、ボロボロの巾着袋を目の前にかざしてみると穴からパチルが飛び出した。

躍りかかってくるパチルに拳を叩きつけ、目を回した身体をまさぐってみる。

「お、こいつは300くらい持ってたな。」

ケケケ、マジでイイ金稼ぎ」

「お前っ、自分のやってることがイイことだと思ってるのか!？」

「別にイ、ンなことデメエに言われる筋合いなんてねエし」

ナクトの目から見ればどうも外道な行為。

カツと頭に血がのぼった彼はシャランと剣を抜き、リユーマへと付きつけた。

「おゝおゝ怖い怖い」

「前から思ってたけど……お前のやることは間違ってる！」

それで八雲さんに迷惑がかかってるってどうしてわかんないんだ
!?!」

「迷惑……とな？」

まったく意味がわからんのは俺だけでしょうか……ってマジにな
んなよ」

剣を握る手に力がこもる。

そこで私闘禁止というルールが頭に浮かび、目付き鋭いままりユー
マを睨みつけた。

「八雲さんはお前に攫われて、お前が無茶苦茶なことばかりして
……どれだけツライ思いしたか……。

それぐらい考えたらわかるだろ!?!」

じっと見つめるナクトにリユーマはフム、と考え、そして一つの結論に至った。

目の前のナクトは昨日の試合で、大分すれば同じ状況にあったマニを救いだした。

そのことが恐らく彼に自信を植え付けたのだろう。

同時に余程感謝されたからか、ナクトはどこか『自分の正義が正しい』という認識も植え付けたのだろう。

そして自分と同宿にはマニと同じような境遇の女の子と、ドギと同じように間違っている男が居る。

だから彼女、八雲は自分が助けなければならない。
多分そんな青臭い正義感をナクトは持っているだ。

若い、リユーマはそう思う。

別段そんな正義感、彼に言わせれば何それ、食えんの？程度のものかもしれないが、持つこと自体は構わないと思う。

誰だって勇者や英雄には憧れるものだ。

誰だって感謝されたり人から褒められたりしたいものだ。

そして誰だっていい思いをしたいものだ。

だが一つ、自分に言えることがあるとするならば。

「で、それが俺に何か？」

「デメエッ！」

今度は飛びかかってきたナクトを軽く受け流し、リ्यूマは出口に向けて歩を進める。

「ンな下らないこと考えてる暇があんならテメエのパートナーのこ
と考えるよ」

「……羽純にまで何かしたのかっ……!？」

「さア、でもアレくらいなら俺もビンビンだわな」

ケケケとゲスじみて笑うリ्यूマの言葉に、ナクトの頭の中は真っ
白になった。

出来ることが出来るようになるということはいいことばかりではな
い。

反面犠牲にしたものも出てくることもあるのだ。

マニとの本番当初、ナクトは『羽純に悪いから』と行為そのものを
断ろうとしていた。

半ば無理やりパートナーとしたにもかかわらず、ただ大きな文句
一つ言わず自分の我儘を受け入れてくれた羽純。

そんな羽純を裏切るようなことはしたくないと思ったのだ。

だが目の前のマニに、同年代の、それもとびっきりの美少女の痴態
を見せられて、懇願するような瞳で見つめられて、ナクトは若い欲
望を抑えることが出来なかった。

昇っていた日が暮れて、辺りが暗くなり、再び日が昇って。
ナクトは何度も何度も、自分をマニへと叩きつけた。

帰って羽純を安心させる機会はいくらでもあった。
だがどうもぶら下げられた極上の餌に誘惑されてしまい、結局勝利報告をしたのは今日になってから。

ハッ和我に返ってカテナイ亭に向けて走り出し、朝部屋にいないことをマルデに問い詰めて。

そしてリユーマの部屋で出来ていた美少女、美少女、美少女のサンドイツにゴクリと生唾を飲み込んでしまつて。

それから羽純を起こして、勝ったと報告して、朝食を誘つてみるが八雲とステラに断られてへこんで、終わったらすぐにコロシムに連れ立って出かけた。

だが結局、ナクトはマニのことについて羽純に何か言っただろうか。

実はナクト、羽純相手に大した弁解も弁明もしていないのだ。

羽純からは何も特に言つてこなかったし、ナクトと羽純は恋人同士なわけではない。

それにレイチエルと話していたということもあつて、どうも許してくれてる、気にしていないとそんな考えを勝手に抱いていたのだ。

今はまあそんなこと問題ではない。

それよりもリユーマが羽純に何かしたのかもしれない、そんな考えで一步も動けなくなったナクトは、気が付けばおかえり盆栽の枝を一本折っていた。

かき消えていくナクトの姿にガシガシと頭をかく。

「ケケケ、これで堂々とガキンチョの財布懐に入れれるってもんだ

わ

手に持った、先ほどまではナクトのものだったそれをヒラヒラ。
リユーマはやはりリユーマだった。

所も時も変わって再び夜、リユーマの部屋には八雲と、そしてその膝の上にちょこんと座るステラが居た。

本来なら闘神都市での無償労働となっている訳だが、彼女はしっかりと免除金を用意していた。
もといその材料となる存在を。

八雲が試合観戦に行っている間、カテナイ亭の前では公開解体ショーが行われていた。

観衆の輪の中心に居るのはステラ。

工具片手に次々とグラミンを分解していく少女というのは中々に刺激的であった。

そしてその身体に使われていた良質な鉄や付与魔法がかかった武器などを道具屋の一つである『ココリコ』に売りさばいたのだ。

リユーマとの試合では使えなかったが、腹の中に隠されていた巨大な戦槌など、武装はさまざまに存在した。

使われていたらならば、また試合は違った結果となっていたかもしれない。

「……にへへ」

だが八雲になでられ満足そうなステラの顔を見れば、まあ良かったのだろう。

「……ステラ、良かったのホントに？」

「あい、ステラまだまだです……だから……造られてた物じゃなくて、ちゃんと自分で造んなきゃ……です」

「……そう」

猫のように目を細めるステラに八雲は自然と微笑みがこぼれる。

ステラは意外に研究者魂が技術屋魂か、それが強いらしく小さな胸をトンと張りながらにこにこ笑っている。

「それよかだ、虐殺したつてのは第三試合だっけか？」

話を変えるリユーマの問いかけに八雲は笑っていた顔を強張らせ、小さくコクと頷く。

大会四日目、昼過ぎた頃から始まったマダラガ・クリケットV・S・戦士力キタロスという組み合わせ。
これは一方的な試合展開となった。

マダラガの腕から生えたヌメヌメした触手。
それは一瞬で力キタロスの身体を引き裂き、内腑をそこら中に飛び散らせたのだ。

圧倒的で、残虐な試合運び。

昼食を吐きだしてしまったことを思い出し、見ていた試合を思い出
すとまた顔が青くなる。

「そいつは……おもしろそうだなッ！」

「……え……？」

「明日は多分そいつ、相手方のパートナーの凌辱ショーでもやって
っから見学に行くぞ」

そう言うところ、リユーマはとつと布団に身を押し込み、ぐがーと寝息
を立てながら寝てしまった。

うゆ……と目をこすり対照的にかわいらしい寝息を立てるステラ。

「……寝よう」

リユーマの言葉がいまいち理解出来なかった八雲はステラとともに
三人で川の字を作るように布団に入る。

並べられた二枚の敷布団の上、ステラを挟んだ向こう側にいるリユ
ーマの顔はいつものような八雲の事を考えない傲慢な態度で、その
顔に少しだけ八雲は悲しかった。

十三戦目（後書き）

今回もなんか変な感じですよ

十四戦目（前書き）

やっぱりR15でセーフかどうかわかんない

十四戦目

闘神大会五日目の午前中、リユーマと八雲は広場を訪れていた。ちなみにステラはカテナイ亭にてお留守番、机いっぱいに広げた図面と向かい合ってうんうん唸っている。

小高くなったその一角、二人は目の前の光景を見つめていた。

リユーマは楽しげに興味深そうに、八雲は視線を逸らし青い顔をしながら。

何かを取り囲むように出来た人の輪、その中心で行われている光景を。

「やっぱおもしろい身体だわな」

「……ううう……うえっ……」

ニヤニヤと口元を釣り上げるリユーマとは対照的に、八雲は口に手を当て拳をキュツと握り、必死に自分を保っている。

集まった人々の輪の中央には裸にされた少女と、モンスターのような触手を持つ男がいた。

薄く澄んだ緑髪の男の腕半ばから生えた触手は先へ行くほど枝分かれし、少女をがんにがらめになっている。

その力は相当なものらしく、男は立った姿勢のまま手も触れず、少女を空中に持ち上げているのだから。

公開レイプショー。

本来ならば少女の見られたくない場所は彼女の意志とは関係なしに、周囲の観客たちの目に完全に晒されている。

「……人間……なんですか？」

「ぶあか、どこからどう見たって真つ当な人間だろうが」

「でつ、……でも……」

瞼に涙をためた八雲は見上げるようにリユーマを見つめる。

そんな視線に気付いたのか、今度は吐き捨てるように彼は言い放った。

「何さ、ちよつと他人と違うからつてもうバケモノさんなわけ？」

「ちがつ……」

口に出しかけた言葉をぐつと飲み込む。

『違う、あの人は人間だ』、そう声に出そうとしても喉が、舌がその言葉を拒絶する。

黒く太い触手の先からは、黄色く細い触手が幾本も生え、少女の身体を這っていく。

自分には、一般的人間には決して存在しないそれを、それを持つ男を、八雲は自分と同類だと見ることは出来なかった。

「……テメエだって人と違うかも知れんくせに……バケモンかも知れんくせに、よーそんなことが言えるよな」

鋭く尖ったリユーマの言葉、それは八雲の胸に深々と突き刺さる。震える体を抱きしめて、切れ長の瞳をこれでもかといわんばかりに

見開いて、八雲はカチカチと歯を鳴らす。
途端蹲るように崩れ落ちた彼女は、リユーマに縋ろうと彼の袴に手をかける。

だがその伸ばした手を乱暴に振り払った彼は、八雲の首根っこを掴み上げ、その顎へと拳を叩き込んだ。

正確に八雲の顎の先端を捕えたそれは、脳を揺らし、彼女を典型的な脳震盪の状態へと陥らせる。

意識の飛び去り弛緩した八雲の身体を肩に担ぎ上げ、もう一度リユーマは目の前の光景を見つめだす。

「『ムシ使い』か……公式にやア初期の聖魔教団に全員消されてた事になってんだがねエ」

現在人類を統一している『聖魔教団』、これは元々魔法使いたちの地位向上のために組織された。

今では信じられないが、百年ほど前は剣を中心とした『力』こそが全ての時代。

この頃の魔法使い達は、どんなに強大な魔力を持っていても詐欺師と罵られ、ただ利用されるだけの存在だったのだ。

そんな状況に嫌気のさした聖魔教団の創始者である『M・M・ルーン』は、自分たち魔法使いを認めさせるために魔法使いを集めて戦争を吹っ掛け、今では人類統一国家の元首とまでなっている。

人類統一の際、自分たちを虐げていた戦士、彼らに言わせれば『蛮族』たちはその支配を良しとしなかった。

ついほんの数年前までは自分たちの下にいるのが当然だった者たち

が、今は自分たちの上にいる。

敗北し、屈服させられても学び体験し、確立した認識を改めることは容易では無かったのだ。

そこで魔法使いたちは考えた。

『ならば彼らよりもっと低い立場の者たちを見つけ出し、とりあえずその自尊心を満たさせよう』と。

その時白羽の矢を立てられてのが、当時森の奥深くのみに集落を作り、ひっそりと人目をはばかって暮らしていたムシ使いたちであった。

「全部ちゃんと駆逐してくれりゃあ良かったのにさ」

「いるんだな、生き残りも。」

どうやって参加者になったかなんて分かんないけど、そうじゃなかったら叩き殺してやりたいぜ」

「違うだろ、やっぱムシは焼かねえと」

ケラケラとした笑い声が目の前から聞こえる。

やはりムシ使いは嫌われているようで、敵意と嫌悪のみが彼に向けられていた。

彼らが魔法使いにとりたてて何かをしたわけではない。

ただ単純に、誰が見ても不快感を与えるものを持っている。

それだけの理由であらぬ濡れ衣をかぶせられたムシ使いたちは数を減らし、ついには絶滅したとまで言われていたのだ。

「んん……んう……うううっ……！」

少女は苦しげな表情を浮かべながら、疲れ切った体で懸命に奉仕をする。

どうやら男の息子は普通の人間のモノと変わらないようだ。それを一目、勝ったとガッツポーズを決めるリユーマ。

「足りねエな」

沈黙を保っていた男は自分の眼下にいる少女の頭を見つめながら口を開いた。

「使えねエ舌なら切り取ってやってもいいんだぜ。」

パートナーの殺傷は無理でも、明日自分から頼みに来させるってことは出来る訳だしなアツ!!」

ヒツと息を飲む少女に気分を良くしたのか、饒舌になった男は今度は凄惨な笑みを浮かべる。

「良く見りゃイイ舌だ。」

虫どもの餌にはちょうどいかもなア」

口に手を突っ込み、真っ赤な少女の舌を弄ぶ男。

更に笑みを深く、その手を離れた後も、恐怖にひきつる少女の口からはまともな言葉は出てこなかった。

「今日だけおしまいにして欲しいのか？」

「だったらお願いしてみろよ、人間様の言葉ですよ」

「イイね、やっぱおもしれーヤツだな」

「う……うぁ……やめて……やめてっ……下さい……舐めますから……ちゃんと」

「何をだよ、見えてんだろ周りが。」

野郎どもが期待していることを言えよ、このメスブタが」

男が肩を動かすと、少女を捕えていた触手が波打ち、更に少女を高くへと持ち上げる。

その衝撃に彼女の見られたくない部分が観衆の鼻先を掠め、欲望を身きだしに見ていた幾人かが称賛の声を上げる。

ケケケと悪い顔で晒うリユーマもまた、その口元をさらに釣り上げる。

そんな彼にうすら寒いものを感じ取った周りの人々は、リユーマから身体を少し外した。

恥辱に耐え切れなくなった少女は、きつく目をつぶり、男の要求に応じる。

淫らな言葉を口に出す少女に、男は触手を蠢かせ、彼女の身体を蹂躪していく。

「お願は人間様の言葉でしろって言っただろうが、メスブタがアツ！

どんな感じだった、正直にお前を見ている野郎どもの前で言ってみやがれッ……！」

そして再び少女が言葉を紡ぎ、ニヤリと口元を歪めて触手を束ねた男の耳に、トサリと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。

リユーマも視線を移してみると、何故かいるナクトの後方で、青ざめへたり込む羽純の姿が目飛び込んできた。

「ああア、女か？」

「あ……あ……あ……」

「羽純っ！」

どうやら少女の凌辱を目の当たりにして、腰を抜かしらしい。

「だっ、大丈夫か羽純！？」

問いかけるナクトの言葉に返答はなく、震える手で駆け寄った彼の手を握る。

「クックク……腰を抜かすほど羨ましかったか？」

「混ぜりたいなら、混ぜてやるぜエ」

少女の身体を釣り上げたまま、男はくいくいとからかうように羽純を手招きする。

ナクトは羽純を背後に庇い、とっさに剣に手をかけた。

「ざっけんな！」

羽純に手出しして見やがれ、その触手ブツた切ってやるっ！！」

「野郎に用はねエんだよなアア。」

死ぬか？あア死ぬかア？」

男はすぐに触手を伸ばしてはこなかったが、先端で指さすようにナクトを示し、自分の身体の横で隙無く蠢かしている。

狙いを定められているナクトもまた、決して柄から手を離そうとはしなかった。

「無論そっちの女もなア」

ギュリンと音でも付くように首をリユーマへと向ける男。

担がれた八雲の臀部から、段々と彼の顔へと視線を移し、リユーマの爪先から頭のとっぺんまで、虫の這うような眼差しが進んでいく。

「うん、それ無理」

「あアア、何様だデメエは！？」

飄々とはけるてみせるリユーマに突き刺さる男の視線。

そこに響く軽快なトランペットの音。

銀髪のヒーロー、忍者仮面が二人の近くへと降り立った。

「君たち、ルール上私闘は禁止されているのは知っているだろう？」

「へいよへいよ、じゃあ俺帰るわ」

踵を返すリユーマ。

まるで自分の事など眼中に無いかのごとき態度に、男はピクリと、

眉を吊り上げてみせた。

「逃げんのか……情けねエ男だなア」

「ちげーし、俺の目的地がアツチなだけだし、それに……だ」

顔だけ振り向いたリユーマはにひゃつと小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

ゆらゆら触手を漂わせる男に、事も無げに、躊躇いなく口を開いた。

「俺って、雑魚に用はねエからッ!」

「雑魚……雑魚、ザコ雑魚ザコ!

クツクツ……、じゃあ証明してくれよオオオオ!」

「やん、リユーマくんこわ〜い」

途端、少女に絡み付いていた触手はリユーマ目掛けて走った。重力に従い地面に叩きつけられた少女をよそに、触手は幾本もの槍の如く、リユーマの体を貫かんとする。

「H A H A H A、あくびが出ちまうぜイ」

集まった切っ先は雨のように彼の体を狙う。それをヒョイヒョイツと、リユーマは八雲を抱えたままよけていった。

「クツクツク、オモシレエヤツだ」

「あらま、ありがと。」

そっちの忍者さんも出てこなくったって止めるから、な！」

背負った忍者刀を抜き放ち、ギツと二人を見つめる忍者仮面にリユーマはおどけるように笑いかけた。

男も触手を自分の体へと納め、再び少女の体へと絡みつかせた。

「テメエ、リユーマつつたか。」

三回戦……いろいろと楽しみにしてるぜエ!？」

少女の陵辱を続けながら、凄惨な笑みを浮かべる男。

そんな男、『マダラガ・クリケット』にリユーマはやれやれと首を振る。

「ま、楽しみにしてるぜイ」

ポンとマダラガの肩を叩き、リユーマは口元を弧月に歪める。

一瞬でマダラガの背後に移動したその動きは観衆の顔色に驚愕を塗りたくり、同時に言いようのない、なんとも気持ちの悪い感覚を腹の底から呼び覚ました。

「アンタ……アンタ本当に何なんだよ……っ」

「何だっていいだろうが。」

俺は俺、俺である俺以外の何者でもねエンだよ」

むせ返りそうになる胸元を抑えたナクトに、にぱっといつものような

な軽薄な笑みを浮かべ、今度こそリユーマは歩いていった。

八雲をカテナイ亭へと連れ帰ったリユーマは『教会と貯水池』と呼ばれる迷宮を訪れていた。

そこにある教会の外、目の前の光景をぼんやりと見つめている。

「なあンでゾンビがこないにいるんでしょうねエ」

地面をガツツと蹴り上げて、腐った肉片を舞いあがらせる。

先ほどまでいなかった『動く死体』、それが何の因果か教会を出ようと扉を開けたリユーマの眼前を埋め尽くすように、その存在を主張しているのだ。

「リユーマさん、一体何が……ッ!」

「ケケケ、こりゃちと多いねエ。」

あゝああ、嫌になるぜイ」

彼を追うように外に飛び出した金髪のシスター、『ポロロム・グライコ』は少々不機嫌そうに額にしわを作る。

『AL教』のシスターとして、神の摂理に反する彼らを許すことが出来そうになかったからだ。

AL教とは女神アリスを信仰の対象としている、聖魔教団公認の宗教のことである。

正式名称はALICE教だが、通常はAL教と呼ばれており、教団の運営は現在では聖魔教団しか存在しないが、各国家から寄付金で成り立っている。

結婚、葬式、祭り事などはこの宗教の方式によってなされており、人々との密着具合も極めて高い。

また魔王が代替わりした時には、神から法王へ指令があり、そこから各国家元首、そして民衆へと伝達される仕組みとなっている、という世界中に教会を持つ宗教なのだ。

「せっかくさ、美人さんとも仲良くなれてさ、気分も良かったのにさ」

「そつ、そんな不潔ですよ！」

「初々しい反応っていいねエ」

「私の方がちょっとだけおねえさんなのに……」

頬をほんのりと朱に染めて、唇を尖らせる彼女はとてもかわいらしい。

近くにある墓地でマビル迷宮に潜り、命を落とした冒険者たちの弔いをしていたポロム。

そんな彼女を目ざとく見つけ、のんびりとお茶としゃれこんでいたのだが、そんな時間も終わりのようだ。

すらりと腰に差した白刃を抜き放ち、リ्यूマは無造作にそれを振る。

ゴトリと首を落とした目の前のゾンビであるが、まるでその事実
気付いていないかのように、のっそりと手を振り上げた。

「……だからゾンビ系統は嫌いなんだよなア、疲れるし」

迫る腐った爪を指、肘、肩ごと切り裂く。

尚もこちらに近付こうとするゾンビを今度は横薙ぎに切り払い、解
体されても動く肉片を踏みつけた。

「まアだからこそ、シスターがいて良かったわ」

蛆を出し、ズルリと飛び出た眼球と剥けきった唇のひつつく頭を持
ち上げたリユーマ。

迫り来る次のゾンビ目掛けて放り、それごと脳天から股下まで真っ
二つに寸断する。

臭気を放ち、飛び散る内腑に舌を出し、顔を歪めて見せる。

黒々しい血が着物に付着しないよう右隣のゾンビを柄頭で殴りつけ
た。

「うげ、避けた意味ねエ」

ズボリと柄を握った拳付近までゾンビの顔にめり込んでしまい溜め
息一つ。

諦めたようにスカスカの頸椎を掴んだ彼は、元は成人男性であろう
それを、易々と持ち上げ、彼らの中へと投げつけた。

その衝撃によるよろと姿勢を若干崩す前方のゾンビ。

間髪いれず叩き込んだ蹴りはその身体を後方に運び、やがて後ろの
幾体かを巻き込み倒れ込んだ。

「どいたどいた、邪魔だよ邪魔だよ」

グシャグシャと草履で倒れ込んだゾンビたちを踏みつけ、リユーマは前へ前へと進んでいく。

伸ばしてきた手は刃で斬り伏せ空いた拳で叩き伏せ、飛ばしてきた口から放つ毒液のようなものは身を屈めて目標点をずらさせる。

「この辺かねエ、なアッ！！」

大凡集まっていたゾンビたちの中心に辿り着くと、彼は周囲から近づくゾンビを順々に斬撃を与えていく。

着実に両肩口を分断し、確実に肢の付け根を両断してダルマを作り上げる。

本来囲まれるような位置に立つというのは愚の骨頂であるが、幸い相手は酷く緩慢な動きをするゾンビ。

自身の身体に触られる前に、しっかりと彼らを転がしていった。

「終わりつと。」

後はポロロムに浄化でもしてもらうか」

ふいふと息を付き、かしかし頭をかく。

すすんと着物に鼻を近付けてみれば、白だったそれはドス黒く染まり、臭いも極めてイヤンな感じ。

今だ地面でうめき声を上げるそれを見下ろし、リユーマは酔ってきた八工を鬱陶しげに払う。

軽く教会で洗わせてもらうか。

そう思いクルリと踵をかえしてみると、一か所に集まったゾンビと呻くような女性の声。

「……………新人さんなのかねエ。」

けど……………ゾンビの浄化とか実習とかでやんねエのかなア？」

深く肩を落としたリユーマは気だるそうに歩みを進めるのだった。

十四戦目（後書き）

シュリさんとポロロムさんは一目惚れ

十五戦目（前書き）

たぶんこれがR15でセーフならこれ以降全てセーフ……なはず

十五戦目

「いやっ……来ない……で……っ」

ゾンビたちはまるで、光に集まる蛾のようにポロロムを求めて来た。教会の外へと踏み出した当初、毅然とした態度でゾンビたちを睨みつけていた彼女。

しかし少し前で、ポロロムが今まで目にしたどの冒険者よりも手際よく、彼らを斬り伏せていくリユーマの姿を、彼女は視線を移してぼんやりと見つめていた。

純粹に驚愕と、そしてその強さに畏敬の念を抱いて。

しかし彼女が今立っているのは戦場。

戦闘中に、しかも敵が眼と鼻の先にいるというのにそちらを見ず、見当違いの方向を見つめるという行為はもちろん行うべきではない。単純にその人物が危険に侵される、だからしない。

そんなもの常識中の常識だ。

だが彼女はそれを侵した、だから必然のようにポロロムはゾンビ数体に囲まれ組伏せられてしまった。

「やつ、やめて……くう……」

先も述べたがやはりシスターであるポロロムにとって、ゾンビは忌むべき存在だ。

その忌むべき存在に、今自分は穢されようとしている。

そんな考えたくもない事実、彼女は必死に抗おうとした。

「くう……つう……」

だが女の身で、ゾンビに抗うなど出来る筈もない。
ゾンビとして蘇えることによって、彼らは生前よりも高い生命力と
膂力を得ることとなるのだから。

たやすく転がされ、彼女の身体に腐りきった肉が触れる。
冷たくヌルついた感覚に頬を引き攣らせる、そんな一瞬の間に彼女
のスカートはたやすく取り払われていた。

「いつ、いやっ――!」

下半身を下着一枚にされ、羞恥に身を震わせる彼女。
そんなポロロムに容赦をせず、ゾンビたちは残った下着を引き裂い
た。

「ひっ……!」

ビリリリ、と布を裂く音がしつかりと耳へと飛び込む。
小さく悲鳴を上げた彼女は、硬直したかのように身を固くした。

ゾンビたちの視線があらわになった下半身へと集中する。
ねっとり熱く、だが冷たい視線。

「っ……見ない……で」

恥ずかしさから逃れようと股を閉じようとする。
だがわらわらと伸びてくるゾンビたちの手によってそれも阻まれた。
それどころかさらに両股を広げられ、穢れを知らぬそこを大きく彼
らの目前へと差し出された。

「ああ……あつ……」

あまりの羞恥により泣き出しそうになるポロロム。

「うう、……あつ……て、天にまします我らが神よ……魂のないこの者たちに……んんあつ！」

ポロロムは祈りの言葉を捧げ、ゾンビたちを浄化しようとする。

『浄化』とは魔法の中でも『神聖魔法』と呼ばれるものに分類される魔法の一つである。

ゾンビや霊体系統の実体を持たない魔物相手に有効な魔法であり、彼らを只の一度の詠唱で消滅させることが出来るのだ。

一般的にゾンビや霊体系統の魔物は耐久力が極めて高く、厄介な敵だ。

だがこれさえあればその酷い手間暇を一発で解消できる。

それだけ聞けばかなり強力なものに聞こえるが、逆に実体を持つ相手にはほとんどといって良いほどダメージを与えることが出来ない。まさに彼らに対応するためにこそ特化した魔法なのだ。

ちなみに『神聖魔法』とは主にAL教神官が多く持つ魔法スキルのこと。

名前と違い別に神の力を使う訳では無いので、習得するのに特に聖職者である必要はなく、主として回復や援護などに重点を置かれた魔法である。

冒険者なら、そのスキルを持つ者は是非ともパーティーに加えておきたい存在である。

「安らぎを……あつ、与え……ひゃあつ!？」

だがそれも、彼女の身体を這うゾンビたちの手によって中断される。

「やつ、んんんっ……そこは……ああっ、あつ!！」

そのうち一体のゾンビが開かれたポロロムの股の間に身体を割り込ませた。

ひんやりとした固いものが彼女の股に触れる。

純潔を守るべきであるシスター。

その誓いを易々と打ち砕かんと、ゾンビのそれが自分の中に無理やり侵入してこようとしている事実には、ポロロムは恐怖した。

魂を持たず、動くだけの死体であるゾンビの顔に、一瞬喜悅の笑みが浮かぶ。

もはや抵抗しても無駄であるという無力感が彼女の力を奪い去っていく。

だがそれと同時に、今までの感情とは全く違ったものが彼女の中から湧き上がってきた。

「あつ……神よ……わたしっ、は……」

絶望的な状況、犯されるという恐らく確定しきった未来。

そして、脳裏をよぎるその未来の自分の姿。

それは無意識のうちにポロロムの身体を熱くする。

「そっ、んな……わたし……」

強く弄られていた乳房も、犯されそうになっていた股も、好きな男を迎え入れんとするがためのように自分の中の女を呼び覚ましていく。

「はぁ……あぁっ……どうして……うぁぁぁっ!？」

私は……神に仕える……んんっ!」

段々と、彼女の声に恐怖から甘さが混じっていく。
心なしか股の間のゾンビの顔も、楽しそうに歪んで見えた。

「お許してください……神よ……あぁっ!」

じんわりと、触れられている乳房から伝わる肉の疼きがポロロムの心を蝕んでいく。

彼女は背徳に目覚めつつある自分を嫌悪した。
だが神に仕えるため禁欲生活に付け込んでいた自分の身体は、貪欲に肉の悦びを欲し、求め、心を裏切っていく。

「いやっ……汚らわしいものが……私の身体に……」

ゾンビがゆつくりと、彼女に覆いかぶさり侵入しようとする。

だがもう彼女は抗おうとせず、寧ろ喜々として迎え入れんばかりの心根を、拒絶の言葉とは裏腹に滲みださせていく。

その先端が埋まるか埋まらないかという刹那、それはピンと宙を舞い、彼女の眼前に落ちた。

周囲で、自分の身体を一片たりとも動かさんとするゾンビたちの力

も急速に失われていく。

崩れ落ち、地面に倒れ伏す自分の身体。

それは力強く、されどゾンビたちには無かった生身のあたたかさによつてすくい上げられた。

「ケケケ、これで喰わなかったら男じゃねエだろ」

「……へっ、あつ……リユーマさん……!？」

眼を白黒とさせるポロロムは散漫していた意識を急速に手繰り寄せ、サアツと血の気の引くように顔を青ざめさせた。

「違いますっ、私ハふむっ！」

何とか弁解の言葉を紡ごうとしたそれはリユーマの唇によつて乱暴に塞がれた。

「イイよねイイよねイイよねエ。」

だつて俺さ結局こつち来て……ゲヘヘッ」

呆けたように自由になった手で唇をなぞるポロロム。
熱く、あたたかい、焼けるような感覚。

「私は……神に……仕える……」

「やめて俺に仕えろ。」

返事なんて聞かねエけどなッ!!」

最後の最後、防波堤としていたその誓いは紙きれのように吹き飛んだ。

ポロロムを抱えたリユーマは教会に飛び込み、ガチャリと重厚な力ギをかける。

その後教会からは、甘く愛しく主人を求める声が数時間にわたって響き続けた。

カテナイ亭のリユーマの部屋。

灯りも燈さず窓を閉め切った薄暗い部屋の中、八雲は布団にくるまりカタカタ震えていた。

「八雲……おねーちゃん……？」

「大丈夫……ですか？つらそう……です」

「うん……私は大丈夫だから」

覗き込んでくるステラに八雲は精一杯の笑顔を作ってみる。だが精神的に疲れきった彼女の笑みは、ステラの不安を煽るばかりだった。

彼女は本心から自分を心配してくれている。

そうわかって、そう感じて、そう視えて。
でもそれがつらくて、それが苦しくて、それで疲れて。

今朝のリューマの言葉が八雲の中にふつふつとよみがえってくる。

自分もバケモノかもしれない。

いや、『かも』なんて生易しい言葉では片づけられたらどれだけ良かっただろうか。

眼を合わせた人の心が見える八雲のどこが、自分をバケモノではないと否定するだろうか。

八雲がこの力に気付いたのは兄が旅に出る一年ほど前。

最初に見えたのは自分に対する好意、昔から彼女を好きだと言いつけていたとある少年の心だった。

むせ返るほどに強烈な心の奔流。

想いは文字となり、八雲に尻もちをつかせ、泣きださせるほどの威力を誇っていた。

当時彼女はそれが彼の心だとは思っていなかった。

「好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ」

だが男の子の姿を見るたびに彼の背後を埋め尽くさんばかりの文字が彼女の視界を覆っている。

今までありえなかった光景に、彼女はその男の子を酷く恐怖した。

引っ込み思案だった八雲はこの出来事から兄の背中に隠れることが、いつもにも増して多くなった。

外に出ればどこからともなく現れていた男の子。

見える前までは、気後れしながらも少しだけ、言葉を交わすことの出来る数少ない相手だったのだが……。

それも遙か昔、二度と八雲はその男の子と面と向かって言葉なんてかわせなくなってしまうた。

兄が誰かに乱暴を振るう様にもなったのもこの頃からだったかな。思い返せば八雲はそう感じる。

それは決まって八雲に対して、何らかの感情を持っている相手ばかりだった。

「兄さんは……きっと信じてくれたんだろうな」

時間が経つにつれて、彼女の力はどんどんと強くなる。

初めはその男の子だけからしか見えなかった文字も、他の男の子、他の男の子とネズミ算式に増えていった。

時には同年代だけではなくて、一回りも年上の男からも。

父親と同じ年頃の男の後ろにも、八雲は文字を見るようになった。

何だかわからなくて、けれどとても怖く感じて。

「好きだ」なんて文字以外にも「触りたい」とか「挿入したい」とか「無茶苦茶にしたい」とか。

当時はどんな意味かなんて全くわからなかったけど、その文字に含まれた八雲の背筋を冷たく撫でる嫌な感覚は、幼いながらも感じ取

っていた。

そんな文字を眼にするたびに、八雲は決まって兄の布団に潜りこみ、兄の着物の裾をギュツと握りしめて一晩を明かしていくようになる。やさしく髪を梳き自分を抱きしめてくれる兄に、ちよつとずつ、その日の事を話すのは八雲の日課となっていた。

兄は最初この事を話した時、ビックリしたように固まり、すぐに怖い顔になったのを八雲は覚えている。

痛いほどに肩を握り、その後また痛いほどに抱きしめてくれた。

何か、兄は言っていたような気もする。

だが言いようのない不安を抱え上げてくれた兄の態度に、八雲はただ涙を流すばかりだった。

やはり時間が経つにつれて、八雲の見える文字も増えていく。

男だけからしか見えなかった文字は女からも見えるようになり、好意しか見えなかった文字はその他の感情に見えるようになる。

そしてそれが相手の心の声だと気付いた時、八雲は14歳になっていた。

父も母も、誰しも例外なく八雲が視線を交差させると背後に心の文字が見えた。

自分の持つ力の特異さに恐怖を抱き、兄に縋ろうとしてもそこに兄はいなかった。

兄は彼女の前から姿を消していたのだから。

八雲は自分の力を、父と母、そして兄以外に告げた事は無い。父母から絶対に口外するなときつく言われていたからというのもある。

だがそれ以上に、話せばきつと、自分を人ではなく人で無い何かとして見るようになるだろうから。

こんな力があるせいで、彼女はきつとどんな人間よりも人の心の闇というモノを知っている。

簡単に人を裏切り、蔑み、見下す。

そんな黒く重たい感情を、彼女は前を向くだけで眼にするのだ。

「……どうしたらいい……ですか」

おろおろと眼に涙まで溜めてしまっているステラ。

八雲のかぶった布団をキュツと健気に握る彼女の頭をゆっくりと撫でてやる。

「大丈夫……うん、私は大丈夫だから」

自分より幼い彼女にそんな顔をさせてはいけない。

そんな使命感にも似た感情が、八雲の中でむくむくとわき上がっていく。

こんどはちゃんと、にっこり笑ってみせる。

「えへ……えへへ……」

「……八雲……おねえちゃん……」

まだ心配そうに、文字は揺らいでステラの後ろを漂っている。
もう一度彼女のやわらかな髪を梳き、八雲はステラを胸元に抱き
いた。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫。
何度も何度も八雲は心の中でその言葉を反芻させる。

正直に言えば辛い。

大丈夫なんて、バカみたいな嘘っぱちだ。

出来るものならば何度この瞳をえぐり出したいなんて考えたことか。
だが、それでも、彼女は今の現状に心を折らぬように歯を食いしば
る。

人が聞けば、どうしてそんなに頑張れるのなんて聞くのだろう。
それは彼女に頑張れる理由が、しっかりと心に根づいているからだ。

その理由は単純で、けれども八雲にとっての大切な心の支え。
大切な大切なそれを、大事に大事に彼女に彼女が心の奥底にもう一
度立てる。

父にも母にも、村の誰にも、誰にも会わずに旅に出た兄の言葉。
いなくなってしまう前の夜、布団の中で八雲を抱きしめながら兄は
言ってくれた。

『俺が絶対お前を助けてやらア。』

それが無理なら八雲の傍で、俺が一生お前を護ってやるぜイ』

大好きな兄の言葉。

それが打ちのめされる八雲の精神を少しだけ頑強にしてくれる。

だから頑張れた、今の今まで。

だからこれからも、八雲は頑張っていこうと誓う。

それに、今の居場所思った以上に心地良いものだから。

自分がようやく、本心から話せるかもしれない相手が見つかったから。

「灯りぐれエ点けるやコノヤロー」

「……………」

声のした方へと視線を移す。

思った通り、そこに立っているのは自分を攫ったリユーマが一人。

「あ、えと……おかえりなさい」

「ンな挨拶より飯だ。」

いや、俺も若いから頑張っちまってさ、腹がへってなア」

「……………」

「はい、今日はへんでろばを作ってみました」

「……へんでろば……楽しみ」

「おいしい……おなかいっぱい……食べる……です」

「そりゃいいこった。

ンじゃまア風呂でも行ってくるから準備しとけや」

「……………」

そういつてたたんでおいた着流しを一枚手に取ると、ズカズカ共同浴場の方へと歩いて行く。

それをピンクの小さな風呂桶に、かわいらしくくまさんパンツと寝巻を入れて、追いかけるようにステラが走っていった。

「あア、着いてくンのか？」

「……………」

「……………あい」

「おふろ……………ちゃばちゃば……………」

どうやら今日はリユーマと一緒に入るようだ。

首根っこを掴み上げ、肩にステラを乗つけた彼。

まるで父娘のような雰囲気、思わず彼女の頬もほころぶ。

何故かはわからない。

だが八雲がリユーマに会ってから、一度たりとも彼女は彼の心の文字を見た事が無かった。

考えようとすれば、いくらでも疑問が顔を出す。ただ、あえて八雲はそのすべてを無視した。

自分は彼のこと何も分からない。

でもそれは、本当は普通のこととて、そんな普通のことが出てくるというのが八雲にとつてとてもうれしい事だったから。

傲慢かもしれない。

けれど自分がリユーマの前なら、普通としていられるような気がしたから。

「……いかなこの佃煮も、つけたら喜ぶかな」

人の為を思うとは、多分こんな感じなんだろうなと思いつながら、彼女は夕飯の準備に取り掛かっていった。

十五戦目（後書き）

後半が変な感じですね

十六戦目（前書き）

一目惚れしたキャラは……変態でした

十六戦目

大会六日目

第1試合

ナミール・ハムサンドV・S・アジマフ・

ラキ

第2試合

リユーマV・S・白井カタナ

大会七日目

第1試合

レオパルド・マラーV・S・宝光

第2試合

ボーダー・ガロアV・S・タイガー

ジョー

大会八日目

第1試合

ナクト・ラグナードV・S・十六夜幻

一郎

第2試合

ウィング・シードマンV・S・ワートナー

大会九日目

第1試合

レメディア・カラーV・S・ブルマ大使

第2試合

マダラガ・クリケットV・S・ラフレシア

頭巾

ついに二回戦へと突入し始めた大会六日目、リユーマは毅然とした態度の女性に睨みつけられていた。

命を落とした冒険者たちを弔う、『教会と貯水池』にある墓地。
そのとある一角、石造りの墓の前で、小さいながらも鋭さをにじみ
出させるナイフを手にした一人の女性。

黒い喪服姿の、『千代』という名の彼女は手にした凶刃をリユーマ
に向けた振りかざす。

「貴方がっ……、貴方があの人を……！！」

涙で頬を濡らし、我武者羅にそれを振るう。
想いの籠ったそれを後退しつつ避けるリユーマ。

「なんでこうなったんかいねエ」

チラと彼女の足元に視線を移し、今日の出来事について思いを馳せ
ていった。

二回戦一日目、第二試合となったリユーマ。

今日は一回戦目とは違い、酒に酔っている訳でもなく、不都合な事
をしている訳でもなく、極めて普通の朝を迎えていた。

少し遅めに目を覚まし、八雲が作ったJapanの一般的な朝食を
食べ、寝汗でぬれた身体を湯浴みでもう一度さっぱりさせ、綺麗に
洗濯された白の着物を纏う。

軽く日本刀の手入れをして、コロシアムで試合観戦中の八雲が準備していた昼食をステラとともに食べ、帰って来た彼女の報告に耳を傾ける。

普通で普通でとっても普通なように、リユーマは試合に臨むはずだった。

八雲も適度な緊張を持ち良好な状態。

今日の対戦相手が女だから、という事で自分の身に汚れた欲望が降りかからないであろうという思いも彼女の気持ちを軽くさせる。

少しだけ嬉しさをにじみ出させたような笑みを浮かべるリユーマと、その背後に視線を巡らせ眼を閉じる八雲。

どこにでもいるような、極めて一般的な闘神大会出場者とパートナーの姿だった。

そう、だった。

今まさに、この時までには。

八雲の編んだ草履を履き、腰に刀を差し、カテナイ亭から通りへと出る。

昼過ぎ頃だからか、恐らく食事をしに帰ったナクトを一瞥して扉を開けた。

「リユーマ様、お待ちしておりました」

そこには恭しく頭を下げる、青と白の修道服に身を包んだ美麗のシスターが立っていた。

連れだつて彼の後ろから現れた八雲は状況に着いて行けず、とりあえずリユーマの後ろから様子を窺う。

その後ろにステラ、なんだか妙な光景だ。

「何でいんだ、テメエは？」

「無論、リユーマ様の御雄姿をこの目で拝顔させていただくためです」

淀み無く、まるでそれが当たり前かのように彼女、ポロロムは告げる。

その顔に浮かぶのは満面の笑み。

リユーマの背中に隠れた二人の口はポカーンと空いている。

意味がわからない、彼女ら、特に八雲の心情を代弁するならこれであろつ。

ふと、ポロロムはそんな彼女たちへと視線を移す。

しばし首をひねり、ポンと手を叩いた彼女。

酸いも甘いも受け入れてくれる、AL教シスターは慈愛の笑みを浮かべながら二人に向けて言葉を発した。

「はじめまして、私はポロロム、ポロロム・グライコ。

リユーマ様の奴隷兼肉便器を務めさせていただきます」

「はじめまして、私はポロロム、ポロロム・グライコ。

リユーマ様の奴隷兼肉便器を務めさせていただきます」

完全一致したポロロムの言葉と心の文字。

八雲の経験上、それはかなり珍しいのだが事もなげに彼女はやってみせた。

……まあ最低の方向ではあるが。

「俺さ、ンな事頼んでねエンだが……？」

「いえ、私がやりたくてやっている事なので御気になさらず。

ですが……私の髪の毛一本から血の一滴に至るまで、すべてリューマ様のものですから」

キヤッなんて頬を染めて見せるポロロム。

非常にかわいらしい仕草なのだが、奈何せんどうも台詞と合っていない。

果たして昨日、リューマがどのような事を彼女にやったのかは甚だ疑問が残るが。

まあ元々彼女にもそういう、つまり変態な素質があったのだろう。

「八雲おねえちゃん……にくべんきって……」

「うん、まだ知らなくていいからね」

ポロロムの言葉にこれでもかといわんばかりに顔を赤くしていた八雲であるが、ステラの危ない発言に、どうにか自分を取り戻す。

取り戻して、ステラの口を塞いで、またまた八雲は湯気を出しそうなほどに真っ赤になっていく。

ポロロムの言葉がわからないほどに彼女は子供ではない。

寧ろ、むき出しとなった男の欲望に晒されてきた八雲は、同年代に

比べれば耳年増。

清楚なはずのシスターの方を向けば、後ろに浮かぶ淫らな文字の群れ。

「……………あう……………」

思考が焼き切れんばかりの現状ではあるが、どうにか今を打破せねばならない。

それはこれから試合があるから、というのが一つ。

そして何となく、見えない事が悔しいのか悲しいのか、そんな風に思ってしまう彼と彼女で一つ。

「どっちやでもイイんだがね、とりあえず行かなダメだろ？」

「……………」

「はい、すぐにお供いたします」

「嗚呼、リユーマ様を想うだけで……………んんっ」

バツとポロロムから視線を外す。

僅かに体をくねらせている彼女が、まるで視界に入っていないかの如くにリユーマはズカズカ、コロシウムへと足を運んでいく。

勿論彼の視界には何時も通りに自分が入っていないわけで、少しさみしい気持ちが沸き起こってきた。

だがその勢いは、いつもと違ってちょっとだけ激しかった。

熱を持っていた頬も急速に冷えあがって行ったように感じる。

リユーマは大して気にも留めていないようだが、何となく今の状況

は気に食わない。

気に食わないといつても彼女に何か文句を言えるほどに八雲は強くもない。

攫われて、一応自分はパートナーのはずだ。

大事な初めても、無理やり奪われているはずだ。

だというのに明らかに、リユーマと深い関係になったであろう女性が彼の少し後ろを歩きついて行っている。

彼の半歩後ろを、着かず離れず一定のペースで。

チクリと、少しだけ胸が痛む。

やわからかに保たれていた表情は崩れ去り、ひどい顔へと変わりつつある。

歩いて行くリユーマ。

その後ろに続くポロム。

いつの間にやらリユーマの肩の上にいるステラ。

俯いていた顔を上げればそんな光景が八雲の目の前に飛び込んできた。

でもそれは違うはずで、本当はどこか違うはずな光景。

「……………あ……………えう……………あ……………」

思わず瞳が熱くなる。

自分の居たはずの場所に自分がいなくなっている。

あそこにいたのは自分なはずなのに、そこには違う人が居座っている。

前にも言ったが八雲は人見知りだ。

誰も知り合いがおらず、誰とも知り合いになれず。

一人ぼっちでこんな見知らぬ闘神都市に来て、普通ならば平静を保っていられる訳もない。

だが結果として今までそうは成らなかった。

それは無理やりであるが攫って来たリューマが、思った以上に彼女にとって居心地のいい場所を作り上げてくれたから。

だからこそ兄がいなくなつてストレスばかりを溜めていたような「apan」にいた頃とは違い、自然と顔がほころぶようになった。

なのに今は、自分なりに考えて、リューマのことを思つて作り上げたい場所は掻つ攫われていた。

どことも知れない、見た事も無い女性によつて。

八雲は人見知りだ。

その上さびしがり屋だ。

瞳はさらに熱くなる。

焼き尽くすような、痛いほどの熱さが瞳を襲う。

自分は何故にここまで悲しいのだろう。

置いて行かれたから？

いや、それはいつもの事だ、そしてそれを追いかけるのが今ここでの日常なのだから。

大して気に留めるようではもうやっていけないだろう。

ステラが自分に何も言葉をかけてくれないから？

いや、一緒にいる事が多いのは自分だが、自分よりリユーマに彼女はなつている。

それに肩の上は彼女のお気に入り、よっぱどの事がないと降りようとはしない。

親しげに女性と話しているから？

いや、そう言うならばシュリや、トトカルチョ会場のバニーもそれに当たる。

そんなことに目くじらを立てるほど、嫉妬なんて感情を八雲は抱かないだろう。

何故、何故、何故、何故、何故。

熱くなり零れ落ちそうな瞳に対応して、頭も熱く、同じ事ばかりがグルグル回る。

「お前っ……ポロロムさんに何してんだよ!!」

そんな八雲の思考を遮ったのはナクトの大きな声だった。

またか、とでも言いたげに下顎を突き出したリユーマと強い視線で彼を睨むナクト。

「奴隷とか……につ、肉便器……とか!!」

お前何やったんだ!？」

どうもやはり、彼はリユーマの事が気に食わないらしい。

これまでにさんざん煮え湯を飲まされてきたにもかかわらず、まだ彼にこうやって敵意をぶつけようというのだから。

「ナクトさん、安心してください。」

私は別段何をされたわけでもありませんから」

熱くなったナクトをたしなめたのは、意外にもポロロムだった。まさか彼女が矢面に出てくとも思わず、何もされていないなんてことを言うとも思わず、呆氣にとられてしまう。

辺りの人間も何事か、と二人に興味深そうに視線を注ぐ。

その原因たるリユーマはそこいらの、少し荒っぽそうな男たちと、まるで自分には関係ないかのように話に花を咲かせていた。

「何もって……でも、それならっ！」

「本当ですよ、私はこれでもシスターですから。

私の仕える方に誓って、何もやましい事はしておりません」

直情的な彼をふんわり受け止め、ポロロムは笑みを絶やさない。やはり様々な人が訪れる教会、そこにいた彼女は今のナクトのような人のあしらい方もしっかりと心得ているのだろう。

消沈しつつあるナクト。

そんな姿をぼんやり眺めていた八雲は、急に首根っこが引っ張られるのを感じた。

「テメエな、何遍言わせりやわかるんだ。

俺試合、テメエ必要、遅れちゃ困る、……おわかり？」

ヒョイツとステラの乗っているのと逆側の肩に担がれた八雲。

突き刺さる好奇の視線に、今まで回っていた思考はなんのその、上回るような熱さが頭を焦がす。

「今日はゲロ吐かねえのか？」

「兄ちゃんに賭けてんだからな」

「この前みたいなぶっ飛んだ試合を楽しみにしてるぜ」

必死に身を小さくする自分をよそに、先ほどまで言葉を交わしていた筋骨隆々の親父たちから声援が飛んで来る。

どうも彼らには、今までに無いリユーマの傲慢不遜な態度がいたく、お気に召したようだ。

「ケツ、イイ気になりやがって」

「どうせお前は今日女に負けるんだよ」

反対に、やはりリユーマが気に食わなく野次を飛ばす人物もいる。その言葉にさらに小さくなる八雲であるが、本人は気にも留めていない。

コロシムへと向けて歩みを進めていたリユーマはクルリと踵を返し、誰が見ても恐らく悪人面で、その姿がさらに深く濃く見える笑みを浮かべた。

「当たり前だろ、てっぺんてのは俺の為にあるんだからな」

「かつこわりー」

「ダセエぞ兄ちゃん」

「うっせエエエエ、黙ってるコラアッ！！」

寧猛に剣歯を剥き出しに、彼はガルルと吼えてみせる。

ギヤハハとバカ笑いする男たちを後に、リユーマはズカズカ歩いて
った。

「勝てよコラ」

その中の一人が背中に声を投げかける。

ピリッとしたように、空気が締まる気がした。

そんな風に、いつの間にか出来た男と男の友情を確かめ合っていた
リユーマから少し外れて、ポロロムとナクトはまだ対峙していた。

「そう、あの方に誓って……」

陶醉したようなポロロムの表情に、ナクトはふと首をかしげる。

昨日『教会と貯水池』で会った彼女はこのような狂信者だっただろ
うか。

そんなこと無いと思うんだけどなあ、と思いを馳せていたその時、
彼の疑問は瓦解した。

「そうつ、私が唯一絶対この世でお仕えするリユーマ様に誓って！
！！」

「ええええええええええっ!？」

「嗚呼、思いだすだけで身体が熱くなるっ……。」

貴方様にお仕えすることこそ私がこの世に生を受けた理由っ、使命っ!!

もっとその逞しいお身体で私を汚してっ、穢してっ、蹂躪してっ!!

……それこそが私の至上の幸福……」

熱っぽく、思わず囲む観衆の息子をおっきさせてしまうほどの色香を振り撒くポロロム。

チロと唇を舐めるしぐさなど、誰も彼女が昨日まで処女だったとは思えないほどに妖艶で、蠱惑的な魅力が孕まれていた。

「ハッ、リ्यूマ様!？」

……嗚呼、こちら、こちらから貴方様の香りが……、今ポロロムが参ります」

辺りを見渡した彼女はきよきよと周囲を見渡し、一目散に駆けていく。

残されたナクトらは、ただ美麗のシスターの行動に、前屈みであんぐり口をあけることしか出来なかった。

十六戦目（後書き）

変態シスター覚醒

キャラ崩壊は激しいんでしょうか？

十七戦目（前書き）

ナクトくんって技能レベルとかあるんでしょうか？

十七戦目

「……あつ、あのつ……！」

「あア、何か用か？」

「……………」

「いつ、……いえ……」

コロシム、闘神大会出場者控室にいる八雲は目の前のリユーマの背中に視線を寄せる。

そんな自分の視線など眼中にないかのように、彼は長椅子にゴロリと横たわっていた。

聞きたい事は、たくさんある。

たくさんといっても、すべて同じ事に対してだから、たくさんでもないのかもしれない。

でも聞きたい事は、確かにある。

リユーマと、ポロロムの関係。

いきなりあんな発言をされて、ただならぬ仲にあるというのは予想がつく。

恐らく、肉体的なそれ。

キュツと胸がしまる。

閉じた手のひらを、軽くそこに添えてみる。

今、自分のこの胸に、あるそれは何なんだろう。

そもそもどうして、自分はこんなにも平静でいられないのだろう。

冷静に、冷静に、八雲は頭を冷やしてゆく。

ポロムとリユーマがただならぬ仲にある。

けどそれはそこまで、自分が気にするような事なのだろうか。

よく考えてみれば、自分に襲いかかるかもしれないかもしれない劣情を代わりに受け止めてくれているのだ。

つまり、簡単に考えるならば自分が性の捌け口にされなくなる可能性が高まってくる。

記憶も曖昧な中で散らされた純潔、そこに無法者を侵入させなくて済むということ。

どう考えても、これは諸手を上げて喜ぶべきことなはず。

……はずなのだが、そうやって喜べない自分が今ここにいる。

何故か、と聞かれてもやはりわからない。

わからないのだが、わからないなりに、どことなく嫌な気持ちが胸に居座る。

「……言いたい事があんならはっきり言え。

そやってさ、オドオド見られるのはウザいんだわ」

「……………」

「あつ……………すいません……………」

「……ハア、勝手にしとけ」
「……………」

舌打ち一つ、ジロリ睨み付けるようなりユーマの視線に八雲はさらに委縮する。

彼はそんな彼女に見向きもせず、懷から一本の煙管をとりだした。雁首の火皿に丸めた煙草のようなものを取り出すと、マッチらしきものでそれに火を付ける。

一口、二口、一息入れて三口。

噴き出す呼気とともに白い煙が控室に漂っていく。

それはヤニ臭ではなく、どこか香草のような匂いを持っていた。

山の中の、草木や樹木の香り。

八雲はそれに兄と探検に行った故郷の山々を思い出していた。

思い出に促されてからか、八雲の頭は段々と整理されていく。

先ほどの出来事を振り返ってみよう。

カテナイ亭から出たことにポロロムがいて、彼女の発言で八雲の頭は沸騰したはずだ。

だがそんなもの簡単に吹き飛んだ。

何故？

それはリユーマに担がれたから。

首根っこ掴まれ、担がれるのはいつものことである。

だがいつもいつも、そんな事されると今まで考えていたことはすべ

て吹き飛んでしまう。

これもまた、いつものことだ。

担がれるだけでなく、何気なしに触れられたり、自分の行動を褒めてもらったり。

そんな風に扱われるだけで、八雲はこれでもかというほどに赤くなってしまう。

恥ずかしいのと、そして他の感情が緋い交ぜになって、八雲の身体を締め上げる。

けどそれは決して不快なんかじゃなくて、ほかほかと、あたたかなるような気持ちが彼女を覆う。

この気持ちは何なんだろう。

多分だけど、これがあるからこそ自分はポロロムに変な感情を抱いたのだろう。

…… 厳密に言えば、ポロロムだけではないのかもしれない。

シュリにしても、バニーさんにしても、果てはステラにしても。

リユーマと一緒にいるときは何か、胸に引っかかるものを感じていたのではないだろうか。

「リユーマさん、そろそろ試合時間ですけど大丈夫ですか？」

「ありやく、またリユーマさん何かしたんですかね？」

「んう……ブハア」

「……………」

「ケムたっ、何するんですか!？」

「ヤ二臭……くはないですね、何でしょ？」

「ケケケ、了解了解。」

八雲、その袋よこせ」

「……………」

「……はい……」

突然入っていたシュリにより八雲の思考は再び遮られる。

背後に浮かぶ文字に、心配かけてしまったかな、と少し俯き、やっぱり胸に引っかけりがあるように感じる。

若干重たい腰を椅子から上げて、彼女はリユーマに小袋を手渡した。いつもは世色癌などのアイテムを入れているそれであるが、回復系統は大会では使用禁止なはずだ。

小首を傾げる八雲にニヤリ口元を釣り上げたリユーマ。
手に持った煙管を遊ばせながら、彼は闘技場へと向けて歩きだしていく。

今回のリユーマの対戦相手、『白井カタナ』は名の知れた女戦士である。

聖魔戦争にも参加しており、前線で長刀を振るう姿は圧巻。

『緋袴の長刀使い』なんてカッコイイのかカッコ悪いのかわからないが、異名まである人類でも屈指の実力を誇る存在だ。

美しき長刀使いとして知られるカタナは、同時に、禁欲的な求道者

としても知られている。

基本的に己との戦いの場である修行場、そして人類の敵である魔王や魔人たちとの戦いの場である魔人領と人間領との境界にしか赴かない彼女。

それがなぜこのような場に現れたのか、と聞かれるとアレなのであるが。

ともかくカタナは彼女の目的の為に、人類と魔人の戦争の場をほっぽり出してこの場に駆けつけている。

それだけ彼女と、その妹である弓使い『白井クナイ』にとって大切なものがここにはあるのだらう。

故に彼女らの気概は半端じゃない。

来年で30年、戦争は続いている事になる訳であるが少々人類はヤバ気なムードである。

聖魔教団が造り上げた闘神都市も、すでに魔人たちにより幾機か墜とされている。

長い戦争によって人々の精神疲労も凄まじいものがある。

さらに人類側にとっての訃報は続く。

非魔法使いの中、唯一生身で闘將にすら匹敵する実力を秘めていると謳われていた剣士も戦死した。

蛮族と、少々罵られ気味の彼らにとってその存在は非常に大きな心の支えであった。

自分たちと変わらぬ魔法の使えない男が、剣片手に、それこそ魔法使いたちなど目にもくれないような活躍をしてみせる。

自分なわけではないが、けれども自分だって頑張れる。そんな気持ちを奮い立たせてくれていたのだ。

だが彼は死んだ。

そしてそれにより聖魔教団を非難する声も高まっている。

彼が死んだのはきつと闘将へと変貌させるためだ、魔法使いの陰謀により彼は死んだ。

不満は募り、根も葉もないような噂が立ち、戦争開始当初とは比べ物にならないほどに士気は低下している。

彼が死んだ唯一の救いは、彼目当てで戦争に参加していた魔人の幾体かが魔人領に引っ込んだことくらいであろう。

といっても十数体の魔人は、魔物たちを率いて遊ぶように自分たちを蹂躪する。

魔人たちを切り裂けるといわれる『魔剣』や『聖刀』の担い手が現れたという話も聞かない。

人類は、特に非魔法使いたちは敗戦ムード全開なのだ。

だがその中でも、自ら前線に立ち人類を鼓舞する。

そんな存在の一人がカタナであるのだ。

だからこそ、彼女の気概は半端ではない。

免除金である30000GOLDは仲間たちのカンパにより集まった。

無論1GOLDたりとも無駄にしたくはない。

そんな彼女の気持ちが一ビンビンと、八雲には伝わって来ているのだ。

不安は胸を焦がし、気分を苛立たせる。

際限なく泳ぐ視線。

縋るような思いでリユーマへとそれを投げかける。

コキコキ首を鳴らす彼は、珍しくそれに気付いたのかこちらを向いた。

少し、緋色の瞳を見つめたリユーマはいつものように不遜に顔を歪める。

刹那、八雲の顔はこれまでの赤が赤ではないほど紅く染まり上げた。不安も苛立ちも、すべて押し潰される。

心臓が早鐘を打つ、フラフラと視線が定まらない。

「……………あう……………」

ポテツと膝の力が抜けて椅子に腰を落とした八雲。

「さてはて龍のコーナーより姿を現したのはリユーマ選手!!」

今回はどのような試合展開を見せてくれるのでしょうか!？」

シユリのアナウンスも右から左に抜けてゆく。

攫われて、ここに来て、まったく見えなくて。

たった一度だけ一瞬だけ、彼の背中に見えた文字。

「……………まア八雲は俺にとって必要だしな……………あう……………」

それがどんな意味を含んでのモノなのか、深く判断できないほどに八雲の全身は火照っていた。

片手に長刀を携え、白井カタナは優雅に立つ。

ゆらりと身を屈めると、腰に日本刀を差したままのリューマを窺う。

「……抜かないのか？」

「抜く必要ねエかもしれンだろ？」

「フッ……、前の試合の愚鈍なそれと私を同じと捉えるのか、貴方は？」

「わからんから抜かんって言うてんのにアホなの、ねエアホなの？」

それよりさ、お前の妹って処女？」

「……弄るか、貴様……！」

ギリツと射殺すような視線。

陽光を受けて煌めく白刃。

ゲヘツと厭らしく彼が笑った時、カタナは地面を蹴り疾走した。

大会二日目、最初の交差はカタナから。

滑るように地面を駆ける彼女は掬い上げるように、リューマの脇腹

目掛けて長刀を進ませた。

グガッと彼女の腕に負荷がかかる。
見れば刀身に近い柄の部分に草履が乗っかっていた。

乗せた足そのままリューマは長刀を地面に叩きつけようと体重をかける。

「刃乱楠ッ！！」

瞬間、カタナの持った長刀の刀身は彼女の言葉に合わせて彼の足を刈り取るように動きを変える。

白い袴が宙を舞う。

加えて少量の血飛沫がその白を染め上げた。

「何とカタナ選手の持った長刀が変形しました！？」

脚を怪我したと思われるリューマ選手、今後の試合に響かないか心配なところです！！」

観客は歓声を上げて身を乗り出す。

そこを触り、ヌルリとした血を掬いとったリューマは口元を弧月に歪めてみせた。

「ケケケ、やるじゃん。

俺ってば勝ったつもりだったんだけどねエ」

「……いや、こちらこそ見縊っていた。」

あの体勢か手刀が来るとは思わなかったさ」

頬を血化粧で濡らしたカタナは、少し興奮したように口を開く。

ピツと入った一本線、足元に落ちた艶々しい黒髪。

リユーマは長刀を踏みつけたのと同時に彼女目掛けて、手刀を放っていたのだ。

リユーマが後ろに跳んだことにより距離をとった双方。

再びカタナは長刀を構え、今度は両手を携え頭上にそれを持ち上げた。

ジリジリと、地面を擦りリユーマへと接近するカタナ。

「イイ武器使ってんな」

「父から貰ったものだ、『宝槍・刃乱楠』という」

「ファランクス……ねエ。」

長くてしなる柄だから、槍頭の動きが変幻ってところか」

上り片鎌の槍頭をもつ彼女の長刀。

うねる刃は蛇の如く、彼の脚に襲いかかったのだ。

ジリジリと、更に距離を詰めるカタナ。

それをじっと見つめるリユーマ。

「でもさ、それって贋物だろ」

あっけらかんと言いつつたりユーマの一言に、カタナの動きはぴたりと止まった。

「……意味がわからないが」

「ケケケ、惚けちゃってさ。」

本物の槍頭は菊池だろうが、どこからどう見ても違うし」

先ほどから言っている『上り片鎌』も『菊池』槍頭、つまり刀身の構造のことである。

『菊池』はごく一般的に我々が思いつくであろう長刀の刀身のこと、『上り片鎌』はそれにくっつくように刃が付属した二股の刀身である。

斬撃の機能を強化する、引つ掛ける、敵刃を捕らえるなど多機能化した『枝物』と呼ばれる刀身。

その刀身をカタナの長刀は持っているのだ。

「ありやりや、天下の白井カタナ様がそんな嘘ついちゃアいかんねエ」

ケタケタ楽しそうに笑うリユーマをギツと見つめるカタナ。

強張っていた顔をふつと緩めた彼女は、頭上に構えた長刀を緩くおろした。

「確かにな……いや、うん……すまない。」

貴様如きこれで十分だと思っていたが……やはり私は見縊っていたようだな」

そう告げてクルリ踵を返すと、シュリに向かって声を上げる。

「すまないが、武器を変更したい。」

控室に戻ることを許してはくれないだろうか？」

「えっ、イヤそれは私の独断で決める訳には……」

「イインじゃねエの？」

手に持った小袋を放りながら、声をかけたのは対戦相手のリユーマであった。

人の良さそうな、だからこそ不気味な笑みを浮かべた彼。

「俺は全然かまわねエゼイ」

「……はい、ではその意義を可決します」

「恩にきる、リユーマどの」

ペコリー礼した彼女は、開いた扉から控室の方へと駆けこんでいった。

少しの間があいて、カタナは新しい長刀片手に姿を現した。

白く長い柄に、黒い柄の日本刀を接続させたようないでたち。

だがそれは、先ほどまで刀が持っていた赤い柄の長刀とは比べ物にならないような存在感を醸し出していた。

「宝槍・刃乱楠だ」

その言葉に息を飲む観客。

だが何処となく、やるせない表情を見せている。

自分勝手な真似をしたからか、とカタナは深く恥じる。

ならば、この場をそれ以上に盛り上げればいいだけのこと。

「破アアアアアアッ！！」

そう感じ取った彼女は裂帛の気合を込める。

緩み切っていた空気はとたん張りつめ、刃のような鋭さがカタナの全身から吹き上がってくる。

彼女に呼応してか、リユーマもヌラリ日本刀を抜き放った。

地面とは水平に刀身を置き、やわらかに肩にそれを乗せた。

通常の日本刀より、さらに長く鋭利な刀身。

恐らく『太刀』と呼ばれる種類のそれを右腕一本で軽々と支える。

「……まアこいや」

放ったリユーマの言葉とともにカタナは疾走し、落ちた。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ、真面目にやるわけねエだろバアアア力ッ！！」

見れば彼女と彼をつなぐ直線状に空いた大きな穴。

その中に落ちたカタナに切っ先を付きつけながら、リユーマは厭味ったらしく声を上げた。

先ほどのカタナのいなくなった間、彼は必死に穴を掘っていた。そして出来上がった落とし穴、そこに何の疑いもせず向かって来た彼女は落ちたという訳だ。

「ひっ……卑怯者、恥を知れ!!」

「ケケケ、んな物知るかッ!

勝てばいいのさ勝てばよオ!!」

喚くカタナに悪人らしく笑うリユーマ。

無論どれだけ喚こうが、彼の白刃は彼女の喉元を正確に捉え、そこを離さない。

結局不完全燃焼な空気の中、カタナは負けを認めることしかできなかった。

十七戦目（後書き）

無茶な終わらせ方な試合……

やっぱりまだまだなあ

十八戦目（前書き）

今回ちょっと妙な感じ

十八戦目

「うゝセクロスセクロス。」

今セクロスを求めて全力疾走している僕は闘神大会に出場する一般的な男の子。

強いて違つところをあげるとすれば、前の試合の勝ち方がちょっとおかしいってところかな。

ふと見ると通路に若い女が立っていた」

「ウホッ！いい男……じゃないッ！！」

「ノリが悪い……やってらんねエなア」

ギンツと強い眼差しでリユーマを見つめるのは先ほどの試合、落とし穴なんてと古典的な手段で敗退となつてしまった一人の女性。人類屈指の実力者（笑）、白井カタナが通路を塞ぐように仁王立ちしていた。

「なにさ、負け認めただろうがテメエは……。」

しつこい女は嫌われるぜイ」

「言つに事欠いて……貴様はッ……！！」

立ち上るように滾らせていた怒気はさらに天を突くように、膨れ上がる。

チリチリとした激しい殺気。

やんのかコラ、と敵意むき出しのカタナにリユーマは首をかしげた。

カタナはカタナでそんな彼の態度に不満を倍々と募らせる。

清廉潔白、正々堂々を自らの信条としている彼女にとって、先ほどの試合は認められるものではなかった。

勿論この大会のルールは知っている。

だが己の身を生け贄として奉げてくれた妹、クナイの名誉のためにも、自分が正面から『負けた』とはつきり言い切れる相手でないと理解が出来ても納得が出来ないのだ。

「とりあえず邪魔、俺はその後ろに用があんだよ」

「あの〜カタナさん、一応ルールですので」

リユーマの背に隠れるように口を開けたシュリ。

元々彼をクナイの待つ部屋に案内するためにやってきた訳であるが、普段の行いでも悪いのかとばつちりを受ける羽目となっていた。

ガツンと彼女にも降りかかってきたカタナの威圧感にサメザメ心で涙を流す。

スススツ、彼の後ろにさらに大きく自分の身を隠したシュリは、もう一度この大会におけるルールを思いかえしてみる。

まずは勝者の権利について。

勝者は対戦相手のパートナーの女性を、試合後24時間の間、自由にできる。

但し、性交以外の傷害、及び殺害は認めない。

対戦相手が女性であり、自分自身をパートナーとしていた場合もこ

れに準ずる。

そして敗戦時の罰則。

パートナーを試合後24時間の間、対戦者に預ける事。

その間にパートナーがどの様な目に遭っても、大会運営委員会及び対戦者に責任を問う事はできない。

つまりこの場合、負けたカタナはパートナーのクナイを勝ったリユーマに預けねばならない。

その上彼の行為を、邪魔してはいけなはず……なのである。

「カタナ選手、これって結構なルール違反なわけですよ。

リユーマさんが申請とかしちゃうと、それこそ一発で二人とも労働義務と罰則がかけられちゃうくらいには」

現に出場者同士で私闘をしたせいで、失格となった選手も既に存在する。

流石にそのことを知ってか、少し気後れを見せるカタナ。

人類、非魔法使いたちにとって今なくてはならない存在となっているカタナ。

その彼女がこんなところで、それこそ三年間かそれ以上か、居座っている訳にもいかないのだ。

そんな事態となれば土気の希薄化が進む前線が瓦解し、いずれ魔法使いだけでは留めきれなくなった魔人や魔物たちが怒涛の波の如く、今の人類の居住区に流入してくるだろう。

ここの都市が幾ら大陸の東南部に存在し、その付近が戦争とはかけ離れた治安の特殊区域にあるとしても、胡蝶の夢か水泡のように、

消え去っていくであろうことは眼に見えている。

そのような事態になる訳にはいかない。

かと言って、妹のクナイを自分の情けない失態のせいで、彼女の大切な純潔を散らす訳にもいかない。

ならば、自分が覚悟を決めよう。

そう思い彼女は考えを少し転換させた。

元々こんな事態を引き起こしたのもすべて自分が悪い。

偽善や自己満足かもしれないが、自分の身を犠牲にこの場を乗り切り、とつとと前線へと復帰しようではないか。

第一、本来は一人で参加するつもりだったのだからとつとくに覚悟は出来ている。

少し悪い言い方になるがクナイがそうさせる訳にはいかないと、やってきたせいで今自分は気を揉んでいる訳なのだ。

それに、だ。

こんなこと最愛の妹の前では口が裂けても言えないが、貧相な身体
の彼女よりも自分の方が魅力的なはずである。

少し武道の邪魔になるくらいに育った胸、引き締まった腰、やわらかいはずの桃尻。

髪だって肌だって、まあ自分も女な訳で、多少は気にする訳で、艶々しくハリがあり、男なら眉唾ものであると思う。

魔法使い、非魔法使いに問わず男に迫られたり口説かれたり襲われかけたりした事もあるし、種族の壁を越えて魔物からも厭らしいねつとりとした視線を受けた事もある。

クナイはというと一部ががちよつと残念なためか、自分よりはその

量も質も劣っていると感じる。

後、加えていうならばしつこいようであるが、やっぱりカタナも女
わけである。

20を越えた彼女。

J a p a n の、地元周辺のでは同年代の娘は皆が子を成し、幸せそ
うな家庭を築いている。

歳下の娘も、五つか六つ、七つほどの歳の差であればほとんどの娘
が結婚している。

J a p a n の女子の結婚適齢期はだいたい13〜16歳ほど、許容
範囲を求めれば18歳くらいまでであろうか。

早ければ10歳でも結婚が決まってくるようなそんな土地で、彼女
はもう二三年もすれば折り返し。

20歳を超えると『年増』と呼ばれ、23歳を過ぎれば『中年増』、
26歳を超えればその名も恐ろしい『大年増』と呼ばれ、30歳を
越えてしまえばまともな女性としては扱ってもらえない。

そんな場所で、今の今まで男性とまともに手を握った事も無く、恋
愛や肉体関係なんて以ての外。

迫られたり告白されたりした事はあるといっても、答えた事なんて
ない。

十年か、イヤまだ五年前くらいならばJ a p a n でも引く手多数で
あったが今では全くの疎遠。

迫られたりなんてことはすべて前線の、J a p a n 出身ではない男
たちばかりだ。

J a p a n では名の知れた寺の跡取り娘で、それゆえに禁欲的に過

ごしてきた彼女。

だからそ、やはり関係を持つのは寺に婿養子に入ってくれる人で、
尚且つJapan出身が望ましい。

そしてどうせなら、その人だけにすべてを捧げて、子を成したいと思う。

20を越えて、男性との一次接触すら果たした事のないカタナは意外なほどに乙女であった。

引く手多数なころはその数に舞い上がってしまったて、20が近くなると異様なまでに堅実になってしまつて、結局今の歳。
なのにその心は乙女、厄介なことこの上ないと自分でも自覚はしている。

だったら今の状況は渡りに船なのではないか？

無理矢理奪われてしまう訳だがとりあえず経験は出来る訳だ。
自分の心に残っている名残のようなモノも、この状況なら許容とい
うか諦めというか、ケリはどちらにしてもつけられる。

後は歳食うことで勝手に入るだけ入ってきた技術やらなんやらを必
死に試して、経験無さそうな歳下を捕まえてしまえば……。

「わっ、私は何をッ……！？」

「知るかボケ」

最後の意見は彼方に蹴り飛ばし、ふうふうと荒い息をつく。

ともかく人生は経験、武道も経験が大事。

凝り固まったプライドというか、前時代の遺物というか、それをなくしてしまえば更なる高みに行ける……かもしれない。

恐らく赤くなっているであろう、火照った顔を持ち上げて、強張った精一杯の笑顔を向けてみせる。

「先ほどのはずまなかっただから私がそう私が妹のクナイの代わりにお前の相手をしてやろう。勘違いするなお前に負けを認めた訳でも何でもない。そうだただただ妹のクナイが可哀想だからこの場は私が身代わりになろうという訳だ。幸いなのかなんのかはよくわからんが私には男性経験もあるし処女のクナイより貴様を満足させてやることだつて出来る筈だ。一応言っておくが違うぞ私はやりたくてやっているのも何でもなくてただそうただルルルルルルだからだ。奉仕なんて言うことを貴様にしてやるのは私もひどく心外なわけだがこれはルール違反のお詫びだと思って男なら度量を持って受け入れてみせる。さあ出は待ちに繰り出して閨に入つてまぐわいをしようではないか」

一息のうちに早口で言いきつたカタナはどこか達成感のようなものを漂わせる。

そんな彼女にリユーマは照れくさそうな笑みを浮かべ、スツと手を差し出す。

カタナもプルプルと震える腕をゆっくり持ち上げ、彼の手の前でその動きを止める。

触れるか触れないかの位置、そこでしばし引いたり出したりを繰り返したカタナは意を決し、リユーマの手を握った。

そして投げられた、それはもう盛大な一本背負いで。

「瑞々しい処女がいるってのに何で中年増の、嘔吐き処女を抱かねエといかねんだつつの。」

行き遅れはぶたバンバラと盛ってる」

『ぶたバンバラ』とはこの世界で代表的な男の子モンスターのこと。安っぽい槍か剣と盾で武装するサスペンダー付きのズボンを履いた二足歩行のぶたで、人間を殺して楽しむのが仕事で生き甲斐という邪悪な種族である。

が、ある程度の実力となれば経験知要員として狩られるかなしい種族でもある。

[illegible]

シュリから降り注ぐ痛い視線もなんのその、呆然とした表情で転がるカタナの脇を抜け、クナイがいるであろう扉へと手をかける。

刹那ドカツ、という音とともに、彼の顔の傍に深々と刃が突き刺さった。

ギチギチと、油の切れたゼンマイのように首をそちらへと向けるリ
ューマ。

そこには一匹の羅刹が立っていた。

先ほど桜色に染まっていた顔は何所へやら、ビキビキ青筋をたてた顔。

少し潤んでいた瞳に今は無く、深く奥底が見えない闇を宿す。

[illegible]

壊れた機械のようにつぶやくカタナ。

一言一言に例えようもなく重い、怨念が含まれ、それがリユーマの耳を犯す。

のっそりと、緩慢な動きでカタナは彼の隣に刺さっていた長刀を抜き取る。

ギュリギュリと彼女を覆っていた瘴気とでも言える、朱黒のエネルギー

ギーがその手に携えた凶刃へと集まっていた。

「……おおッ、そいやアちょっと俺用事あるからさ。

ナガサキ、後は頼んだ」

「へっ、何言ってるんですかりユーマさん!？」

「くッ……ナガサキ、テメエの活躍は多分忘れねエかも」

「何ですかそれはアアアッ!!!!」

「男なんて……みんな死ねばいいんだアッ!!!!」

もはや駆け出しているリユーマと、訳のわからない状況に立ち尽くしていたシュリ。

長刀より発せられた伸びるような赤黒い奔流は、直線状のリユーマをシュリごと巻き込み、その空間を抉り去った。

「ほら前、リユーマさんゾンビですゾンビ」

「人使いが荒いっての、自分でやれ自分で」

「なんですか、この美人のおねーさんがどうなっちゃってもいいん

ですか？」

「ハハッ、美人、テラワロスｗｗｗｗ」

迫るゾンビを蹴り飛ばし、無表情に笑ってみせるリユーマ。むうと膨れた顔のシュリなど全く気にも留めていない。

襲い来る恐怖の彼女から逃げおおせた二人は現在、『教会と貯水池』にいた。

恐らく『必殺技』の類であろうカタナの攻撃を、シュリを抱えて何とか逃れたリユーマであるが、冷徹なる追跡者は二人の逃亡を許さなかった。

街中だろうと関係なしに長刀を振り回すカタナとシュリを抱えて必死に逃亡を図るリユーマ。

二人+ の愉快とはいえない難い追いかけては、迷宮に入ろうとした冒険者の一人を人身御供にする事で何とか終結を迎えた。

「……彼、大丈夫なんですか」

「知るかなの、俺には関係ねえし!!」

「ホントにいい性格してますねエ……あ、褒めてないですよ」

照れるリユーマに釘を刺し、シュリはにっこり笑ってみせる。

迷宮に入って三時間かそこらくらい。

傷つきボロボロな様子でゾンビに囲まれていたナクトを散々からかい、とりあえず追いかけてやって来たポロロムにブン投げた後、彼

らはのんびり迷宮を探索していた。

とはいっても何故か泥だらけになっている迷宮内、女の子にそんなとこ歩かせるんですか、とでも言いたげなシュリ無言の要求により、彼女は今リユーマの背中にいる。

お帰り盆栽は八雲に預けてあるためここにはないし、シュリはもちろん持っていない。

結果として入口にある脱出用魔法陣へと向けて、二人、もとい一人ぶらぶら歩いているのだ

「にしても『必殺技』、やっぱりカタナ選手ってその名に違わぬ実力でしたね」

ガンガンとゾンビを足蹴にしていくりユーマに対し、元々おしゃべりなのかシュリは口をどんどん開く。

まあそれがリユーマにとって気分転換にもなるのか、彼からは文句の一つもない。

ゾンビは倒すのには時間がかかるが、今はそんな必要も特にない。動きのノロい彼らを少し遠ざける、逃げるを繰り返す彼にとってはうるさいくらいがちょうどいいのだろうか。

ちなみに今話題に上がっている『必殺技』とは主に戦闘・魔法系の技能Lv2以上の者が開発・習得可能な大技のこと。

大意として、その人物にとっての最高の攻撃手段である。

『三日考えて出来るようになった』とか『一日練習したら剣から衝撃破が出るようになった』など、実に才能頼りの能力である面が伺える技である。

これは例えばとある流派とか、そこで教わる攻撃手段とか、そんな

ものとは一線を描く威力や攻撃範囲を誇っており、才能のない人物はたとえ天地がひっくりかえるような事が起こっても習得できない技能である。

それを使用したということは、やはり択一した実力を彼女は持っていたという訳だ。

「正面から戦ってたどうなったかわかりませんでしたね」

「ケケケ、俺が負けてたってか？」

「いえいえ、どっちにしてもリユーマさんが勝ってたと思いますよ」

意外な返しに少しおどけた様子のリユーマ。

てつきり非難でもされるところでいた彼女にとって、彼女の言葉は予想外であった。

「落とし穴なんて面倒な真似した訳だって何かあるわけですよね？」

そこを教えてくださいさったらおねーさん、喜んじゃいますよ」

「まア暇でもあったらな。

ンなことよりナガサキ、意外に胸あるじゃん」

「……セクハラですよ」

じつとりとした、薄く開いた目から突き刺さる視線に怯むことなく歩みは進む。

結構な時間二人で居る訳であるが、別段息苦しいという訳でもなく、友人同士のような関係を作っていたシュリとリユーマ。

からかいからかわれ、ケタケタ雑談を交えながら歩みはさらに進む。

「んんっ……ああっ……」

それを止めたのは、耳に飛び込んだ艶っぽい喘ぎ声だった。

「よっし、見に行こうぜエ」

「ちよっ、リユーマさん、不味くないですか？」

「静かな湖畔の森の影から、男と女の声がする、ああんっ、いやん、奥はダメっ」

「……やっぱりセクハラですね」

と、言うてはみるものの、リユーマの背中にいるため必然的に出歯亀をしてしまうシュリ。

興味はやはりあるらしく、墓石の脇に姿を隠し、顔を乗り出してみた。

「あなたっ……あなたあ……」

声を上げていたのは喪服姿の、妙齡の美女。

肌蹴た胸は色つぽく、その先端からは母乳が漏れ出している。

「……うっっ、うっごああっ……」

そして彼女を抱え上げていた相手は腐った皮膚を剥き出しに、必死に腰を揺り動かすのは魂の消えた、肉体だけの存在だった。

十八戦目（後書き）

カタナさんは22歳

十九戦目（前書き）

好みはうるさい方なリユーマ

十九戦目

二回戦へと突入し始めた大会六日目、リユーマは毅然とした態度の女性に睨みつけられていた。

命を落とした冒険者たちを弔う、『教会と貯水池』にある墓地。

そのとある一角、石造りの墓の前で、小さいながらも鋭さをにじみ出させるナイフを手にした一人の女性。

黒い喪服姿の、『千代』という名の彼女は手にした凶刃をリユーマに向けた振りかざす。

「貴方がっ……、貴方があの人を……！！」

涙で頬を濡らし、我武者羅にそれを振るう。

想いの籠ったそれを後退しつつ避けるリユーマ。

やがて壁に背を付いた彼の胸元に小さな凶器は突き立つ。

鈍い痛みがリユーマを襲う。

だがそれを意にも返さぬ彼は、柄を握り込んだ細腕を取り、千代を力づくに引き倒した。

「なア、なんでデメエは怒ってんだ？」

アンタ襲ってた肉の塊叩き斬っただけだろうよ」

「違っツ、あの方は……あの方は私の夫なのに……！！」

ようやく、ようやく、ようやく再会できたのになんであなたは邪魔をしたんですかッ!？」

リユーマの身体の下、もがく千代の瞳は妖しく光る。
人間としての倫理とか、道徳とか、そんなものを何か別のモノの為
に捨て去ったような狂気を孕んで。

しばらくの間シュリとともに二人の行為を出歯亀をしていたリユー
マ。

が、突如繋がっていた二人の前に現れ動く死体を一刀の下に切り捨
てたのだ。

傍目から見れば彼はモンスターに襲われている婦女子を助けた訳で、
何の非難も受ける理由は見渡らないはずである。
だが千代はしばし呆然とした後、肌蹴た胸を隠そうともせず懷に忍
ばせていた短刀でリユーマに斬りかかってきた。

「神の思し召しを……再びあの人に触れられた奇跡を……どうして
あなたに阻まれねばならないんですッ！！」

「あの人、夫、アレが？」

……ククク、ケケケケケケケッ、ハーツツハハハツハツハ
ッ！！！！」

千代の言葉を信じるならば、今だ蠢くアレは彼女の夫らしい。

元冒険者で、この迷宮の探索を行っていたらしいがモンスターの襲
撃により敢え無くその命を落としてしまったそうだ。

結果未亡人となってしまうた彼女はたまたまAL教支部のあったこ
この墓地に夫を埋葬し、毎日欠かさずその世話をし続けているのだ。

聞けば一途な妻の美しい話であるが、リユーマは何がおかしかった

のか大爆笑。

大きな笑い声を隠そうともせず、ゲラゲラ下品に晒う。

「くだらねエ、くだらねエ、くだらねエなアッ！」

思い出に逃げて過去に固執し、今も先も見ようとしねエ……。

だから惚れた相手の顔もわかんなくなっちまうんだよオッ」

「なッ……、貴方に何がわかるというんですかッ!？」

「知るかなの」

飛び出して来たりユーマの言葉にズルツとコケてしまうシュリ。

てつきり千代を慰めるか戒めるかすると思っていたのに、とんだ予想外である。

何度も述べるようであるがゾンビとは魂の無くなった肉体だけの存在だ。

肉体という器に魂が入り込むこむによって人やモンスターは意志を持ち行動できるというのがAL教の教えであり、だからこそ器だけの存在は愚かで、忌むべき存在なのである。

故に元の魂が本能のみとなった器によりその輝きを穢さぬよう、彼らはゾンビたちをいち早く砂に歸し消滅させようとする。

その事を懇切丁寧に教え込んでやるのか、と少々期待していたのだが裏切られた気分だ。

「俺はただ…… テメエの身体ゾンビ如きにゃあもったいないと思っただけよ!」

ひどく男らしい発言ではあるが、最低な発言である。

先までの行為で滲んでいた母乳を、リユーマは乳房に口を近付け一
気に吸い上げた。

「いやあつ、やめてっ……んんっ！」

「ケケケ、甘い声が出ちゃってるゼイ？」

覚えている訳ではないが口に広がる懐かしい味。

リユーマは倒置的な欲望がむくむくとわき上がり、下半身へと収束
していくのを感じた。

本来なら二回戦勝利ということで彼はクナイを抱いていたはずであ
る。

だが何の因果かカタナに邪魔をされ、来る必要もなかった迷宮へと
足を運ぶはめになっていた。

完全に『女を抱く』という思いに傾いていた彼の心であるが、それ
を阻止されたとなれば行き場のない欲望はどこに行けばよかったの
だろう。

加えてリユーマの背中を押していたやわらかい双子山もまた、その
欲望を加速させる。

しかし加速させるだけさせといて、ここでシュリを押し倒して大会
失格となる訳にもいかず、頼みの綱という事でやって来たポロロム
の教会でもナクトの大怪我により志半ばでそれも落ちた。

まだ治療中で無ければナクトなんぞ無視してその場で押し倒しても
良かったのだが、すでにお帰り盆栽まで彼の懐から暴き出して、そ
の枝を折ろうとしていたところだった。

ポロロムもまだAL教シスターとしての自覚はあるらしく、早口で

まくし立てるととつとどこかに行ってしまった。

簡単に言えばリユーマの息子は限界であった。

そこに極上の餌が舞い込んで来た。

器量も身体つきも実にすばらしい、花丸をあげたいほどに。

乳房を絞り上げるように揉みしだくと、先端から飛沫のように母乳が飛び散る。

それを手の平に溜めると、わざとはしたない音を立てて飲む。

唇の端から白い液体を垂れ流し、不遜に口元を釣り上げるリユーマには何所か妖艶に千代の目に映った。

思わず頬が赤くなる。

同時に乳房に受けた刺激により流されかけていた意識をハッと取り戻し、黒い喪服でそこを隠そうと躍起になった。

「あつ……ああ、いつ、やめっ……て……」

「……なア、アンタ売春してるらしいな。

金がいる……何の為だろうねエ？」

リユーマの太い腕を千代のか細い腕で止められるわけもなく、彼の蹂躪は続く。

乳房を撫でていた無骨な手の平は、やがて段々と下へ下へ侵攻する。

「墓の世話をするためだろ？」

いや、身体売ってまで世話されるなんて愁傷なことって、アレも

喜んでるんじゃない？」

「えっ……いあ……ああっ」

リユーマ向けた視線の先、そこには体を真つ二つに割られてもまだ蠢くゾンビがいた。

思わず顔を青くする千代は彼を拒むために徹底的に攻勢の姿勢を見せる。

だがそれは彼女の頭の中だけで、すでに先ほどの行為により体を火照らせ濡らしきっていた千代にリユーマを拒む事は出来なかった。弱々しく震える手はやさしく彼の胸板を押す。

それはかつて触れた夫などより幾倍も硬く分厚く、強い男の香りが千代の鼻孔へと飛び込んできた。

その時、千代の身体はふわりと宙に浮いた。

力強いリユーマの両腕に抱かれた彼女は、とっさに彼にしがみ付く。だがそれがいけなかった。

先ほど以上の強い雄の香りが千代の脳内を侵食する。

これまでに身体を開いたどんな男よりも強烈で苛烈なニオイ。

今だ胸元に刺さった短刀より流れる鮮血も色つぽく、自分の体の奥からさらに熱いものが溢れてくるように感じる。

「……じゃあさ、こうなったらどうするよ？」

千代の中の変化に気付いていないのか、リユーマはずいずい歩みを進める。

そして割れたゾンビの前に立ち止まると、躊躇い無くその頭を踏みつぶした。

「……いや……い、やあ……、……あな……た……」

「カテナイ亭ってここに俺はいる。」

買って欲しけりや、テメエの人生ごと残らず買い取ってやるぜい」

パツと力を抜かれる事で千代はグシャグシャに潰れた腐った肉の絨毯の上に転がされた。

彼女と鼻先が触れるか触れまいかという距離で、リユーマはにっこり笑うとクルリ踵を返す。

そうして墓石の後ろ、真っ赤な頬をしたシュリをひょいと担ぎ上げると、振り返ることなく墓地を後にした。

「昼間は失礼を、そして感謝いたします」

「姉共々、リユーマどのには何と言ってよいか……」

シュリをコロシウムへと連れ帰り、カテナイ亭へと帰って来たリユーマは目の前で土下座をする姉妹相手に偉そうにふんぞり返っている。

ステラはややこしくなりそうなのでマルデの下でお夕飯、しっかり夕食代を取られた。

八雲はリユーマの後ろにちょこんと正座し、ハラハラと事の顛末を

見守っている。

……視線の半分以上は恥ずかしそうに伏せ眼になりながら、彼へと注がれているのだが。

「リユーマどのおかげで、私たちの仇の手がかりが見つかりました」

「そか、じゃあ礼しろ今しろ身体で払え」

「はっ、恥ずかしながら……」

「ちえんじで」

彼女ら、白井カタナ・クナイ姉妹の話を纏める、と父の仇の手がかりがつかめたという事だ。

二人が人類存亡危機的状況の今、ここに来た理由はそのためであった。

現在非魔法使いたちにとって、娯楽の地となっている闘神都市を中心とする一帯。

主にここから非魔法使たちへの情報などは配信されている。

魔法ビジョンの番組も新聞も雑誌も、この一帯がその根幹をなしているのだ。

そのためこの一帯は非戦争地域となっている訳であるが、その話はここら辺にしておく。

まだ魔法使いたちの利用する技術のすべてが非魔法使たちに行き渡っていないため静止画しか、魔法ビジョンによる番組をお届けする事は出来ないのだが、それにより二人は一年前の闘神大会である事実を知ることとなった。

十年前、幼い姉妹から父を奪った男が使っていた魔のアイテム、それを持つ者が闘神大会の準決勝まで勝ち残ったというのだ。

アイテムの名は『夢ノート』、名前を書き込まれた者は死亡するという卑怯極まりない効果を持っている。

その所持者『ウイング・シードマン』は父の仇よりもずっと若く、同一人物である可能性は低かったが、父の仇を見つける手がかりには違いなかった。

かくて昨年の大会でベスト4入りを果たしたシードマンは、来年度の大会への出場を既に表明していた。

故に彼女は同じ大会への出場を決意したのである。

そしてどうも近寄り難かったのだが、とあるきっかけにより彼との接触が出来たのだ。

それは昼間に行われたリユーマとカタナの追いかけて、その最後人身御供にされた冒険者こそシードマンその人であった。

とっさの判断で彼に直撃させることを防ぎ、そのまま思いの丈をシードマンにぶつけたカタナ。

それにより父の仇と思われる人物の名前を彼のパートナーの少女、夢ノートを持って倒れていた『アオイ』から聞き出したのだ。

尤もアオイは記憶喪失だったらしく、唯一覚えていた『ダル・ゴルチ』という名前のみしか手がかりを得る事は出来なかった。

だがそれでも十年間でたった一つの手がかりである。

二人にとっては天啓であった。

「……俺ンとこ来る理由ねエだろ」

「いえそれは……一角の武人でありながら、その……逃げるなどと

いう卑怯な真似をした事が……」

「あア、俺に文句でも言いに来たのか？」

「違います、逃げたのは……自分で……」

そう告げるとカタナは持ち上げていた頭を床に擦りつけんばかりに下げた。

「どうか、この卑怯な私に一時の情けのお恵みを」

要は昼間はこっちが悪かった、だからお仕置きしてください、というところ。

薄い眼でカタナを見つめるリユーマ。

その視線に気付いたのか、クナイもまた頭を下げる。

どうやら彼女も自分を捧げるようだ。

まあこれがルール上普通な事である。

すでにルールを犯し、二人共に闘神としての無償労働が確定しているのだが、やはり元々真っ直ぐな気質なのだろう。

カタナの言葉に俯いていた八雲はチラと二人に視線を移す。

背後に見える心の文字も、覚悟を決めているようだ。

何となく、何となしに、理由はまだ分からないが胸が詰まる。だから向けたくて向けられなかったリユーマへの眼差しは、彼の声を聞いた事でしっかり視界のど真ん中に捉えられるようになった。

「やだ」

「なっ、何故ですか!？」

「私もお姉ちゃんも、本気で……覚悟も……!」

「そだなア、投げやりな感じが興奮しねエ。

ンなテメエらに無駄打ちするよか……イイのがどうやら来たみたいだからなア」

そう言うところ、リユーマは立ちあがり、腰に日本刀を差す。

立ち上がるうとしていた八雲を手で制し、扉の方へと歩みを進める。

「次会う時にやあもちつと色気つてもんを考えとけ、処女姉妹」

扉は閉まり、リユーマはカテナイ亭を後にする。

ふうと夜の冷たい空気を吸い込んで、通りの陰に隠れた女に向かってニンマリ、三日月のように口を歪めてみせた。

十九戦目（後書き）

最後の女性はあの方

二十戦目（前書き）

妙な感じはやはりぬぐいきれない……

二十戦目

くゝと欠伸を一つ落とし、リユーマは見知らぬ天井を見上げる。
Japan風の家屋、畳の上に曳かれた布団をはねのけて、鼻孔を
くすぐる匂いの下へと歩みを進めた。

黒の喪服ではなく紫陽花色の美しい着物に身を包んだ女性は、小さな台所の前でトントンとまな板を叩く。

きざんだ野菜を鍋の中に入れて、自家製味噌を足して少しかき混ぜ、小さな皿にそれをほんのり、上品に口元に運び味を確かめた。

揚々、上出来な味に胸を張り、米に魚に豆腐におひたし、いかなごの佃煮と料理をちゃぶ台へと並べる。

箸はいつものように二膳、いつもとは違い目の前の茶碗からも白い湯気が立ち上っていた。

「白飯に味噌汁、豆腐に佃煮……イヤイヤわかってんねエ」

台所から襖一つ越えた先の茶の間に、男は無遠慮に足を踏み入れた。鋼のような肉体を惜しげもなく晒して、腰に褌が一つ巻かれている出で立ちで。

「……おはよう……」

昨夜の情事を思い出させるように彼の胸元に残る、赤い印に諮らずとも千代の顔は赤くなる。

夫の墓を世話するために身を開いたどんな男よりも、記憶の彼方にある夫との事よりも、はしたなく牡を求めた自分の牝。それは自己嫌悪に千代を陥らせ、同時に彼女の中にあつた操に対するの観念というモノを打ち壊していた。

千代もまたJapanの女性であり、貞操観念は強い方だ。

だが冒険者を志していた同じ村の夫の姿に心奪われ、夜逃げ当然で大陸へと渡つて来た。

結局のところ彼女の夫には大した才能がなかったため迷宮で命を落とすこととなつてしまつたが、その四年前までは他の男など知りもしなかつた。

夢に向かうその姿に少女時代からの初恋が絶妙なさじ加減で混ぜ込まれ、心底惚れて彼女は真つ直ぐに彼を見続けていたのだ。

しかし死んでしまつてから、彼女の人生には暗い灯が堕ちていた。

世界は色を失い、貯蓄を切り崩しながら夫の墓の前で泣く毎日。

単調でつまらない人生が千代を蝕んでいた。

内へ内へと籠つていた千代であるが、そうも我儘を言っていられない事態というものは訪れた。

貯蓄は無くなり、手元にある金品の類はすべて夫との思い出の品ばかり。

今居るこの家だつて、彼が自分の為にと建ててくれた一品だ。

どうしても、彼女はそれらを捨てる事が出来なかつた。

その結果、千代は売春という行為を思いついた。

夫以外に一度と無く……いや、たった一度だけときめいた事のある胸を押さえて、彼女は股を開いた。

金額も大したものでなく、女一人ならば一週間なんとかなるか程度で。

まだやはり思い出を捨てきれないのか、夫の面影を持つ男を探して。

「相も変わらずイイ腕……うむ、うまいぜイ」

「ふふつ、そう言ってもらえとうれしいですね」

もしかもしや朝食を掻き込むリューマに思わず千代の顔はほころぶ。

「……そういえば……貴方は何故こんなところに？」

「さア、ンなモノどっちでもイイだろうが」

「そうかも……しれない、……なんて言える場合じゃ」

「イイの、俺がイイって言ってる、これがすべてだろうよ」

鋭くなったリューマの視線に思わず萎縮する千代。

実はこの二人、会合も情事も初めてではなかった。

彼女の夫がいまだ存命の時に幾度か会った事のある彼女が夫を失い始めての売春に選んだ相手、それがリューマだった。

思い返せば時の経つのは早く、もう三年近くが経過している。だが今もまだ彼女の秘所は彼の息子にぴったりと合致した。

ホントかウソかはわからないが、男を愛する女の性器の構造は、その男をガッチリと受け止められるようなものへと変化していくらしい。

生物として効率的に精子を受け取り受精するために起こる現象で、まさしく生命の神秘というやつである。

これには肉体的快楽と精神的快楽、二つが合わさった時にこそ発生するらしく、幾分感じが違うと思ったならば精神的にも傾いている浮気が起こっているという訳だ。

何が言いたいかというと、要は夫を失って一年少したったころには千代の心はリユーマに傾いていたということ。

彼女が聞けばすぐさま否定するだろうが、本心はやはり彼女にしかわからない。

ともかく二人には面識があつて、今リユーマの周りの人間は誰も知らない彼の過去を千代は知っており、アレだけ酷い真似をされたにもかかわらず彼女は彼を受け入れた。
この事柄たちだけは変えようのない事実である。

「ごっつそうさん、じゃあ俺は帰るぜ」

「あつ……」

素っ気なくも目の前の食物を平らげたりリユーマは、いつものように白い着物を着ると刀を差して長屋のような家から出ていった。

小さく上げた千代の声は彼に届く事も無く、外と内を隔てる壁に当たり墜落した。

カテナイ亭のリューマの部屋の中、目の前にいる二人にリューマは口をあんぐりと開けた。

申し訳なさそうニガ笑いとともに、こちらに意味ありげな視線を投げかけてくるのは白井姉妹。

「帰れ、失せろ、寧ろ死ね」

「リューマさん、そんな風に言わなくても……！」

「……何様だ、テメエは……？」

辛辣なリューマの言葉に思わず食ってかかった八雲。
しかし胸倉をグイと掴み上げられ、足が畳から離れていく。

「何で俺がこいつらの脱走なんて手引きしなきゃならねんだ……？」

いつからテメエはそんな事安請け合い出来るまで偉くなったんだ……、なア？」

昨日リューマの心が見えたことなど嘘のように彼の後ろには無言の空間が広がる。

心なしか、どこか淀んだ禍々しいオーラのようなものまで見える始末。

鋭い視線と伶俐な態度は自分を攫ってきて会合した初めての日、と言ってもまだ一週間ほどしか経っていないというのに遙か昔の出来事のように思えた時と寸分違わぬものであった。

少々傍若ながらもある程度の気配りのようなものを八雲相手に見せていたリユーマ。

無碍に畳に彼女を転がす彼の姿に思わずカタナはリユーマに向かうと腰を上げる。

だがそれよりも速く、彼の手にした日本刀の切っ先はカタナの眼前へと突き付けられていた。

「それ以前に何で俺のところに前らは来たんだ、あア!？」

脱走、大いに結構、勝手にやってくれ……俺にやあ微塵も関係ないんでねエ」

「利ならばある！」

もとはクナイを救うために用意した3万GOLD、これを貴方に差し出す!!」

「金の問題じゃあねエんだよ、ダボがッ！」

だったら妹救ってテメエがワビ入れに行けばすべてお仕舞いな話だろうよ、……テメエの都合で俺を巻き込むなや……」

「だが元はと言えば……」「勝った俺が悪イなんざ餓鬼の戯言、言っんじゃねえぞ?」……っっ!」

カチと刃を下げ、リユーマはカタナの黒髪を握り上げる。

大会に出るということは皆が皆、それなりの覚悟を決めているとい

うこと。

出場者は死ぬかもしれないし負ければパートナーを差し出すかもしれないということ、パートナーは負ければ蹂躪されるかもしれないということ。

承諾が事前にしる事後にしる、勧んでにしる無理矢理にしる、この場で試合に出てしまったそれぞれに突きつけられ受け入れねばならない事実はたった一つだ。

『負けた対戦相手のパートナーは闘神都市で無料奉仕、問題を起こした出場者は即刻失格』。

唯一の非魔法使いたちに解放された公認の娯楽都市、戦争とは無関係に過ごせる一帯の中心。

『平和』と『快樂』と『栄華』の象徴ともいえるこの場所だからこそ、厳しいルールによって縛られている。

だからこそルールはプライドより、金より、道徳より、倫理より、何よりも重い。

『強者こそ正義』という子供でも分かるような理屈をルールの根幹とするからこそ誰にも縛られることなく、非魔法使いたちが心の底から楽しめる場となっているのだ。

ここまで今は深刻な事態となっているがぶっちゃけてしまえばリユーマが気のせいっスね、とでも言えば終わる事柄だった。

カタナが暴れまわって、公共のものや個人のものを破壊する前ならばだが。

試合が終わりカタナがクナイを一応差し出した時点で、とりあえず闘神大会に於けるカタナを縛るルールは消える。

落とし穴に落ちて負けたなんて言う悪評は付いて回るかもしれないが、彼女は自由の身だ。

あとは一晩我慢してしまえばすべてが終わるはずだった、だったのだ。

だがまあいろいろあつて、ごく簡素に言えば沸点超えた単細胞でどうしようもないお嬢さんが一人いらして、気がつけば彼女のもとにゼロが見るのも嫌になるくらいの請求書が届いていたということ。

そもそも3万GOLDは当初の主人公、ナクトノ発言にもより凄まじく高価なお値段のようにも思える。
が、実はこれ、そこまででもない。

ランスらの生きる時代ならば一般人の年収は約4万GOLDほど、リユーマらが生きる今ならば非魔法使いである一般人の年収は約1万GOLDほどだ。

三年分と考えれば酷く多くも感じるがあくまで平均、そこそこの冒険者ならば一年ほどで稼ぐ金額。

加えて世界中が戦争ムードなため聖眞教団の経済事情自体は潤っており、最前線ならばこれまた一年ほどで稼げるお値段だ。

といっても冒険者も戦争もお金がかかる。

食事やら武器やら防具やら道具やらで半分以上が消え、博打やら女やらに湯水のようにお金を使う性格の者たちが多い。

結局一年終わって手元に残るのは雀の涙程度。

カタナやクナイはそこまで呆けた使い方はしなかったが必要経費以外金銭の類を受け取ろうとしなかった。

実に素晴らしい精神ではあるが、結果として搾り出せるお金というものは目の前の3万GOLDのみとなっているのだ。

つまりすげー金額の賠償請求 お金ない けど早く戦争しに帰らないと でもお金ない 踏み倒そう 手伝ってということだ。

今ここ

「手伝つてくださねば犯されたと有らぬ噂を流して回ります」

「ケケケ、ご勝手にいゝ」

「あつ、明日からまともに外を歩けなくなりますよ!？」

「俺、ンなもの気にしねェし」

「でっ、ですがっ「お姉ちゃん!」……クナイ……?」

「私がここで代わりをするからお姉ちゃんは戻って!

早くしないと……本当にこっちまで攻め込まれてしまつかもしれないのにつ……」

「ならば私が「三文芝居は外でやれ、ウゼエ」……だったら何か考えをくれてもよいではありませんか!!!」

ついに逆ギレである。

この場限りのことを言えばリユーマは何の非もない清廉潔白、叩けど埃のほの字も出てこないほどに。

だが彼女たちの中では本気で切羽詰まった状態。
行きようのない気持ちは爆発し、ついには矛先をしっかりと彼へと
固定してしまった。

親の仇を睨み殺さんばかりに鋭い視線のカタナに、リユーマはついに
キレた。

「……そうか……ちょうどいい、ステラもそろそろ行かにやあなら
んかったしなア」

鞘の中に納められていた白刃は刹那、空気に触れる。
ボトリと肉が畳に落ちる音とともにカタナの手の手甲、魔法印の押さ
れているはずの場所は決り取られていた。

「があっ……ああああああああああっ!!」

薄皮一枚なんてヌルイこと言わずに指の付け根から肘まで、骨が剥
き出しになるように綺麗にその肉は剥ぎ取られた。

「これでデメエの戦争行き片道チケットを取ってやるよ。

…… 八雲、蹲ってる暇がある前にステラ呼んでこいや」

ペロリ切り身となったカタナの腕の肉を手に取りひらひら、彼は呆
け口を押さえる八雲の首根っこを掴み上げ部屋の外へと放り出した。

「余計な音、立てんじゃねエぞ。

バレようが俺には何の被害もねエンだからな」

掴んだ肉片を床に落とし、グジャリ踏み潰したリユーマは何の感慨も抱いていないようなガラス玉のような瞳で倒れ伏す姉妹を見ていた。

二十戦目（後書き）

千代とリユーマ、過去に関係あり、確認

二十一戦目（前書き）

今回もいまいち上手くいかない……

難しいですね、小説書くって

二十一戦目

『うし』と呼ばれる生物が存在する。

丸っこい赤い体で猫のようなヒゲと一本の角があり、みゃーみゃーと鳴くこの世界において最もメジャーな家畜だ。

うし車などの移動手段として多方面で広く使われる反面、女の子モンスター的一种『うし使い』の相棒も務める。

その大きさは馬サイズから象めいた大きさまで様々で、主に都市間の一般的な交通手段として『うしバス』がある。

勿論、この闘神都市にもうしバスは存在し、東西南北すべての方向へ向けて運行を行っている。

その内の一つ、西の魔人領方向へと向けて歩を進めるうしバスの停留所にいくつかの影があった。

二つの大きな麻袋を足元に置いた女性と少女、彼女らと向かい合うように立った男が一人と女が二人。

着物姿の千代は丁髷頭のリユーマに向けて頭を下げた。

「では私は……行きます、あちらの方へ」

「それがいいさ、ガキ置いてここまで来るってのがまず間違ってるだろうが」

「そう……ですね。」

母親として、私は決してしてはいけないはずの「あ、長くなる？ だったら止めて」……ふふっ、そうします」

千代の言葉を遮るリユーマに笑顔を返した彼女。

母乳が出る、という事はそれなりの年頃の子どもがいる訳だ。ちよっと体質が特殊らしく、子供が生まれて三年以上経っているのだが未だに溢れるように出てくる。

精神的なものが恐らく影響しているのだろうが、その話は一先ず置いておこう。

千代は友人に子供を預けて大会の前後三ヶ月ずつの間、闘神都市の家にて生活を続けていた。

彼女の夫もまた大会の出場者で、その時のパートナーが千代であった。

結局予選敗退で、どうせならという事でマビル迷宮に潜っていたのだがそこで命を落としたということである。

そんな訳で千代にとって大会は特別な意味を持つ行事なのだ。

娘に悪いとは思っていても、どうしても自分の中の女に逆らえず、そこへ足を運んでしまう。

自分はダメな母親だとは常に自覚していても、勝手にそちらへと足が動き、気がつけばいつもの場所へと赴いているのだ。

「あの……千代さんはどちらまで？」

「私は『骨の森』の近くまで。

今、空の闘神都市は『サーレン山』の方へ数が多く偏っていますから……」。

非魔法使いたちの本陣はそちらにあると思うので」「

「つちよ！　つてことは千代さん、戦争に参加するんですか！？」

「まあ、お金を稼ぐにはそれが手っ取り早いですし……」。

二度と行かないようにとは思っていたんですが、売春は……もう」

チラとリユーマへと視線を移す千代。

八雲と羽純はそんな彼女に気がつかないくらい、ポカーンと美少女の顔が崩れるほど口を大きく開けていた。

まさか虫も殺せないように見えるこの美人さんが、あるうことが戦争に参加しようかというのだ。

剣を携え魔物に向かう。

槍を片手に屈強な男たちと肩を並べる。

弓を引き絞り必殺の矢を放つ。

魔法を使う怪しげな魔女、というのが失礼ながらなんとか一番簡単に想像できたが、ならば向かう先はまず『ゲート』であろう。

どちらにせよ目の前の彼女が『闘い』という行為に身を置くという場面がまるで予想もつかない。

ちなみにここで言う『ゲート』とは文字通り空の闘神都市と地上をつなぐ輸送システムのことである。

魔法使いと魔鉄匠たちのみが通過を許された、大陸に全部で二十四個存在する転移魔法陣。

最新式の鉄兵たちによって守られた、陸と空を繋ぐ唯一の通路だ。

元々兵器であることは機密であった空中移動要塞『闘神都市』であるが、対魔人用に作られただけあってその防御システムは極めて優

秀だ。

魔力の供給によって様々な魔法を放つ砲台や工場から生産される鉄兵。

更に何らかの手段を用いて警護用に躰けられた『ドラゴン』が多数存在している。

ダメ押しが体長3mにも及ぶ遠隔操作可能の巨大な鋼鉄の操り人形『闘神』。

これは強力な力を誇る魔人とも互角に戦えるという聖魔教団の切り札で、都市の呼び名の由来にもなっている。

30年ほど魔人と戦争を行い続けただけあって、疲弊しているとはいえ強大な武力を有している聖魔教団。

空を飛んで近付こうにも魔人が纏う『無敵結界』でも無い限りケシ炭にされる事請け合いだ。

ともかく彼女は戦争の場に向かおうというのだ。

『骨の森』と『サーレン山』は両方とも地名のことで、前者は大陸の西南部に位置する膨大な広さを持つ森のことである。

魔人領と人間領を分ける境目にもなっており、気を抜けば熟練の冒険者も容易に迷い、魔物の餌となることが約束される大陸最大の森林地帯なのだ。

さらに幾体かの魔人たちの住居でもある城まであるというのだから、そこを守る魔物たちの層は厚く強大であるということが窺える。

後者は大陸西北部に位置する、岩肌の露出した枯れた山。

頂上に『ヒララレモン』いう不思議な木の実を実らせる木があり、大陸有数の高度を誇っている。

魔王の住む城、『魔王城』もまたこの辺りあるのだが、最高戦力で

ある闘神都市を集中させているという事は、一大決戦を行う心積もりなのだろうか。

「そいやあさ、戦線つつとどこまで行つてつかわかるか？」

「いえ、私はもう離れて数カ月経つてますから、どのあたりという……具体的なモノまでは」

「……『引き裂きの森』にあつた我々の陣地はすべて破壊された。

せつかくあそこまで進攻していたというのに……第一あの方たちがやる気をなくして引つ込持ったのがそもその問題だ！！

最高戦力とはいえ人一人死んだくらいで……最近プロヴァンス様がバーコフ様が交代に一人ずつしか出て来ない！！

勝ちはまだ無いかもしれないが一軍を率いるm「黙つてろ、このダボ！！」「ごぶっ！？」

突如として声を上げた麻袋目掛けて足の裏を叩きつけたリユーマ。むせかえすような声が聞こえたあと、それはぴくぴくと震え始めた。

「……犯罪だつてわかつてんのかねエ、こいつは」

「すみませんすみません、姉さんには後でしっかり言っておきますから！！」

「デメエも黙れ」

「……」

ギンツと効果音でも付きそうな勢いで貫かれたもう一つの麻袋は、
ぴたりと静まり返った。

怪訝な目でこちらに視線を寄越す人々を、厳つい目線で退けた彼は、
煙管を取り出し火を付ける。

吐きだされた紫煙はゆらゆら、辺りを漂っていく。

「……いよいよ人は終わりかもしれませんね」

「ケケケ、だったら俺は逃げるぜイ。」

J a p a n かどつかにでも隠れ住んじまわさア」

「でも……それだったら他の人が……」

「俺は俺の大事なもんが大事……おわかり？」

至極真つ当な意見に思わず八雲は口をつぐむ。

『人を助ける』という行為は素晴らしいことこの上ない。
だがそんなもの出来るのは強い力を持っている者だけだ。

腕っ節や心など、いくつか種類はあるかもしれない。

折れない朽ちない曲がらない、そんな何かを身体が貫いている者だ
けが偽善なんてきつと出来るのだ。

だが自分にはとてもじゃないが備わっていない気がする。

攫われた自分にある特別な力。

コレを使っただけできつと自分は無理だろう、そんな考えが頭をよぎ
る。

そしてそこで、八雲はふと違和感に気付いた。
今までならばそんなリユーマの言葉に難色を示していた自分の心が、
何故だがそんな風に振れていないということに。
むしろ嫌がっていた偽善を捨て去るという行為に、何ら違和感も不
快感も感じていなかったのだ。

「どうかした、八雲？」

「あ……うん、何でもないから、大丈夫だよ」

そう羽純に返した八雲はそんな想いに蓋をする。
ピッチリ漏れ出さないようにし、八雲は再びリユーマを見つめた。

「ステラもさ、上いけるといいねエ」

「あい……頑張る……です」

ケケケと笑い声を上げて、リユーマはステラの髪の毛を乱暴に撫で
まわす。

うにゅう、と声を上げるが目を細めて、彼女はその行為を心地よ
さげに受け入れていた。

「じゃあそこまでの護衛は頼んだぜイ、千代」

「ステラちゃんには指一本触れさせませんから」

小さな子供には優しいのか、珍しく優しい言葉をかけたリユーマ。
多分ステラだからその言葉ではあるうが、どちらにせよ彼女は無
垢な笑みを彼へと向けた。

「おにーちゃん……ステラ、お願いがあります……」

もうっし車も出ようかという時間、急にステラは口を開いた。
無邪気に問いかける彼女。

「ケケケ、言ってみな」

「あい……ちゅー……してほしい……です」

「すっ、ステラ!？」

思わず大きな声を上げた八雲、そしてその隣でバツの悪そうな顔をする羽純。

実は昨日、ステラを交えた三人で一緒に寝たのであるが、その時羽純はナクトとのキスの話題を持ち出したのだ。

明日対戦するナクトの相手、幻一郎は前にも述べたがJapan出身の忍者である。

その中でもなかなかの実力を誇っているようで、とりわけ速さに於いては特筆すべきものが窺える。

前の試合など、相手に触れさせることなく勝利をもぎ取ったというのだから。

『速度』という事柄は戦闘に於いて重要視されるモノの一つ。

単純な話、速度に劣っている者が勝っている者を捉えようとするのは至難の業だ。

自分の攻撃より前に相手がその目測から外れたところに移動される。

相手の攻撃を避けようとしても行動より速く一撃が迫る。反撃しようにも既に間合いの外にいる。

よしんば攻撃が当たったとしても直撃を避けられる。

簡単に考えてもこの程度の利点はあるだろうか。

『ヒットアンドアウェイ』は簡素ながら酷く有効な戦法。捉えられないのだから意味がない、というやつだ。

研磨し続ければ『如何なる攻撃をも回避し相手を討つ』というある種、究極の闘い方を体現することも可能となってくるだろう。

つまり相手が自分より速い、という事はそれだけで脅威となるということ。

しかも今回の場合圧倒的といってイイほどの差がある。

はつきり言って正面から向かって勝てる可能性はほぼゼロだ。

ならばどうするか？

彼、ナクトは考えた。

そして閃いた。

『魔法』を利用しようではないか、と。

多種多様な魔法が存在するがその中には『範囲魔法』と呼ばれるモノが存在する。

『炎の矢』のように対一戦闘用ではなく、『火爆破』のような対多数戦闘用の魔法を用いればよいではないかと。

なるほど、戦士として通っているナクトが魔法を使えば幻一郎は油

断し直撃させられるかもしれない。

その上闘技場を丸まま範囲指定できるような魔法を放てば、当たることは確実だろう。

それで脚に傷でも負わせることが出来れば、速度を落とすことが出来れば勝ちも見えてくる……かもしれない。

「ちゅー……な」

ふえ、と首を傾げるステラ。

その小さな体をふわりと持ち上げるとリユーマは頬に唇をふれさせた。

「……ちゅー……」

「ホレホレ、ステラも」

「ちゅー……ちゅー……」

「ケケケ、可愛いヤツめ」

抱きかかえられたステラは真横にあるリユーマの頬へと唇をふれさせる。

一度、二度、三度。

さらに頬を擦り寄せる彼女は唐突に唇に振れる何かを感じた。

プルプルとやわらかく心地よい。

でも段々とそこから熱が生まれ、ほんのりホカホカ心があたたくなる。

「続きはまた今度ってヤツだな。」

ま、テメエなら大丈夫だろうけどさ」

「……あい」

地面に下ろされ、くしゃくしゃ撫でられる頭に小さな手を添える。なんとなく気恥ずかしくなつて顔を俯けるステラを横目に、リユーマは麻袋二つをうしバスの荷台に放り込んだ。

さて魔法を使おうと考えたナクトであるが、彼にそんな技能は無い。今から魔法を覚えるといつてもそんな時間もあるはずもない。そこで出て来たのが付与魔法だ。

前述したとおり付与魔法により付与された武器には特殊な効果が表れる。

攻撃力増加然り、体力増加然り、防御力増加然り、そして魔法の使用然り。

だが魔法の場合、他の付与とは少々異なってくる。

付与スロットに特殊なアイテムを付与し効果を移すのが付与魔法で、その効果は対象が破壊されるまでほぼ永続的に続く。

だが魔法の場合、使用できる回数が限定されているのだ。

使いきつたならば付与されたスロットは破壊され、二度とそこに別のモノを付与することは出来なくなる。

破壊されたスロットを修復するアイテムもあるらしいが、ここでは関係のない話なのでおいておこう。

付与スロットのある武器は珍しく、ひどく高価だ。

そのうえ大抵が既に付与済みであり、空の付与スロットがあるものなどさらにその上に行く。
ならば冒険者らしく迷宮で見つけて来よう、と考えたはイイがどうも無かったらしい。

羽純と二人、途方に暮れていたがここで一つの秘密を彼女はナクトに明かした。

それが何なのか、というのは置いておくが、今直面している問題を解決するために、とあるアイテムが二人は必要となった。

そしてそのとあるアイテムを譲っても構わない、という人物にも会えたのだが代わりに条件を叩きつけられた。

『自分の前でキスをしてくれ』、それが二人に出された条件だった。

試合は明日。

今日のうちにナクトがそのアイテムを見つけて帰ることが出来なければ、その条件に従わねばならないだろう。

無論ナクトのことは、羽純自身嫌いではない。

昨日、『ナクトが嫌ならいいよ』なんて言ってしまったが、そうなればアイテムは貰えない。

だが自分の大切な幼馴染が死体と化す姿なんて見たくもない。

自分は構わない。

羽純が気になるのはナクトの気持ちだ。

（ふぁ……リユーマさんとステラちゃんキス……しちゃった。

私は、どう……なのかな？

ナクトはマニさんと……してるんだもんね）

マニに対しての嫉妬があつて、ナクトとのキスを躊躇う訳でもない。向こうもまた踏み込んで無理矢理、なんてしてこないから話がこじれているところもあるのだが、何より羽純は不安なのだ。

今の関係は心地よい、どうしようもなく。

何年も何年も、それこそ出会ったときから続いてきたカンケイ。打ち壊す勇気が、彼女にも彼にも無かった。

だから右往左往し、結局踏みとどまってしまふ。

ぬるま湯のような、そんな二人。

慣れ、というものはかくも恐ろしいという訳だ。

わからなくて、女の子だからやはり初めては大切にしたい。どうしてよいかわからない、そんな事を昨日二人に羽純は話していたのだ。

ま、二人から大した意見は帰ってこなかったのだが。

「では、行きますね」

「昔馴染みとして、死ぬなどだけは言つといてやるっか？」

「リユーマさん……ええ、ありがとうございます」

ペコリ、一礼した千代はうしバスへと足をかけた。

その隣ではステラが弱々しく視線を投げかけている。

「……八雲……おねーちゃん……」

「私、も……頑張るから……ステラだったらきっと大丈夫、だよ？」

少し呆けて、どこかに行っていた意識を取り戻して八雲はステラに目線を合わせる。

そしてほんのり濡れた頬を両手でむにとつまむ。
むにむに彼女の頬はモチのように形を変える。

「……おまじない……」。

兄さんが私にいつもやってくれた、だからステラもまた一緒に……
……また会えるから……ね」

「……あい」

そう言うとステラも千代に続きうしバスに乗り込んだ。

赤いうしはみゃーみゃーと鳴き声を上げて進んでゆく。

昼間だからだろうか、身体は少し暑かった。

二十一戦目（後書き）

物語が進まない……こんなもんなんでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5228n/>

その道、遥か遠からんや

2010年12月14日02時55分発行